平和への思い（ウムイ）

令和4年度

「平和への思い（ウムイ）」

発信・交流・継承事業

報告書

沖縄県

序

2022 年は、沖縄戦が終結して 77 年目となります。その間、時が経つにつれて、沖縄県では戦争体験者の方々が少なくなり、戦後生まれが人口の約 9 割を占めるようになりました。そのため、沖縄戦の実相や戦争体験者の記憶をどのように次世代へ伝えていくのかが、課題となっています。

一方、私達が暮らす世界はグローバル化が進み、ヒト・モノ・カネ・情報が国境を越えて行き交う時代へと大きく変容を遂げています。政治・経済・人的交流の深化に伴い、やがて人種、宗教、国籍の違いを超えて互いに理解し合う、平和な時代の到来が期待されました。

しかし今もなお、ロシアによるウクライナ侵攻等で多くの市民の命が奪われ、死と隣り合わせで生きることを余儀なくされたり、難民として逃れ、安心して生活できる場所を失ったりした人々が多くいます。そのような直接的な暴力のほか、貧困、飢餓、差別、人権の抑圧、環境破壊などの構造的な暴力が各地に存在しているのも事実です。

これらの課題は平和な社会の実現に脅威となるものであり、1 国のみの努力で解決できるものではなく、国際社会が互いに協力しながら取り組むことが重要です。そうして心穏やかで真に豊かな社会を築くことができると考えます。

このような考え方に基づき、沖縄県では、共通の歴史体験を有する近隣諸国とのネットワークの構築及び平和な社会の実現に貢献できる国際的な視野並びに平和を愛する心を持つ人材の育成を図るため、『「平和への思い（ウムイ）」発信・交流・継承事業』を実施しました。本事業では沖縄県をはじめ多くの住民が犠牲となった戦争などの共通体験を有する韓国、台湾、ベトナム、カンボジア、広島、長崎など、アジア地域の学生 35 名が集い、海外参加者とはオンラインを通して、自国のみならず近隣諸国の歴史や経験を学び、戦争の悲惨さや命と平和の尊さについてあらためて思いを馳せ、史実とそこから得られる教訓を次世代に継承していく方法について考えました。

本報告書は、『「平和への思い（ウムイ）」発信･交流･継承事業』の取り組みをまとめたものであり、沖縄とアジア諸国や広島、長崎の学生が互いの理解を深め、「平和への思い」を共有するまでを記録しています。本報告書を通じて、本事業の成果を理解していただくとともに、学校など教育の場において平和教育や国際理解教育等に活用されれば幸いです。

また、参加学生が国籍や言葉、文化の違いを超え、本事業を通じて培った「平和への思い（ウムイ）」を基に、人的ネットワーク =『平和の架け橋』を構築し、アジアだけでなく世界全体で平和な社会が実現できるよう活躍することを期待します。

最後に、本事業の実施にあたり、参加学生の募集・選考、事前研修の実施に御協力をいただいた参加国・地域の大学等関係機関をはじめ、特別講義を担当していただきました沖縄歴史教育研究家の大城 航様、沖縄県平和祈念資料館友の会の久保田 暁様、成果報告会の進行役を引き受けていただきました沖縄キリスト教学院大学の新垣 誠教授に、心から御礼申し上げます。

2023 年 2 月

沖縄県平和祈念資料館
館　長　前川　早由利

目次

序

第 1 部　事業概要

1. 目　　的 …… 2
2. 実施主体 …… 2
3. 事業内容 …… 2
4. 事業期間・場所 …… 3
5. 実施体制 …… 3
　（1）実施団体の人員配置 …… 3
　（2）新型コロナウイルス感染症対策及び安全管理 …… 4
6. 参加地域における事業実施 …… 5
　（1）参加者選考 …… 5
　（2）事前学習 …… 6
7. 共同学習日程 …… 8

第 2 部　共同学習

1. 参加者 …… 10
　（1）参加者紹介 …… 10
　（2）参加国・地域 …… 24
2. 共同学習概要 …… 25
　（1）共同学習の概要 …… 25
　（2）1 日目　開会式、特別講義、歓迎セレモニー、交流会 …… 28
　（3）2 日目　沖縄県内視察、各地域発表　（長崎、韓国、台湾）…… 42
　（4）3 日目　沖縄県内視察、各地域発表　（広島、ベトナム、カンボジア）… 64
　（5）4 日目　沖縄県内視察 …… 87
　（6）5 日目　自由討論、各地域発表　（沖縄）、ディスカッション …… 89
3. 成果報告会、閉会式 …… 116
　（1）成果報告会（シンポジウム）…… 116
　（2）閉会式 …… 124

第 3 部　事業評価

1. アンケート結果 …… 128
2. 総括評価 …… 133

第 4 部　資料編

1. 共同学習の様子 …… 136
2. 報道記事 …… 139

第１部
事業概要

1 目的

沖縄県民は 77 年前に沖縄戦という悲惨な戦争を経験し、多くの方が犠牲となった。しかし、その悲しい沖縄戦を経験した人々の高齢化によって当時の実状を伝え残すことが難しくなっており、二度と悲劇を繰り返さないために若者の平和を愛する心を育むことが重要となっている。

本事業は、沖縄と同様に、悲惨な戦争体験などを有し、体験の継承と平和構築に取り組むアジア諸国と日本の学生が共に学びつつ相互理解を深め、平和について考える機会を提供する。それにより、各国・地域の平和教育・平和活動に資するとともに、本事業で培った絆により平和構築のためのネットワーク形成と広く平和のために活動する人材を育成し、事業の成果を平和教育などに継続的に活用することを目的とする。
本事業では、目的を達成するために以下の 3 つを目標とした。

（1）各地域で発生した戦争や事件について学ぶことで、多様な視点から平和について考える機会を提供し、参加者間の相互理解の促進と各地域の平和教育・平和活動に貢献する。

（2）参加者間の絆を育むことで人的ネットワークの形成と平和に資する人材の育成に寄与する。

（3）事業成果を平和教育等で活用できるようにする。

2 実施主体

主　　管　　沖縄県平和祈念資料館
受託事業者　　特定非営利活動法人沖縄平和協力センター

3 事業内容

「『平和への思い（ウムイ）』発信・交流・継承事業」は、令和元年度に開始され、今年度で 4 年目を迎える事業である。本事業は沖縄と同様に、悲惨な戦争体験などを有し、体験の継承と平和構築に取り組むアジア諸国の学生が共に学びつつ相互理解を深め、平和について考える機会を提供し続けてきた。

令和元年度はカンボジア、韓国、台湾、ベトナム、沖縄の 5 地域からの参加者が沖縄県内に集い共同学習を行い、各地域が経験した悲惨な戦争や事件、継承について意見を交わした。令和 2 年度からは広島、長崎の 2 地域を新たに加えたが、新型コロナウイルス感染拡大防止のため沖縄県内への参集は叶わず、またカンボジアに至っては感染症の影響で事業への参加を辞退したものの、6 地域をオンラインで結び「オンライン共同学習」を実施し、平和への思いを紡いできた。

令和 3 年度そして令和 4 年度は、海外の参加者はオンライン参加、広島、長崎、沖縄の参加者は感染防止対策を十分に講じたうえで沖縄の会場で対面で参加するという、ハイブリッド形式で事業を実施した。日本国内からの参加者については、悲惨な戦争や事件について互いに発表を行うだけでなく、沖縄県平和祈念資料館、平和の礎、チビチリガマ等の視察を通じて、沖縄戦の実相をより深く感じてもらうことができた。

4 事業期間・場所

事業期間：2022 年 11 月 6 日（日）～ 13 日（日）
各地域を結んだ「オンライン共同学習」の時間は日本時間の 14：00 ～ 17：00 となっている。
台湾とベトナム、カンボジアは日本との時差があるため、各地における開始時間は下記の通り。
台湾…13：00 開始　ベトナム…12：00 開始　カンボジア…12：00 開始
場所：糸満市観光文化交流拠点施設 シャボン玉石けん くくる糸満
「オンライン共同学習」実施に先立ち、10 月～ 11 月上旬まで、各地域で事前学習を実施した。

5 実施体制

事業責任者

沖縄県平和祈念資料館　主　査　伊　波　　郁
沖縄平和協力センター　理 事 長　仲　泊　和　枝

沖縄平和協力センター

理 事 長　仲　泊　和　枝（事業総括）
事務局長　樋　口　洋　平
研 究 員　金　城　愛　乃
研 究 員　仲　本　　和

沖縄県平和祈念資料館

学芸班長　玉　城　寿　史
主　査　伊　波　　郁

（株）国際旅行社

事業部　次長　諸見里　一　壽

（株）okicom

執 行 役 員　武　田　　誠
技 術 主 任　西　　政　信
配信管理責任者　宮　城　光　司
映像撮影責任者　喜　瀬　慎　也
動画制作責任者　高　良　史　朗

（1）実施団体の人員配置

総括責任者　（事業総括・運営）
仲泊　和枝　（沖縄平和協力センター　理事長）
　令和元年度、令和 2 年度の「平和への思い」発信･交流･継承事業の総括責任者。令和 3 年度の同事業では、総括補佐として従事。加えて、沖縄戦と戦後復興について修学旅行生や外国人に対して講話を提供した実績を多数有す。

担当者①　（総括補佐、共同学習運営など）
樋口　洋平　（沖縄平和協力センター　事務局長）
　令和元年度、令和 2 年度の「平和への思い」発信・交流・継承事業にて担当者（事業運営補佐、オンライン共同学習担当）として事業に携わる。令和 3 年度の同事業では総括責任者として事業を運営した。

担当者②　（共同学習運営、広報）
金城　愛乃　（沖縄平和協力センター　研究員）

令和 2 年度および令和 3 年度「平和への思い」発信・交流・継承事業の担当者として動画制作、広報、会議運営を担当。現職以前は、2016 年～ 2019 年まで特命助教として国立大学法人琉球大学に勤務し、「太平洋島嶼地域特別編入学事業」の運営を担当。

担当者③　（共同学習運営、アンケート集計など）
仲本　和　（沖縄平和協力センター 研究員）

令和 3 年度「平和への思い」発信・交流・継承事業の参加者。大学在学中に沖縄県内外の中高生・大学生に向けて 100 回以上の平和学習を提供し、最近では早稲田大学、東京大学での講義にも登壇。また、沖縄県主催の令和 2 年度および令和 3 年度「沖縄平和啓発プロモーション事業」にてぴーすふるメッセンジャーとして沖縄県内外にて平和学習を提供した実績も有する。

（2）新型コロナウイルス感染症対策及び安全管理

事前学習やオンライン共同学習参加の際には、各地域の参加者にマスク着用を依頼し、消毒液を各拠点に設置、参加者間の社会的距離を確保したり、換気を行ったりするなどの感染対策を行った。また長崎、広島の学生が沖縄へ渡航する際には、事前の体調管理を徹底させ、渡航前のワクチン接種を推奨した。沖縄での共同学習においては、参加者の日々の体温チェックを行い、会場の定期的な換気を実施した。

6 参加地域における事業実施

（1）参加者選考

参加者の選考に関する資格要件は以下の通りとし、各国・地域からそれぞれ 5 名を選考した。韓国は令和 2 年度の本事業参加者 1 名が沖縄県内の大学に留学中であったため、同参加者については対面で参加することができた。

①原則として各募集国・地域に在住する大学生であること。
②事業の主旨を理解し、将来自国での平和教育・平和活動に携わる意思のある者で、事業参加国の若者と連携して平和発信に寄与する意思のある者であること。
③事前学習と共同学習、日本国内の参加者においては沖縄で行われる共同学習に原則全日程参加できること。

【参加国・地域における学生の応募・選考・窓口機関への委託】
沖縄以外の地域における窓口機関は、本事業の趣旨・目的を十分理解しているという観点から、令和 3 年度に募集窓口となった機関に再依頼した。沖縄県からは、実施団体が窓口となり県内の各大学に周知し公募した。各窓口機関には、参加学生の学びを提供する指導者の配置も依頼した。参加者の募集・窓口機関は以下の表のとおりである。

	対象地域	募集・窓口機関
1	日本（沖縄県）	実施団体が直接県内の大学から公募 沖縄大学、沖縄国際大学、名桜大学、琉球大学
2	日本（広島県）	広島市立大学
3	日本（長崎県）	公益財団法人長崎平和推進協会
4	カンボジア	国立トゥール・スレン虐殺博物館（大学と協力）
5	韓国	国立済州大学校
6	台湾	台湾国立政治大学
7	ベトナム	ホーチミン市師範大学

（2）事前学習

◆沖縄県

場　所：沖縄平和協力センター事務所、糸満市
実施日：2022 年 10 月 8 日、10 月 30 日、他
指導者：社会科教諭・沖縄歴史教育研究家　大城　航
協力者：遺骨収集ボランティア　ガマフヤー　具志堅　隆松

◆広島県

場　所：広島市立大学、広島市平和記念公園
実施日：2022 年 10 月 1 日、10 月 2 日、10 月 22 日、他
指導者：広島市立大学　名誉教授　水本　和実

◆長崎県

場　所：長崎原爆資料館など
実施日：2022 年 10 月 3 日、10 月 11 日、10 月 12 日、他
指導者：（公財）長崎平和推進協会　事業課　横山理子、継承課　中村綾香

◆韓国

場　所：済州大学校、済州島 4.3 事件の関連地など
実施日：2022 年 9 月 1 日、9 月 8 日、9 月 23 日、他
指導者：済州大学校　人間社会学科　准教授　高　誠晩

◆台湾

場　所：台北 228 和平記念館、国立政治大学
実施日：2022 年 10 月 3 日、10 月 10 日、他
指導者：国立政治大学　日本教育プログラム　教授　李　世暉

◆ベトナム

場　所：ホーチミン市師範大学、参加者自宅など
実施日：2022 年 10 月 5 日、10 月 7 日、他
指導者：ホーチミン市師範大学
　　日本語学部　教授　カオ・レ・ズュン・ギー

◆カンボジア

場　所：国立トゥール・スレン虐殺博物館
実施日：2021 年 10 月 19 日、11 月 1 日、他
指導者：国立トゥールスレン虐殺博物館　教育部長　ヘン・スファラ

7 共同学習日程

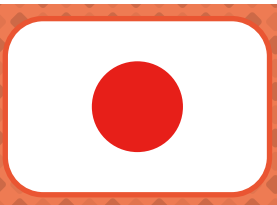
2022 年 11 月 6 日（日）～ 13 日（日）

日　付	時間（日本時間）	内　容	備　考
11 月 6 日（日）	長崎	移動	旅行社（空港で待機） 仲泊（ホテルで待機） OPAC（司会：樋口、仲本）
	広島	移動	
	沖縄	到着（ホテル 1 階ロビー）	
		交流会（日本人参加者）	
		指導者打ち合わせ	
11 月 7 日（月）	9：50	オリエンテーション会場へ集合	
	10：00 ～ 11：00	オリエンテーション	仲泊、金城
	11：00 ～ 12：00	昼食（ホテル朝食会場）	
	12：30 ～ 13：00	移動　ホテル（1 階ロビー）→会場	
	13：00 ～ 14：00	会場設営	
	14：00 ～ 14：45	開会式・自己紹介	OPAC（司会：樋口、補佐：金城・仲泊）、 沖縄県平和祈念資料館、okicom 講師：大城航（特別講義）
	14：45 ～ 15：15	アイスブレイク	
	15：15 ～ 15：30	休憩	
	15：30 ～ 16：30	特別講義（大城）	
	16：30 ～ 16：50	歓迎セレモニー	
	17：00 ～ 18：00	過去の参加者との交流会	
	18：00 ～ 18：20	移動　会場→ホテル（1 階ロビー）	
	18：20 ～ 18：30	指導者との打ち合わせ	
11 月 8 日（祝・火）	9：00 ～ 9：30	移動　ホテル（1 階ロビー）→沖縄県平和祈念資料館	
	9：30 ～ 10：30	【視察】沖縄県平和祈念資料館	沖縄県平和祈念資料館
	10：30 ～ 11：30	【講話】沖縄県平和祈念資料館友の会による講話	沖縄県平和祈念資料館友の会
	11：30 ～ 12：15	【視察】平和の礎	
	12：15 ～ 12：45	移動　沖縄平和祈念資料館→会場	
	12：45 ～ 13：30	昼食（弁当）	
	13：30 ～ 14：00	共同学習準備	
	14：00 ～ 14：50	長崎チーム発表・質疑応答	OPAC（司会：樋口、補佐：金城・仲泊）、okicom
	14：50 ～ 15：00	休憩・発表準備	
	15：00 ～ 15：50	韓国チーム発表・質疑応答	
	15：50 ～ 16：00	休憩・発表準備	
	16：00 ～ 16：50	台湾チーム発表・質疑応答	
	16：50 ～ 17：00	事務連絡	
	17：30 ～ 18：00	移動　会場→ホテル（1 階ロビー）	
	18：00 ～ 18：30	指導者との打ち合わせ	
11 月 9 日（水）	9：00 ～ 10：15	移動　ホテル→チビチリガマ	
	10：15 ～ 11：00	チビチリガマ	
	11：00 ～ 11：20	移動　チビチリガマ→嘉手納道の駅	
	11：20 ～ 11：50	嘉手納道の駅	
	11：50 ～ 12：20	移動　嘉手納道の駅→アメリカンビレッジ	
	12：20 ～ 13：50	【視察・昼食】アメリカンビレッジ	
	14：00 ～ 14：30	移動　アメリカンビレッジ→嘉数高台公園	
	14：30 ～ 15：30	【視察】嘉数高台公園	
	15：30 ～ 15：45	移動　嘉数高台公園→上大謝名さくら公園	
	15：45 ～ 16：15	【視察】上大謝名さくら公園	
	16：15 ～ 17：30	移動　上大謝名さくら公園→ホテル	
	17：30 ～ 18：00	指導者打ち合わせ	
11 月 10 日（木）	9：00 ～ 9：30	移動　ホテル（1 階ロビー）→首里城公園	
	9：30 ～ 12：00	【視察】首里城跡、第 32 軍司令部壕跡	那覇市街角ガイド、OPAC（仲泊、仲本）
	12：00 ～ 12：30	移動　首里城公園→会場	
	12：30 ～ 13：30	昼食 / 共同学習準備	
	13：30 ～ 14：00	広島チーム発表・質疑応答	
	14：00 ～ 14：10	休憩・発表準備	
	14：10 ～ 15：00	ベトナム発表・質疑応答	
	15：00 ～ 15：10	休憩・発表準備	
	15：10 ～ 16：00	カンボジアチーム発表・質疑応答	
	16：00 ～ 16：10	事務連絡	
	16：40 ～ 17：10	移動　会場→ホテル（1 階ロビー）	
11 月 11 日（金）	9：00 ～ 9：30	移動　ホテル→会場	
	9：50 ～ 12：20	自由討論（日本人参加者）	
	12：20 ～ 13：20	昼食・共同学習準備	
	13：20 ～ 14：10	沖縄チーム発表・質疑応答	
	14：10 ～ 14：20	休憩	OPAC（司会：樋口、補佐：金城、仲泊）、okicom
	14：20 ～ 16：50	ディスカッション	
	16：50 ～ 17：00	事務連絡	
	17：00 ～ 17：30	移動　会場→ホテル（1 階ロビー）	
	17：30 ～ 18：00	指導者打ち合わせ	
11 月 12 日（土）	9：00 ～ 9：30	移動　ホテル→会場	
	9：30 ～ 12：00	成果報告会事前準備	
	12：00 ～ 13：00	成果報告会リハーサル	OPAC（司会：樋口、補佐：金城、仲泊）、okicom
	13：00 ～ 13：30	昼食	
	13：30 ～ 14：00	成果報告会準備	
	14：00 ～ 16：30	【成果報告会】プレゼンテーション、パネルディスカッション	OPAC（司会：樋口、補佐：金城、仲泊）、okicom
	16：30 ～ 17：00	来場者退場	
	17：00 ～ 18：00	閉会式	OPAC、沖縄県平和祈念資料館
	18：30 ～ 19：00	移動　会場→ホテル（1 階ロビー）	
	19：20 ～ 20：30	夕食会	
11 月 13 日（日）	長崎	移動	旅行社（諸見里）
	広島	移動	

第２部
共同学習

1 参加者

(1) 参加者紹介



広島
Hiroshima, JAPAN

FUJITA Nanoha

名前
藤田 那乃羽

所属
広島市立大学 国際学部 1 年

自分を表す 3 つの言葉
素直、心配性、地元大好き

コロナが収束したらしたいこと
周りの人（初対面の人）とマスク無しで会話したい。

ちょっと自慢できること
これまでにインフルエンザにかかったことがありません！

コメント
元々戦争や平和に関心があり、昨年参加していた先輩からこの事業を紹介していただいた。

WATANABE Kokona

名前
渡邉 心那

所属
広島市立大学 国際学部 1 年

自分を表す 3 つの言葉
行動力、笑、マイペース

コロナが収束したらしたいこと
収束に関係なく with コロナだと思っているので行きたい場所、会いたい人に気軽に会いに行きたい。

ちょっと自慢できること
周りの人にとにかく恵まれていること。人の相談に乗るのが得意であること。人の長所を見つけるのも得意であること。

コメント
大学から広島に来て、戦争についての自分の知識の浅さや世間的な認知度の低さを感じることが多くなった。これまで何か行動に移したいと思ってもなかなか踏み出せなかったが大学に入り行動できるようになってきた。今回の機会もまたとない貴重な機会で、広島や日本だけでなく様々なバックグラウンドをもつ人々と関われることにすごくわくわくし、自分がこれからどうなっていきたいか、何ができるのかを考えるきっかけにもなると感じている。

MATSUI Yui

名前
松井 結

所属
広島市立大学 国際学部 1 年

自分を表す 3 つの言葉
好奇心、うさぎ、喜怒哀楽

コロナが収束したらしたいこと
数年会えていないひいおばあちゃんに会いに行きたい。

ちょっと自慢できること
いろんな意味での自己表現が得意

コメント
平和については受動的に学ぶばかりだったが、これから先はアナウンサーという夢を叶えるために自分が伝え、発信していく立場にありたいと思う。

ISHIKURA Marie

名前
石倉 万里恵

所属
広島市立大学大学院 平和学研究科
1 年

自分を表す 3 つの言葉
明るい、お喋り、キスマイ

コロナが収束したらしたいこと
大人数での飲み会。

ちょっと自慢できること
美味しいお店を見つけることが得意。

コメント
同世代の戦争の継承についての認識を知りたい。広島以外の地域の継承について知りたい。

FUCHI Himeka

名前
渕 妃華

所属
広島市立大学大学院 平和学研究科
1 年

自分を表す 3 つの言葉
よく食べ、よく寝て、よく遊ぶ

コロナが収束したらしたいこと
まずは国外（特に韓国）に旅行に行きたい、マラソン大会に出たい、富士山に登りたい。

ちょっと自慢できること
すずめを食べたことがあります。

コメント
核兵器や被爆者について関心があり、自分の研究テーマとしても核兵器禁止条約を扱っているが、広島以外の平和の形についても学びたいと思った。

MIZUMOTO Kazumi

名前
水本 和実

指導担当
広島市立大学 名誉教授

台湾
Taipei, TAIWAN

Wang Tse Wei

名前
王 澤惟（ワーン ゾーァ ウェイ）

所属
国立政治大学
日本研究プログラム 2 年

自分を表す 3 つの言葉
明るい、楽天的、ユーモラス

コロナが収束したらしたいこと
日本にいる友人を訪ねること。

ちょっと自慢できること
野球をすることが得意。

コメント
色々な国からの学生との交流を望んでいる。

Hsiao Po-Yun

名前
蕭 博允（シャオ ボーユン）

所属
国立政治大学
日本研究プログラム 修士 1 年

自分を表す 3 つの言葉
行動力、積極性、楽観的

コロナが収束したらしたいこと
日本をたっぷり旅行したいのと、「自由に」マスクなしの生活に戻りたい。

ちょっと自慢できること
学部時代に、学校の「日本研究センター」学生総幹事を務め、「台北城市科技大学×高知県土佐清水市産官学連携 3 周年記念式典」の実行委員会会長を務め、学校や台湾政府と日本自治体とのコミュニケーションをサポートし、事前計画や配置及び現場の指揮、貴賓の接客なども行いました。

コメント
今年だけでなく、近年は東アジア情勢も含む世界情勢が動乱的で、「戦争ののろし」が再び上げられるのではないかと思われる声が多くあり、今こそが「平和への思い」を思い出す時であると考えている。自分のできる力を出して、東亜の平和と世界の平和へ貢献したいと思う。

Shu Kourin

名前
朱 鴻霖（シュ コウリン）

所属
国立政治大学
日本研究プログラム 修士 1 年

自分を表す 3 つの言葉
積極的で好奇心旺盛、そして感受性高め

コロナが収束したらしたいこと
日本に留学に行きたいです。

ちょっと自慢できること
日本語、ロシア語、撮影。

コメント
アジアの歴史と異文化交流に興味があります。

Ko Kabi

名前
胡 可薇（コ カビ）

所属
国立政治大学
日本研究プログラム　修士 3 年

自分を表す 3 つの言葉
好奇心、傾聴力、ピンク

コロナが収束したらしたいこと
旅行。

ちょっと自慢できること
大学の時、テニス部に所属しており、古琴も弾くことができます。

コメント
他のアジア諸国が経験した戦争を理解し、その国の人々の考えを知りたいです。そして、平和のために自分ができることを探します。

Hung Tzu-Chun

名前
洪 子珺（ホン ズー ジュン）

所属
国立政治大学
日本研究プログラム 1 年

自分を表す 3 つの言葉
行動力、責任感、努力家

コロナが収束したらしたいこと
日本やヨーロッパなどへ旅行に行きたい。

ちょっと自慢できること
デジタル作画ができること。

コメント
平和への思いとは何かを知りたいです。そして、様々な地域の人と交流したいです。

Li Shih-Hui

名前
李 世暉（リ セイキ）

指導・通訳担当
国立政治大学
日本教育プログラム 教授

ベトナム
Ho Chi Minh, VIETNAM

Nguyen Minh Khang

名前
グエン・ミン・カン

所属
ホーチミン市師範大学
日本語学部

自分を表す 3 つの言葉
友好的・感情的・自主性

コロナが収束したらしたいこと
中学生の頃からの夢であった、日本への旅行に行ってみたいです。それから、家族の支えになるよう新しい仕事を見つけたいです。

ちょっと自慢できること
ホーチミン市師範大学で勉強できることは、今後忘れることのない私の誇りです。

コメント
今学期、日本人の学生と一緒に働き、勉強する機会を得ました。私はこの事業に参加し、新しい日本人の友達を見つけたいと思います。また、興味深い日本の都市である沖縄の歴史についてもっと知りたいと思っています。

Nguyen Le Tam Doan

名前
グエン・レ・タム・ドアン

所属
ホーチミン市師範大学
日本語学部

自分を表す 3 つの言葉
「唯一無二」「不思議」「ヲタク」

コロナが収束したらしたいこと
日本でのライブやイベントに行きたいです。

ちょっと自慢できること
「共感力」です。

コメント
ずっと前から世界史や異文化理解に興味を持っていました。この事業は同じ関心を持った他国の学生と繋がれる良い機会だと考えました。平和や戦争への思いを共有し、皆の思いと感想を聞きたいです。更に、日本語能力（会話･思考･プレゼンテーション力・分析力）を向上させたいので、勇気を出してこの事業に応募しました。

Nguyen Viet Thao Nguyen

名前
グエン・ヴィエット・タオ・グエン

所属
ホーチミン市師範大学
日本語学部

自分を表す 3 つの言葉
「明るい」や「静か」や「積極的」です。

コロナが収束したらしたいこと
COVID-19 が収束したら、大学に戻ったり、友達と会ったり、一緒に勉強したりしたいと思います。

ちょっと自慢できること
人前で自信を持ってスピーチをすることができることだと思います。

コメント
他の国の大学生に会って、お互いの国の歴史について共有したいと思い、このプログラムに応募しました。

Ho Truc Phuong Nhu

名前
ホー・チュック・フオン・ヌー

所属
ホーチミン市師範大学
日本語学部

自分を表す 3 つの言葉
ポジテイブ、協調、好学

コロナが収束したらしたいこと
コロナが収束したら、ベトナムの歴史博物館や美術館に行きたい。交流活動にも参加したいと思っています。

ちょっと自慢できること
業務を担当するとき、計画をしっかりと立てて、行動できることです

コメント
外国の学生と交流し、平和の重要性を発信できる機会になると思い、この事業に応募しました。

Bui Quan Bao

名前
ブイ・クアン・バオ

所属
ホーチミン市師範大学
日本語学部

自分を表す 3 つの言葉
適応力・頑張り屋・社交的

コロナが収束したらしたいこと
世界旅行をし、たくさんの文化に触れたいです。

ちょっと自慢できること
最近 TOEIC930 点を取得しました。

コメント
国際的な友達をつくり、歴史に関してもっと知りたいと思っている。

Cao Le Dung Nghi

名前
カオ・レ・ズュン・ギー

指導・通訳担当
ホーチミン市師範大学
日本語学部　日本語教員

長崎
Nagasaki, JAPAN

MIYAGI Kanon

名前
宮城 楓音

所属
活水女子大学 国際文化学部
日本文化学科
地域ビジネスコース 3 年

自分を表す 3 つの言葉
元気・真面目・笑顔

コロナが収束したらしたいこと
47 都道府県制覇したい

ちょっと自慢できること
高校生の頃、毎日部活を頑張りインターハイに出場したこと

コメント
平和活動に関心があり、何か行動したいと考えていた時に、アメリカで平和活動を行っている友人に紹介されました。

SUGITANI Daiki

名前
杉谷 太希

所属
鎮西学院大学 現代社会学部
外国語学科 外国語コミュニケーション（英語主専攻） 3 年

自分を表す 3 つの言葉
笑顔、謙虚、誠実

コロナが収束したらしたいこと
家族旅行がしたいです。

ちょっと自慢できること
ピアノとトランペットを弾きます。陸上競技の審判資格を取得しており、活動しています。

コメント
幼い頃から曾祖母をきっかけに平和への関心を持つようになりました。その後国内の戦争、世界の戦争・紛争について学ぶなかで、このような過ちが二度と起きないよう私たちが行動をし、後世に伝える必要があると強く思うようになり、ふるさとである長崎県が実際に体験したことを世界に伝え、日本政府が一日でも早く核兵器禁止条約に署名し、核兵器のない世界を目指すようになってほしいと考えました。同じ日本人であっても、広島原爆や沖縄戦について知らないことがまだ多くあると思います。交流を通して学ぶことで共通の認識を持ち、世界と平和について正面から考え、若い世代から多くの人に伝えていきたいです。

Zhang Hongyu

名前
張 宏宇

所属
長崎県立大学 国際社会学部
国際社会学科 3 年生

自分を表す 3 つの言葉
理性的、客観的、チャレンジ

コロナが収束したらしたいこと
母国に帰り、家族に会いたいです。

ちょっと自慢できること
日本語が喋れることです。

コメント
戦争に対して、各国の方はどう思うのかが知りたいと思い、応募しました。

KIMURA Ririka

名前
木村 利里花

所属
長崎県立大学 国際社会学部
国際社会学科 中国語専攻 3 年

自分を表す 3 つの言葉
運がいい、頑固、平和主義者

コロナが収束したらしたいこと
海外旅行に行きたいです。

ちょっと自慢できること
どこに行っても出逢う人にとても恵まれていて、あまり人間関係で悩みを感じたことがないこと！

コメント
最近他の交流活動に参加してみてより新しいことに挑戦したいと考えていたところ、友達からこの事業を紹介されました。

ARIYOSHI Hanako

名前
有吉 葉奈子

所属
長崎大学 薬学部薬科学科 1 年

自分を表す 3 つの言葉
元気・情熱・誠実

コロナが収束したらしたいこと
海外旅行

ちょっと自慢できること
チェロ弾き

コメント
幼い頃から平和への思いは強かったのですが、佐賀県の高校へ進学し、他県の人と触れ合う中で、長崎の原爆の歴史について知らない人が多くて驚きました。そして、平和について学び、平和を心の中で願うだけでなく、自分から発信できる人になりたいと思うようになりました。長崎のことを発信するだけでなく、沖縄や広島、海外の歴史から見た平和も学ぶことが出来るこの活動を通してもっとその目標へ近づきたいと思ったので応募しました。海外の方と交流できるというところにも魅力を感じました。

YOKOYAMA Michiko

名前
横山 理子

指導担当
（公財）長崎平和推進協会
事業課国際グループ長

NAKAMURA Ayaka

名前
中村 綾香

指導担当
（公財）長崎平和推進協会継承課

韓国
Jeju, SOUTH KOREA

Woo Yuna

名前
禹 潤我（ウ・ユンア）

所属
済州大学校（琉球大学留学中）

自分を表す 3 つの言葉
ゆっくり、食べ物、挑戦

コロナが収束したらしたいこと
海外を自由に旅行したいです。

ちょっと自慢できること
人の話をちゃんと聞くこと。

コメント
済州島 4.3 事件以外に、他の国の事件についても学習して、お互いがつながる方法を考えてみたいです。

Kim Hyeon A

名前
金 賢娥（キム・ヒョンア）

所属
済州大学校
人文大学日語日文学科 2 年

自分を表す 3 つの言葉
文学、想像、熱意

コロナが収束したらしたいこと
やはり最もやりたいのは、行きたくても行けなかった「旅行」です。 韓国や日本の各地や他の色々な国に行きたいと思います。

ちょっと自慢できること
文学や歴史のような、人文学的な知識が豊かです。幼年期から様々な興味やアイディアを持ち続けています。

コメント
済州島 4.3 事件と他の国の悲劇的な事件について詳しく学びたいと思い、今回の事業に応募することにしました。

Moon Ji Young

名前
文 智榮（ムン・ジヨン）

所属
済州大学校
人文大学社会学科 4 年

自分を表す 3 つの言葉
好奇心、急、長くつ下のピッピ

コロナが収束したらしたいこと
海外旅行、とくに沖縄とベトナムへいきたいです。

ちょっと自慢できること
他人への共感が強く、他人に対する思いやりがあります。

コメント
済州島 4.3 事件と他のアジア地域の悲しい歴史について学べる機会だと思い、応募しました。

Hyun Su Seong

名前
玄 秀成（ヒョン・スソン）

所属
済州大学校
一般大学院 社会教育学府
一般社会教育専攻 博士課程

自分を表す 3 つの言葉
真心、肯定、努力

コロナが収束したらしたいこと
マスクを外して晴れやかに笑いながら自由に動きたいです。

ちょっと自慢できること
島内の遺跡や戦跡をガイドして解説することに自信があります。とくに海女と関連する「記録」を探すスキルを持っています。

コメント
「平和への思い」事業に参加することで済州島 4.3 事件だけでなく、東アジアの他地域の歴史などについて学び、これらをどのように理解して共感できるかを考えるきっかけを得るため応募しました。

Kim Yu Jin

名前
金 裕陳（キム・ユジン）

所属
済州大学校
人文大学日語日文学科　2 年

自分を表す 3 つの言葉
熱情、うさぎ、微笑

コロナが収束したらしたいこと
マスクを外して自由に日本と他の国や地域に旅行してその国の文化と言語、歴史を学びたいです。

ちょっと自慢できること
私は初めて会った人とも親しく話せます。そして責任感が強く、常に何でも挑み、最後まで諦めないです。

コメント
済州島 4.3 事件の歴史だけではなく、自分がまだ知らない済州と似ている他の国の悲しい歴史を学びたいと思い、応募しました。

Koh Sung Man

名前
高 誠晩（コ・ソンマン）

指導・通訳担当
済州大学校
人間社会学科 准教授

カンボジア
Phnom Penh, CAMBODIA

Moth Srey Tey

名前
モット・スレイタイ

所属
王立プノンペン大学 歴史学４年

自分を表す３つの言葉
強く、友好的

コロナが収束したらしたいこと
国内外の史跡をめぐる計画を立てています。

ちょっと自慢できること
かつて何十年にもわたる戦争があったこの平和な王国に生まれ育ち、今はその戦争の悲劇について学ぶことができていることです。

コメント
新しい事実の発見や創意工夫を深く受け止め、カンボジアでおきたこの戦争の悲劇に対する認識を他の国々でも高めることに貢献したいです。

Proeung Thanith

名前
プルン・タニット

所属
王立プノンペン大学 歴史学４年

自分を表す３つの言葉
強い、親切、責任感

コロナが収束したらしたいこと
リラックスしたり、対面で授業を受けたり、すべてを元通りにしたいです。

ちょっと自慢できること
カンボジア人であることを誇りに思っています。カンボジアは平和で、文化、伝統芸術も盛んな国です。

コメント
知識を共有することで国際的な対話をしたり、実体験などについて意見を交わし合ったりする機会を得たいと思いました。

Roeurn Sary

名前
ルーン・サリー

所属
王立プノンペン大学 歴史学４年

自分を表す３つの言葉
学ぶ、奮闘、正直

コロナが収束したらしたいこと
この事業に参加している地域の史跡をできるだけたくさんめぐってみたいです。

ちょっと自慢できること
平和な国で家族と幸せな生活を送っており、高等教育を受けていること。

コメント
このプログラムに参加している国々の歴史を知り、カンボジアのクメール・ルージュに関する歴史的知識を伝えていきたいと思います。

Va Darapich

名前
ヴァ・ダラピッチ

所属
王立プノンペン大学 歴史学 4 年

自分を表す 3 つの言葉
フレンドリー、コミュニケーションが得意、責任

コロナが収束したらしたいこと
クメール・ルージュについて調査したいと思っています。

ちょっと自慢できること
クメール・ルージュ時代の戦争の悲劇について、あらゆる世代の学生がより深く理解できるように、情報を収集したことを誇りに思います。

コメント
クメール・ルージュの歴史をより深く知り、ベトナムの歴史と日本での原爆投下についても学びたい。

Yu Leakhena

名前
ユー・レイッケナー

所属
王立プノンペン大学 歴史学 4 年

自分を表す 3 つの言葉
親切、正直、責任感

コロナが収束したらしたいこと
教室で勉強したり、博物館での調査をしたり、リラックスしたい。

ちょっと自慢できること
豊かな文化と親切な国をもつカンボジア人であることを誇りに思っています。アプサラダンスと勉強が得意です。

コメント
他の国と知識を共有し、新しいことを学び、周りの人に教えたい。

Heng Sophara

名前
ヘン・ソファラ

指導担当
トゥールスレン虐殺博物館 職員

Som Ratana

名前
サウム・ロッタナー

通訳担当
神戸大学 法学研究科 法学博士

沖縄
Okinawa, JAPAN

ISHII Akane

名前
石井 茜

所属
沖縄国際大学 総合文化学部
人間福祉学科 社会福祉専攻 1 年

自分を表す 3 つの言葉
生きる、挑む、想う

コロナが収束したらしたいこと
出身地である、愛知県半田市で行われる山車の出るお祭りに行きたいです。

ちょっと自慢できること
私はとても好奇心旺盛で、スキューバーダイビングの免許を取得しています。沖縄で体験した際、美しく自由な世界をとても楽しいと感じたので、父と取得しました。
人と違う事を自分はしたい、と考えることが多々あります。人と違うものを得たい、と考えているのかもしれません。それらは、好奇心旺盛という言葉に繋がっていると思います。

コメント
私は愛知県出身ですが、何度も家族と沖縄を訪れ平和学習をする場面がありました。沖縄の大学を志望した理由に、平和について考え伝承していきたいという想いもありました。様々な国や地域の歴史と平和について考えることができ、沖縄に来たからできる貴重な経験だと思い、応募しました。

MOTOMURA Anju

名前
本村 杏珠

所属
沖縄大学 人文学部
国際コミュニケーション学科
日本語教員専攻 3 年

自分を表す 3 つの言葉
元気、猪頭猛進、行動力

コロナが収束したらしたいこと
海外旅行に行きたいです。高校卒業と同時にコロナウイルスが蔓延し、旅行や留学も全て諦めてしまったことがとても悔しいので、絶対いきます !!

ちょっと自慢できること
東方神起のチャンミンに似てると言われます。

コメント
元々、沖縄戦関連を勉強していたので、沖縄や世界に対する平和意識が強く、同じ気持ちを持つ人や知識や経験のすごい方たちのお話を聞きながら改めて自分がこの先、何をしていくか考えたいと思い応募しました。記憶継承にしても、世代にあったやり方で正しい情報を繋いでいくために、沖縄だけでなく県や国を飛び越えて色々な方々と思いを共有したいです。

YAMASHITA Takumi

名前
山下 匠

所属
名桜大学 国際学群 国際学類 1 年

自分を表す 3 つの言葉
勇気を出す、成長を感じる、挑戦し続ける

コロナが収束したらしたいこと
お金をためて世界中を飛び回って様々な知識や経験を得て、世界中にそれを発信する。日本（特に地元の長野と現在暮らしている沖縄）についての情報を世界中を飛び回りながら PR する。

ちょっと自慢できること
広島平和記念式典に参列したことがあること。ベンチプレスで 90kgを持ち上げたことがあること。毎日ごみ拾いをすることで街中をきれいにしている。

コメント
戦争や平和について深く学び、そこで得た知識や経験を世界に向けて発信していきたい。自分が将来成し遂げたいことを見つけ出す切っ掛けが欲しい。自分が今住んでいる沖縄についてもっと知りたい。日本やその周辺国の関係の歴史やそれぞれの国の歴史について知ることで、世界にとっての平和がどのようなものなのかを知りたい。同じ志を持った仲間をさらに多く作りたい。

AKA Sotaro

名前
阿嘉 崇太朗

所属
琉球大学 人文社会学部
琉球アジア文化学科 1 年

自分を表す 3 つの言葉
目がでかい、人見知り、仲良くなればうるさい

コロナが収束したらしたいこと
海外旅行

ちょっと自慢できること
見たものをぱぱっと絵に描ける

コメント
知り合いの紹介で興味が湧いた。

YASUI Masayuki

名前
安井 大幸

所属
琉球大学 教育学部
学校教育教員養成課程
小中学校教科教育コース
英語教育専修 4 年

自分を表す 3 つの言葉
優しい 、頼れるリーダー、おっちょこちょい

コロナが収束したらしたいこと
世界をバックパッカーとして旅したいです。特に欧州に行って、戦争の記憶の継承とその教育について学びたいです。

ちょっと自慢できること
赤ちゃんや小さい子どもとすぐに仲良しになれます。

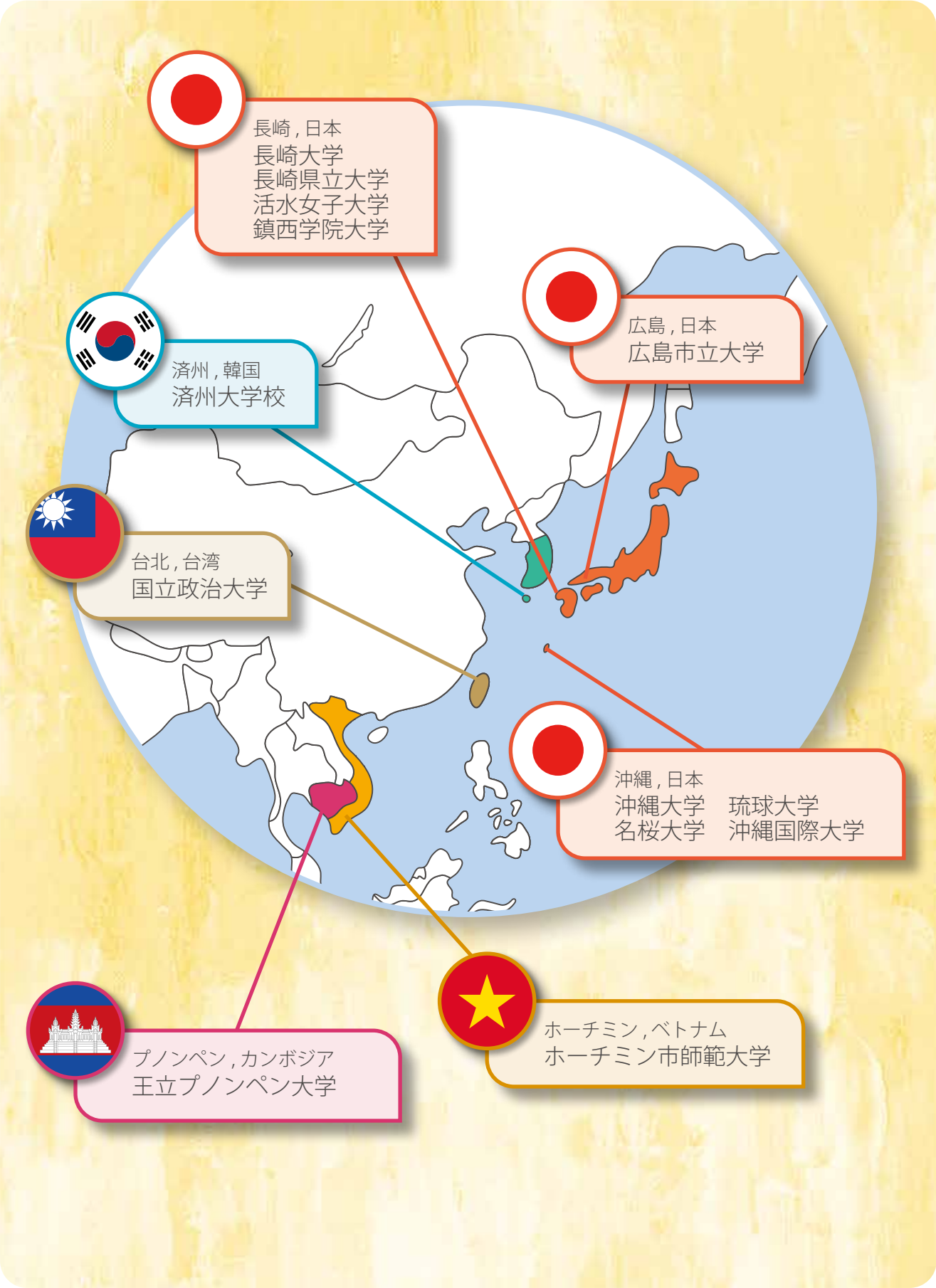
コメント
これまでの沖縄での学びと体験の集大成と新たなスタートにしたいと思ったからです。私は大学 1 年生の頃から Peace Now! Okinawa というプログラム作りに携わっていました。大学 4 年生、休学期間には Peace Now! Nagasaki や Hiroshima のプログラム作りにも携わりました。長崎や広島に関わるほど、沖縄県の慰霊の日がまだまだ全国的に知られていないことを知り、そのような戦争の記憶と体験の継承の問題に各地・各国の知恵を持ち寄り、新たな解決策の提示と実行をする機会としたいと考えています。

OSHIRO Wataru

名前
大城 航

指導担当
社会科教諭
沖縄歴史教育研究家

（2）参加国・地域


長崎，日本
長崎大学
長崎県立大学
活水女子大学
鎮西学院大学
広島，日本
広島市立大学
済州，韓国
済州大学校
台北，台湾
国立政治大学
沖縄，日本
沖縄大学　琉球大学
名桜大学　沖縄国際大学
ホーチミン，ベトナム
ホーチミン市師範大学
プノンペン，カンボジア
王立プノンペン大学

2 共同学習概要

（1）共同学習の概要

【共同学習日程および会場】

本年度の共同学習は、新型コロナウイルスの蔓延に伴い、昨年度に引き続き海外からの参加者はオンライン参加とし、広島、長崎、沖縄の参加者のみが会場に集まるハイブリッド開催となった。移動日を除く共同学習実施期間は 11 月 7 日～ 12 日とし、会場は参加者の宿舎に近く感染対策を行うための広さも十分確保できるという理由から、糸満市観光文化交流施設 シャボン玉石けん くくる糸満の多目的室を利用した。

	日　程	内　容
1 日目	11 月 7 日（月）	開会式、特別講義、歓迎セレモニー、過去の参加者との交流会
2 日目	11 月 8 日（火）	視察：沖縄県平和祈念資料館、平和の礎 講話：沖縄県平和祈念資料館友の会 各地域の発表：長崎（長崎県における原爆投下）、韓国（済州島 4.3 事件）、台湾（2.28 事件）
3 日目	11 月 9 日（水）	視察：チビチリガマ、嘉手納道の駅、嘉数高台公園、上大謝名さくら公園
4 日目	11 月 10 日（木）	視察：首里城跡、第 32 軍司令部壕跡 各地域の発表：広島（広島県における原爆投下）、ベトナム（ベトナム戦争）、カンボジア（カンボジア大虐殺（ポル・ポト政権下の大虐殺））
5 日目	11 月 11 日（金）	自由討論 各地域の発表：沖縄（沖縄戦） ディスカッション
6 日目	11 月 12 日（土）	成果報告会（シンポジウム）、閉会式

（詳細日程 8 ページ参照）

ハイブリッドによる共同学習は海外との時差を考慮し日本時間の 14 時～ 17 時の 3 時間とした。また、沖縄に参集する日本の参加者は、ハイブリッドによる学習を行わない午前中に沖縄県内を視察した。琉球王朝時代、沖縄戦、そして戦後復興も学ぶことができる視察先を選定した。

【使用言語】

日本語を使用言語とした。台湾、ベトナムの参加学生は日本語学部に所属しており、発表や質疑応答、意見交換は各自日本語で対応できた。また、台湾、ベトナムの指導者は日本語が堪能であるため、必要に応じてそれぞれの学生に通訳した。韓国およびカンボジアは現地語での発表であったが、指導者が逐次通訳を行い学生の理解促進に努めた。

【オンライン接続】

インターネットを通して利用する web 会議ソフト Zoom は、インターネットの環境が整えば個人のパソコンでオンライン会議などができる。しかし、本事業では、沖縄の会場と海外の複数拠点をつなぎ学習を滞りなく進めるため、性能の高い機器を投入し、熟練した技術スタッフがオンライン配信業務を担当した。技術スタッフのきめ細やかな運営で、大きな問題もなく共同学習および成果報告会が実施できた。

【参加学生による紹介動画】

昨年度に引き続き対面とオンラインを併用するハイブリッド開催となったため、今年度も各参加者の親睦を深めてもらうことを目的に、地域ごとに紹介動画の作成を行った。

沖縄チーム

自己紹介、沖縄の歴史・文化など

台湾チーム

2.28 事件の概要、関連資料の紹介など

韓国チーム

自己紹介、済州島 4.3 事件や関連遺構の紹介など

ベトナムチーム

自己紹介、ベトナムの紹介など

長崎チーム

自己紹介、原爆関連施設の紹介など

広島チーム

自己紹介、広島平和記念公園等の紹介など

カンボジアチーム

自己紹介、カンボジア大虐殺の概要など

【成果報告会（シンポジウム）のライブ配信】

11 月 12 日に行われた成果報告会（シンポジウム）は、YouTube を通じてオンライン配信し当日には約 20 名の視聴があった。当日の様子を録画しオンデマンド配信を行ったところ、再生回数は 158 回（2022 年 12 月 23 日時点）となっている。

【成果報告会（シンポジウム）の広報】

今年度は、成果報告会の広報としてチラシ、ポスターの配布だけではなく、昨年度も行った新聞広告に加えて、10 代～ 40 代の層に向けて Facebook と Instagram を利用したウェブ広告を行った。ウェブ広告は合計 7 万回以上表示され、そのうちクリックをした利用者の約 70% が 24 歳以下であった。

チラシ及びポスター

新聞広告

ウェブ広告

（2）１日目　開会式、特別講義、歓迎セレモニー、交流会

【開会式】

開会式では、本事業の主催者である沖縄県平和祈念資料館長による開会のあいさつの後、参加者及び事業関係者の自己紹介が行われた。

開会式終了後には、コロナ禍のために直接会うことができない参加者間の親睦を深めてもらうため、ある地域から別の地域に質問をしてもらい、互いのことを知ってもらう時間が設けられた。

【特別講義　講師　大城 航（興南高等学校非常勤講師、沖縄歴史教育研究家）】

昨年に引き続き、大城航氏から特別講義を提供いただいた。

講義では、単に沖縄戦の概要にとどまらず、琉球王朝時代の文化や東南アジア地域とのつながりなどについて触れ、沖縄が万国津梁の地であった点が伝えられた。また、沖縄戦については沖縄本島で起きた戦闘のみならず、伊江島における戦闘や戦後復興期の島ぐるみ闘争にも言及するなど、戦前と戦後を俯瞰して学ぶことができる講義であった。

質疑応答の時間では、韓国、台湾、カンボジア、沖縄、長崎などから質問が上がり、参加者の関心の高さがうかがえた。

【歓迎セレモニー】

沖縄チームによるに安里屋ユンタの合唱と、実施団体職員による空手の型であるバッサイダイが披露された。

沖縄戦と戦後沖縄について

大城 航 ｜興南高等学校非常勤講師、沖縄歴史教育研究家

はいさい、ぐすーよー。

私は沖縄の私立興南高校というところで社会科を教えている大城航といいます。教員のかたわら、沖縄の歴史や歴史教育について研究したり発信したりしています。

「『平和への思い（ウムイ）』 発信・交流・継承事業」で講義するのは今年で 3 回目の参加となります。学生の皆さんの活発な意見交換で、いつもこちらが勉強をさせていただき、とても刺激になっています。今年度も沖縄チームの指導者というかたちで参加することになりました。

では、私から、沖縄についての簡単な紹介、そして沖縄戦と戦後の沖縄について少しお話したいと思います。ゆたさるぐとぅうにげーさびら。

ちなみに、この時間は限られていますので、あらかじめ各チームに送った原稿をもとに話しますが、そこに補足説明として脚注を入れていますので、そちらも参考にされてください。

1. 沖縄の自然、文化、歴史

沖縄県は日本の西南にあり、台湾までの細長い列島で構成された地域です。大小 161 の島々があり、49 の島に人が住んでいます。人口は約 145 万人、最も大きい島はここ沖縄島ですが、その大きさは約 1,200㎢ほどしかありません。古い時代のサンゴ礁でできた島が多く、大きな川は多くありません。そのため、透明度の高いエメラルドグリーンの海、白い砂浜が広がっています。

気候は亜熱帯で、沖縄では山原（ヤンバル）と呼ばれる北部の森林地帯には、温帯の植物であるブナ科の樹木が生育する一方で、海岸部には熱帯で生育するマングローブ林もあります。また、約 10 万年前に大陸と離れて列島が形成されたため、イリオモテヤマネコやヤンバルクイナといった琉球諸島にしか生存しない貴重な生物もいます。2019 年、山原、西表島、鹿児島県の奄美諸島も含めて世界自然遺産に登録されました。

このような豊かな自然環境や、後で話すような独特の歴史や文化をもとに、沖縄は現在では観光業を主な産業としています。また農業ではマンゴーやパイナップルといったフルーツの生産も日本国内では有名な地域です。ちなみに石垣島におけるパイナップルの生産は、林発さんをはじめとした台湾出身の方が広めたもので、近代以降沖縄と台湾の関係は深いものがあります。

沖縄県には世界文化遺産も存在します。2000 年に登録された「琉球王国のグスク及び関連遺産群」です。グスクというのは漢字で「城」と書きますが、12 世紀後半から 15 世紀にかけてつくられた地域の実力者の城塞、または地域の宗教祭祀を行う場（聖域）と考えられています。琉球列島各地に大小 300 以上のグスクが存在すると言われています。世界遺産に登録されたのは、グスクの中でも大型のもので、首里城は琉球諸島を支配した琉球国中山王の王宮となりました。

14 世紀に中山王がいたとされる浦添グスクは、琉球では初めて瓦が使用された建物がありました。その瓦は高麗系の瓦で、当時から朝鮮との交流があったことがわかります。沖縄島北部にある今帰仁グスクにはベトナム産、高麗産、タイ産の陶磁器が出土しており、日本、朝鮮、中国、東南アジアを結ぶ活発な

交易活動をしていたことを示しています。

1372 年、浦添グスクを拠点とした察度という人物が明の皇帝に朝貢を行ないます。これが琉球という地域･国が、確実に歴史に登場した出来事です。その後、明の海禁という国家方針のもとに、琉球が中国商人にかわって東・東南アジア各地を結ぶ交易事業を担うことになります。15 世紀に製造された通称「万国津梁の鐘」には、「琉球は中国、日本、朝鮮、東南アジアの架け橋（津梁）である。各地との交易により宝物があふれている」という事が書かれています。16 世紀後半には東南アジアとの交易は衰退しましたが、その後も日中を結ぶ交易を行い、独自の文化が発展していきました。

沖縄には多くの独特の祭りや行事が存在し、それも観光資源となっています。旧暦 7 月 15 日に祖先の霊を供養する「盆」という行事がありますが、その時にエイサーという舞踊が行われます。これは日本の僧侶がもたらしたものが発祥だとされます。5 月 4 日にはハーリーと呼ばれるドラゴンボートレースが行われます。これは中国からもたらされたもので、台湾や東南アジアの華人が多く住む地域、日本の長崎でも行われていると思います。8 月から 10 月にかけては豊作を祈って大きな綱を引く綱引きが行われます。那覇の大綱引きの綱はギネス記録に認定された非常に大きな綱を使用します。

このように、沖縄は豊かな自然とオリジナリティあふれる文化・歴史を持っています。海外のチームの方々は COVID-19 の感染が収まった際には、ぜひいらしてください。

2. 沖縄戦について

さて、ここからが本日の講話の本題となります。

1872 年に日本政府が琉球王国を廃滅し、1879 年に沖縄県が設置され、それ以後、沖縄は日本の一地域となります。そして 1931 年、日本は満州を侵略し、それ以降 15 年に及ぶ戦争の時代へ突入していきます。1937 年に中国との全面戦争がはじまり、総動員体制がしかれ社会は戦争色に染まっていきます。日中戦争が長期化するなかで、1941 年、日本はアメリカとの戦争に踏み切り、同時に東南アジアの各地を侵略していきました。ベトナムでは食料供出などが原因で 200 万人が餓死したと言われています。それ以外にも中国、東南アジア、太平洋の島々で大きな被害をもたらしました。朝鮮、台湾といった日本の植民地ではそれぞれの人々の尊厳を奪うような教育や文化政策、身体の自由を奪うような動員がされました。

このアジア太平洋戦争の最終盤である 1945 年の 3 月から 9 月にかけて日本軍とアメリカ軍による戦闘が沖縄でおこりました。ここでは簡単に沖縄戦の流れを紹介します。

- 3 月 23 日、米軍の大規模攻撃がはじまります。
- 26 日にアメリカ軍が慶良間諸島に上陸。
- 4 月 1 日にアメリカ軍が沖縄島中部西海岸に上陸します。アメリカ軍の主力は日本軍の司令部がある首里をめざします。
- 4 月 8 日から 5 月 20 日ごろまで、宜野湾～首里の間で日米両軍の激しい戦闘が行われます。
- 5 月 22 日、日本軍司令部は沖縄島南端の喜屋武半島への撤退を決定。南部は日本軍と一般住民が混在する戦場になり、多くの住民が犠牲となります。
- 6 月 23 日（22 日の説もある）に日本軍の司令官が自決し、組織的戦闘は終了。
- 9 月 7 日に日本軍の残存部隊の指揮官とアメリカ軍が停戦を調印して正式に沖縄戦が終了します。

沖縄戦では日本・アメリカ双方合わせて 20 万人以上の方が犠牲になりました。沖縄県民の犠牲者は 12 万人を超すものとなり、実に県民の 4 人に 1 人が死亡するという悲劇となりました。

アメリカ軍は沖縄を占領し続け、1951 年のサンフランシスコ平和条約により、アメリカの施政権下におかれました。アメリカ軍は戦前からあった日本軍の基地を整備・拡張するだけでなく、新たに基地を建設しました。そして基地・軍に由来する多くの被害を受けました。現在もアメリカ軍の専用施設が沖縄島の約 15% を占めています。

3. 伊江島の沖縄戦

沖縄戦について非常に大まかにお話をしました。しかし沖縄戦には様々な特徴があります。その一部の特徴を、ある地域とある人物をクローズアップして紹介します。

沖縄島北部の西に伊江島という島があります。美ら海水族館という有名な観光スポットからも見える島です。島の中央に丘があるのが特徴で、沖縄の人はこの丘を「伊江島タッチュー」と呼びます。この伊江島と、その島民である阿波根昌鴻という人物にスポットを当てます。

阿波根は 1901 年、沖縄島北部の本部（現在の本部町上本部）という地域で生まれました。1925 年に結婚を期に伊江島に移り住み、その後すぐキューバへ移民します。その後ペルーに渡り理髪店で働きました。当時の沖縄は、第一次世界大戦後の世界的な物価高騰により貧困におちいり、多くの人が県外、海外へ出稼ぎに行きました。1934 年に伊江島に帰り農業をしながら商店を営みました。

1943 年、アメリカ軍との航空戦を想定して、沖縄各地に飛行場が建設されます。伊江島には滑走路 3 本、「東洋一」と呼ばれた大きな飛行場が建設されました。そのために伊江島の島民、北部各地の住民が動員されました。10 代の子どもたちも週に 3 日は飛行場建設に従事しました。

1944 年 10 月 10 日にアメリカ軍による大規模な空襲があり、約 40 名が犠牲になりました。県都・那覇が主な標的でしたが、伊江島も攻撃対象となりました。もちろん飛行場が建設されているからです。この空襲で船も破壊され、人々は簡単に島外へ行くことはできなくなり、半数以上の住民が逃げたくても逃げられない状況となってしまいます。また日本軍は住民も日本軍とともに戦うという方針を持っていたため、戦えそうな住民が島から出るのを禁止しました。このことが、住民の被害を大きくします。

1945 年 4 月 16 日、アメリカ軍が上陸し、日本軍とアメリカ軍による激しい戦闘が行われました。アメリカ軍は他の沖縄の周辺離島、例えば久高島や津堅島には大規模な軍隊を送りませんでした。しかし伊江島は占領するという明確な目的のもとに部隊を派遣しました。飛行場があるからです。日本軍は正規の軍隊が約 650 人、そして民間人から動員された軍属、少年義勇兵 20 名、女性救護班と婦人協力隊 200 名も加わっていました。

アメリカ軍に比べて日本軍は武器も弾薬も圧倒的に少なく、人ひとり入れる穴を掘ってそこに爆弾を持った兵隊が隠れ、戦車が近づくととび込んで自爆するという戦法も取られました。4 月 20 日には日本軍の指揮官は全員に総攻撃を命令して、女性をはじめ一般住民も攻撃に参加しました。住民の武器は 1 ～ 2 個の手榴弾か竹槍でした。そして 4 月 21 日には、ほぼすべての戦闘員が死亡し、アメリカ軍は伊江島を占領しました。

島の北側には自然洞窟（ガマといいます）があり、多くの住民が避難していましたが、いくつかの洞窟では、手榴弾や爆弾を爆発させて「集団自決」が行

われました。日本軍が配備されて以降、日本兵は住民に中国戦線での体験をもとに「捕虜になればむごい殺され方をする。捕虜になるくらいなら自分で死んだ方がましだ」という話を広めたことが、「集団自決」がおきた原因の 1 つでした。

阿波根昌鴻は、スパイ疑惑をもたれて処刑されかけました。しかし戦闘前から指揮官と親しくしていたために処刑されずにすみ、沖縄戦を生き延びました。しかし、1 人息子は防衛隊に動員され、中部の戦闘で死亡しました。

伊江島での日本側の犠牲者は 4,800 人近く、そのうち住民は 1,500 名にものぼりました。アメリカ軍の犠牲者は 250 人近くになります。その中の 1 人には 1944 年にピューリッツァー賞を受賞した著明なジャーナリスト・アーニー＝パイルもいます。

軍の方針によって住民が戦闘に参加して犠牲になったこと、「集団自決」、スパイとみられて処刑されること、などは伊江島だけではなく、沖縄島の各地でおこったことです。しかし、そのような悲劇が 1 つの島で重なって発生したことは、伊江島の特徴と言えるでしょう。

戦闘終了後、住民は渡嘉敷島へ連行されました。島を完全に占領して飛行場を修復して使用するためです。

当時、渡嘉敷島では日本軍の部隊が山に立てこもっていました。米軍に捕まった住民を虐殺するなど住民に恐怖を与えていました。また朝鮮人の軍属も多く配属されており、朝鮮人にはまともな食事もいきわたらず栄養失調になりました。飢餓から抜け出すためにアメリカ軍に降伏しようとすると処刑もされました。アメリカ軍の命令で伊江島民が日本軍の指揮官に降伏を勧告しにいくと、その場で殺されてしまいました。

沖縄戦が終わった後の 1946 年まで伊江島住民は渡嘉敷に残されます。アメリカ軍は地雷がわりに鉄線に手榴弾を下げて日本軍を山に封じこめていましたが、撤去せずに島から撤退しました。そして食料を取りに来た人が何人も手榴弾の犠牲になりました。カンボジアでも地雷で苦しんでいる方がいたことを昔ニュースで見たことを覚えています。戦闘は終わっても戦争は住民にとっては終わらないものとなります。

住民が伊江島に帰ることができたのは 1947 年 3 月のことでした。

4. 土地接収と阿波根昌鴻のたたかい

1950 年に朝鮮戦争がおこり冷戦が激化していきます。その中でアメリカ政府は沖縄での基地拡張を計画します。1953 年に現在の那覇市銘苅、那覇市具志という地域で強制的な土地接収が行われます。伊江島では 1955 年に武装したアメリカ軍 300 人が上陸し、真謝という集落の土地を強制的に接収していきます。そのやり方は「銃剣とブルドーザー」という乱暴なやり方で、抵抗する住民には暴力をふるい、畑・家もブルドーザーで敷きならしていきました。

伊江島の施設は、戦術核兵器の投下訓練をするためのもので、訓練施設区域外に模擬弾が落下し、その下敷きになって死亡した方もいます。アメリカ・ソ連による核軍拡競争が伊江島に被害をもたらしたと言えます。

この「銃剣とブルドーザー」に対する真謝の人々の抵抗運動が始まります。その運動の先頭に立ったのが阿波根昌鴻です。阿波根の抵抗運動のやり方は様々にありますが、2 つ紹介します。

まず、阿波根は住民の結束を重要視します。住民がアメリカ軍と臆病にならずに対峙するために「陳情規定」というルールを決めます。

1. 反米的にならないこと。
1. 怒ったり悪口をいわないこと。

1. 集合し米軍に応対するときは、モッコ、鎌、棒切れその他を手に持たないこと。
1. 耳より上に手を上げないこと。（米軍はわれわれが手をあげると暴力をふるったといって写真をとる）
1. 人道、道徳、宗教の精神と態度で折衝し、布令・布告など誤った法規にとらわれず、道理を通して訴えること。
1. 人間性においては、生産者であるわれわれ農民の方が軍人に優っている自覚を堅持し、破壊者である軍人を教え導く心構えが大切であること。

（一部抜粋）

当時、アメリカではマッカーシー旋風と呼ばれるレッド・パージ（赤狩り）が行われていました。その余波が沖縄にも影響を与えたと思われます。また沖縄だけではなく、韓国の軍事独裁、台湾の白色テロ政策にも影響を与えたと考えられます。その社会風潮の中で、阿波根は住民の暮らしを第一に考え、一見強引ではない、柔らかで、しかししたたかな非暴力・不服従の抵抗運動を進めていきました。

そして次に、沖縄の人々に土地接収の真の姿を知らせるために「乞食行進」というものを行いました。道行く人々からカンパをもらいながら、伊江島から南端の糸満まで行進しました。そして那覇にある行政庁舎前で座りこみ、政治家や報道関係者に伊江島の現実を訴えます。阿波根と真謝の人々は「乞食、これは自分らの恥じであり、全住民の恥だ。しかし自分らの恥より、われわれの家を焼き土地を取り上げ、乞食を強いている国や非人間的行為こそ大きい恥だ」と訴えました。このデモをきっかけとして、沖縄の人々は土地接収に反対する運動を「島ぐるみ（全島）」で行なうようになります。1956 年 7 月には「土地を守る四原則貫徹県民大会」が開催され、15 万人が集まりました。

1965 年、アメリカ軍はベトナム民主共和国を爆撃し、ベトナム戦争が本格化します。翌年、アメリカ軍は現在のうるま市昆布という地域の土地を新たに接収しようとします。阿波根や伊江島の人々は昆布に小屋を建てて住民とともに抵抗運動を行います。そして新規接収をあきらめさせました。「ベトナム戦争では沖縄も基地を通してベトナムの人々を苦しめている」という思いが激しい抵抗運動につながったといいます。

土地を守る島ぐるみ闘争からアメリカ軍統治に反対し日本へ復帰するための運動が形成されていきます。1972 年、沖縄は日本に復帰。今年は復帰から 50 年目にあたります。

しかし現在も伊江島の基地機能強化は続いています。最新の戦闘機 F35 の発着訓練のために、空母の滑走路に見立てた施設が新しく造られました。事故率の高いと言われる新型輸送機オスプレイを使っての訓練も行われています。

阿波根は、軍用地料の支払いを断る「反戦地主」となり、数々の土地を取り戻すための裁判闘争を行います。また「ヌチドゥタカラの家」という資料館をたて、中学生や高校生など訪れた人に講話を行い戦争の悲惨さや平和の尊さを訴え続けました。また多くの書籍を執筆、特に『写真記録　人間の住んでいる島』は現在も貴重な資料となっています。2002 年、101 歳で死去しました。

阿波根は講話などでこのようなことを必ず話していたそうです。

「わたしたち沖縄の者は天皇や指導者の命令で鬼畜米英にたいして竹槍やモッコなどで闘いました。その揚句ここでは数十万の人が傷つき殺されまし

た。戦争の終わる頃から鬼畜の米兵がわたしたちに食料や衣類を与えてくれて、とても助かりました。さすがにリンカーン等を輩出した民主主義の国だなと思いました。しかしそのアメリカが今度は、わたしたちの生きる糧にしている土地を奪いとったのです。」

正義と信じた天皇制日本と民主主義アメリカ、しかしどちらも国家の論理で伊江島という小さな島の人々に被害を与えました。大切なのはイデオロギーではなく、1人1人の命と暮らしと幸せをどう守っていくか、ということでしょう。このことを沖縄では「命どぅ宝」と言います。

阿波根は非暴力・不服従闘争を行いました。また「怒ったり悪口を言わないこと」や米軍の「立ち入り禁止」の立て看板の横に「農民以外の方は立ち入りを遠慮してください」という看板を立てるなどユニークさもあります。実際は武器をもった強大な権力者に真っ向から立ち向かっていくのは恐怖を感じることでした。しかし阿波根は沖縄戦で死んだものと思って暴力をうけることを覚悟していたといいます。阿波根の運動は非常に闘争的です。

しかし現在、このような闘争的な運動に対して冷笑を向ける意見がインターネットを中心によく見られます。沖縄の新基地建設運動反対闘争だけでなく、アメリカのブラック・ライブズ・マター運動、フランスの黄色いベスト運動、香港の民主化運動においてもそのような風潮が見られます。しかし、阿波根や沖縄が行ってきた運動は非暴力であるけれど、とても闘争的で激しいものでした。このような運動が人権拡張と平和をつくってきたのではないでしょうか。私は改めて先人たちの運動を見直し、抵抗運動に対して冷笑的な風潮を改めるべきだと考えています。

みなさんも、この6日間の勉強会で、意見の異なることも出てくるでしょう。しかし遠慮なく議論を戦わせてほしいと思います。

さて、最後に乞食行進にも参加した伊江島の野里竹松という人の琉歌を紹介します。

アメリカぬ花ん　真謝原ぬ花ん（アメリカの花も、真謝の花も）
土頼てぃ咲ちゃる　花ぬ清らさ（土を頼って咲いている。花は何と美しいのだろう）
貧乏やぬ庭ん　金持ぬ庭ん（貧乏な家の庭にも、金持ち家の庭にも）
えらばずに咲ちゃる　花ぬ見事（関係なく咲く花の見事な生き方よ）

アメリカだろうと、沖縄だろうと、韓国、台湾、ベトナム、カンボジアであろうと、平和によって人々は暮らし、幸せになります。また平和を思う気持ちも、国、経済状況、政治体制を関係なく、みな持っているはずです。「平和への思い」という花がこの勉強会を通してより美しく開くことを期待しています。

みなさん、6日間の勉強会、一緒に楽しんでいきましょう。

これで私からの話を終わります。にふぇーでーびたん。

56
ミサイル搬入！　島ぐるみ行動（『写真記録　人間の住んでいる島』より）
佐々木宗夫『開発根絶湾　その闘いと思想』より

4
天然記念物
沖縄県ＨＰ「沖縄県はやわかり」より

質疑応答

沖縄の土地が米軍施設・基地に使われている現状に対し、沖縄の人々はどういう感情を抱いているか。｜韓国

意見は県民様々であり、とても複雑な問題。1 つの事実として、2019 年 2 月に行われた、辺野古基地建設をめぐる県民投票では、投票率が約 50% で、7 割の人が反対している。したがって、新しい基地を作ることに対しては非常に反対が強いし、日本全体のアメリカ軍専用施設のうちの 70% が沖縄にあることに対して、不公平だと考えている人は非常に多いと思う。ただその中でもいろんな意見のグラデーションがある。

今後沖縄が戦場にならないためには、基地はある方がいいか、ない方がいいか。｜沖縄

個人的な意見では、米軍の中にも色々なオペレーションがある（例：中国と共同で行う訓練）ことを踏まえると、基地を一緒くたではなく、1 つ 1 つ切り分けて合理的に考えるやり方があるのではないか。基地だけでは語れず、外交や人々の交流（例：観光業）といった色々な面から考えつつも、絶対に戦場にしてはいけない。

過去の首里城再建においては、台湾の木材を使ったと聞いているが、今回の首里城再建では台湾の木材を使う話はあるか？｜台湾

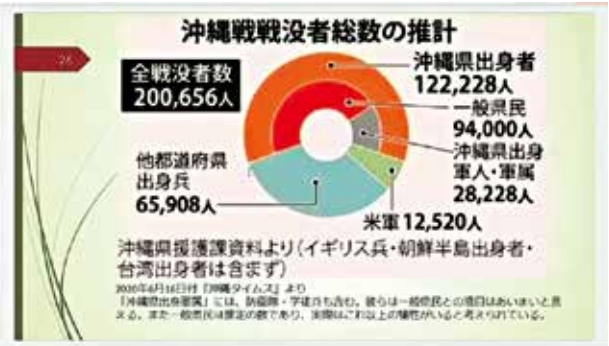
詳しいことは分からないが、沖縄の木材だけでは足りないので、気候が似ている台湾の木材を使う可能性はあると思う。

沖縄戦を経験して生き残っている方は何割いるか？戦争の記憶が残る場所は？｜カンボジア

沖縄戦を体験して生き残っている方は、1 割程度となっているが、その体験をしっかりと覚えている年代となってくると、1 割を切ると思われる。記憶に関して、1960 年代に、記録や沖縄戦の住民の証言記憶を残そうという事業が始まっており、そういうものを見たり読んだりして、若い世代が証言をもとに沖縄戦を語っていくという新しい取り組みが 2、3 年前からスタートした。記憶に残る場所については、沖縄島の南部に、日本軍の司令官が入り激しい戦闘が行われた摩文仁という地域があり、そこに今は沖縄県平和祈念資料館や平和の礎という記念碑が建てられている。ただ色々な課題もあり、どう子どもたちに伝えていくか、学習と結び付け、どうこれらの施設を深く見ていくことができるか、模索中である。

沖縄戦に関する教育はどのように行われているか？教育のやり方にはどのような変化があるか？｜広島

私は証言を必ず使うようにしている。また、授業ではこちらで答えを用意せず、多様な角度から生徒に自分で考えてもらって、生徒なりの答えを出してもらうというような取り組みをしている。例えば「平和の礎はどうやってガイドすればいいのか？」、「沖縄戦の犠牲者数のグラフに朝鮮半島出身者が入っていないけど、どう思う？」という問いを使っている。インパクトがあるので、ガマの中から見つかった茶碗、砲弾などのモノを使えないかなと考えている。



講義の中で非暴力の闘争や香港の民主化運動をネット上であざ笑う人たちがおり、「先人たちの行動を見直していくべき」と言われていたが、具体的に何をしていくべきか？｜長崎

ネット上では「これって意味ないよね」、「これって法律違反だよね」という意見がよく見られます。しかし、そういった運動があったから今があるのでないだろうかと思う。例えば、米国の公民権運動やインドのガンジーによる運動などを通じて、植民地が解放されたり、公民権法ができたりしている。沖縄でも新しい基地づくりを止めことができている。

「違法行為だ」という声に対しては、ルール自体がそもそも正しいのか一歩下がって見ることが必要。ユニークだけど絶対諦めない運動、それで色々な人を惹きつける。命と暮らしと幸せ、人間の安全保障というのを第一に考えるという視点からは外れないで運動をしていくことが大事だろうと思っている。

島ぐるみ闘争に関連する陳情規定について質問がある。島ぐるみ闘争という言葉を聞くと激しいものだったというイメージを持つが、陳情規定を見るとその闘争は冷静で道徳的なものだったと読めるが、島ぐるみ闘争をした人々は、なぜそのやり方を選んだのか？また、闘争の結果と課題は？そして「命どぅ宝」の歌の意味や内容はどんなものなのか？｜沖縄

陳情規定について、道徳的に見えるということだが、一つ目に、沖縄でも米国によるレッドパージがあり、小さな罪でも逮捕・投獄される事例があったことを押さえる必要がある。二つ目に、穏便にやらないと誰もついてこない。三つ目に、阿波根昌鴻はキリスト教徒であり、キリスト教的な考え方をもって非暴力を貫いたと考えられている。

島ぐるみ闘争の結果として地代の一括払いは阻止し、賠償額もあがった。しかし、米兵によるコザの街での飲食を控えさせ（オフリミッツ）たり、新しく土地接収はされてしまったり、ということはあり、痛み分けだろう。しかし、その運動の経験から復帰運動が一気に盛り上がっていき、その成果が日本復帰だったと言ってもいい。一方で、権力者により分断が図られ、現在も経済的な課題が残る。

「命どぅ宝」の歌は、琉球王国滅亡を題材にした「首里城明け渡し」という沖縄芝居の中で出てくる。そのセリフの中で、戦世が終わって、弥勒世（幸せな世の中）がもう少しで来るよ、だから国民の皆さんは泣かないで命を大切にしましょうね、というのを歌ったのがこの歌。「命どぅ宝」というのは、国がどう変わろうとも人の命は生き続けるんだから、命こそ大切にして生き続けなさいという意味で、ずっと言われ続けてきたことであるため、これが取り入れられたのだろうと思う。

小学生に話をする阿波根さん（撮影＝高岩仁）

佐々木良夫『阿波根昌鴻　その闘いと思想』より

阿波根昌鴻『米軍と島民』より

【過去の参加者との交流会】

令和４年度事業では、令和元年度から令和３年度までの参加者を集めて交流会を開催した。交流会では、近況とプログラムに参加した後の生活の変化などについて語っていただいた。

令和元年度参加者

（トゥー／ベトナム）
今は北海道にいて、日本語学校に通っています。平和への思いに参加してから日本のことが好きになり、日本語を勉強するようになりました。

（ミン／ベトナム）
４年経つのは早いなと感じます。ベトナムの歴史を学んだり、この学びをシェアできたことはとてもいい思い出です。現在私はツアーガイドとして観光業で働いています。多くの人と一緒になって学ぶことができたこの経験は、とてもいいものだと感じています。

（飛田／沖縄）
今は広島県にある災害支援の NGO でインターンとして活動しており、日々訓練などに参加させていただいています。今は卒業論文とそのインターンとしての活動が主です。この事業で様々な国の人と交流することができたので、年上の人や初対面の人とも遠慮なくコミュニケーションを取ることができるようになりました。

（司会）
この事業に参加した後、家族とどのような話をしましたか。

（トゥー／ベトナム）
この事業について家族と話す時には、いろいろな障壁があります。私の父は、戦争に参加していろいろな活動をしてきました。なので、私たち家族はもっと国を愛するようになりました。

（ミン／ベトナム）
家族と一緒に参加し、沖縄の歴史の示し方を一緒に学ぶことができて家族は大変喜んでいました。家族と共有できてよかったです。

令和 2 年度参加者

（喜舎場／沖縄）
このプログラムに参加して、海外に目を向けるようになりました。その後は自分のルーツについて学びたいと思い、祖父母に話を聞いたところ、戦後の沖縄は貧しかったこともあり、より良い暮らしを求めてアルゼンチンに移住し生活を送っていたようです。それからアルゼンチンに興味を持つようになり留学に行く予定です。

（チャン／ベトナム）
最近は、日本の企業でインターンをしていますが、社員になることをとても楽しみにしています。そしてこのプログラムを通して平和の意味や大切さについて学ぶことができ、歴史を通して他国の文化や考え方を理解できるようになりました。

令和 3 年度参加者

（小川／長崎）
他の地域の歴史を学ぶことができただけでなく、繋がることの喜びを感じられたという点で、本当にこのプログラムに昨年参加してよかったなと思います。これまでの繋がりと新たな繋がりを大事にしたいと思います。

（安元／長崎）
昨年プログラムに参加し最後に学習指導案を作ったことが貴重な経験になりました。現在は平和活動からは離れているのですが、平和について考え、発信することは重要だと感じています。

（司会）
今年度の参加者に対して、何か意識してほしいことはありますか。

（津田／長崎）
広島は世界で最初に原爆を落とされた地域であり、長崎が最後というのは確定した歴史ではないため、長崎を本当に最後にするんだということを意識しながら学んでほしいなと思います。
また、広島・長崎とは異なり、沖縄は現在も米軍基地という形で戦争の爪痕が残っています。たくさんの学びを持ち帰ってほしいです。

（藤本／広島）
僕は芸術学部で勉強しているのですが、制作において、人やキャラクターを描くときに物事の背景とか、その物語の共感する部分などを意識するようになりました。

（大宮／広島）
広島の参加者に対して、広島ならではの平和学習を共有しながら学んでほしいですし、広島の平和学習に足りない部分も探してみてほしいなと思います。

（大城／長崎）
1 番印象に残っているのは、他地域の同世代の学生と議論したことです。それまでも平和活動はしていましたが、平和とは何かを深掘りする機会もなかったので、良い時間になりました。

（トゥー／ベトナム）
プログラムに参加する前は平和があたりまえと思っていましたが、参加者で沢山議論していると今の平和は脆いなと思うようになりました。これからの平和について考えるいい機会となりました。

（宮城／沖縄）
プログラムに参加した後、大学を卒業し今は JICA 沖縄センターで移民関連の仕事を担当しています。アジア各地でおきた戦争を学んだことが、今の仕事にも活きています。

（山口／長崎）
プログラムに参加後、核兵器禁止条約の国際会議がオーストリアのウィーンであり、それに参加してきました。国連でスピーチを読むなど市民の声を世界に届けることの重要性を感じ、こうした実際に行動に移している OB・OG を頼りながら連携していってほしいなと思います。

okinawa
JEJU / Rep. of KOREA
TSGM Cambodia
Taiwan Team
ベトナムチーム
2021 Kano Oki
2020 Tran Gia Nhi
2021 Yuki Ogawa
2021 Masamichi TSUDA
2019 Hanoka Tobita
2020 2021 Hikaru Omiya
Yukino Yamaguchi
TUNG NGUYEN 2019
2019 Nguyen Minh Hien
okinawa2020-21(Miyagi

（3）2 日目　沖縄県内視察、各地域発表（長崎、韓国、台湾）

【視察　沖縄県平和祈念資料館】

沖縄県平和祈念資料館の職員による案内のもと、展示室を視察した。参加者は第 1 室では琉球史から沖縄戦に突入するまでの歴史を学び、第 2 室では、沖縄戦の実相について職員から丁寧な説明をうけ、熱心に話を聞く姿が見受けられた。

また、沖縄が復帰 50 年ということもあり第 5 室にて沖縄の戦後史についても職員の実体験も含めた説明を聞き、沖縄の戦前、戦中、戦後について学んでいた。

【講話　沖縄県平和祈念資料館友の会　久保田 暁】

沖縄県平和祈念資料館友の会の久保田暁会長から家族の戦争体験を中心に講話を頂き、武力に頼らない平和を目指すことの重要性を共有していただいた。

参加者は当時の状況に関する様々な質問に対する回答を得、今後の継承についての学びを深めていた。

【視察　平和の礎】

講話の後は平和の礎についての説明が行われた。平和の礎には、24 万名以上の名前が刻銘されており、沖縄県出身の戦死者だけでなく、当時敵国であった米国、英国出身の戦死者や、台湾、北朝鮮、大韓民国出身の犠牲者の名も刻銘されている。

参加者は平和の礎の説明を受けながら、沖縄で平和について考え発信することの重要性と向き合っていた。

長崎　テーマ：長崎県における原爆投下

私たちは長崎から来ました。長崎は日本本土の最西端に位置していて、このような形をしています。自然豊かで島が多いことでも有名です。今日は、そんな長崎に落とされた原爆についてお話します。

本日は 1945 年 8 月 9 日 11 時 2 分に長崎に原子爆弾が投下された経緯や落とされた原子爆弾、そして、それによる被害のなかでも熱線、爆風、放射線についてお話しします。最後に、今の私たちの思いを共有させてください。

1945 年 8 月 9 日 11 時 2 分、一発の原子爆弾がアメリカによって長崎に落とされました。激しい閃光とともに巨大な雲が発生し、町は一瞬で破壊されました。この左の写真は、爆心地から約 800m の民家で見つかり、原子爆弾が投下された 11 時 2 分という一瞬を物語っています。爆風で文字盤がゆがみ、外枠なども壊れています。また、真ん中の写真は長崎造船所から見えたきのこ雲と呼ばれる原子雲です。激しい閃光とともに現れたこの巨大な雲は膨大なエネルギーによって発生しました。爆心地から遠く離れた場所でも目撃されています。爆心地付近にあった長崎のシンボル、浦上天主堂も右の写真のように崩壊しました。

ここで、このような原爆が長崎に落とされるに至った経緯を説明します。1945（昭和 20）年 4 月 27 日、原爆投下目標の都市を検討する会議において、日本の 17 の場所が選ばれました。場所を決めるにあたっての留意点は、戦争を続ける意思を無くさせるような場所、軍隊や工場がある場所、原爆の力や効果が分かりやすい場所として 17 の場所が選ばれました。その後、アメリカのトルーマン大統領の命令により、8 月 9 日、広島に続き 2 発目の原爆が投下されました。原爆は、目標を目で確認してから投下するように言われていました。本来は、福岡県の小倉市が第一目標でしたが、煙や雲によって目標点を確認することができなかったため、第 2 目標であった長崎市に向かうこととなり、原爆が長崎に投下されました。広島と同様にこの日もアメリカは 8 時の攻撃を計画していましたが、投下時刻が 11 時を過ぎたのはこのためです。被爆当時の長崎市の人口は約 24 万人と推定されていますが、そのうちの約 1/3 の方がお亡くなりになり、約 1/3 の方がけがをされました。数字を見ただけでも、当時の悲惨さが伝わるのではないかと思います。

被ばく前後の長崎の町を比べてみましょう。原爆投下前は多くの住宅地や工場、グラウンドなどがありました。しかし、原爆投下後は建物の跡形もなく、さら地と化しています。この写真からも、一発の爆弾により、一瞬にして多くの命が失われたことがわかります。現在、この辺りには爆心地公園や平和祈念像といった多くの平和を願う記念碑がいたるところに建てられています。

長崎に落とされた原子爆弾は、ファットマンと呼ばれ、長さ約 3.25m、重さ約 4.5t、直径 1.52m と、とても大きいものでした。写真はアメリカ兵がファットマンを運んでいるところです。アメリカ兵に対してファットマンがとても大きいということがわかります。また、広島の原子爆弾にはウランが使用されたのに対し、長崎の原子爆弾にはプルトニウム 239 という物質が使われました。球形のケースに入れられたプルトニウムは、爆弾の中心部に置かれ、その周囲を爆薬が囲んでいました。最初にこの爆薬が爆発し、その際発生したエネルギーでプルトニウムが内側に圧縮されて核分裂が起こる仕組みです。広島より長崎の方が威力が強かったと言われていますが、長崎は山に囲まれていたために被害を抑えることができたと考えられています。このファットマンによる物理的影響はどのようなものだったのでしょうか。

まず、熱線についてお話します。原爆の爆発と同時に数百万℃の温度を持つ火球が生まれ、爆発の 1 秒後には表面温度は約 3,000℃、火球の大きさは半径約 240m となり、まさに「人間が作り出した小さな太陽」でした。熱線は、4km 離れた屋外にいる人々にも火傷を負わせるほど威力は凄まじく、火災が起こる原因にもなりました。左の写真は、熱線によって焼き付けられた影です。光をさえぎると影ができるため、強烈な熱線を直接受けた部分は焼けて色が変わりました。このように焼き付けられた影は、長崎市内の様々な場所で見られました。右側の写真は、爆心地付近の松山町です。翌日の 8 月 10 日正午には完全に燃えつき、被爆前の元の町とは様変わりしていました。黒焦げの焼死体が多くあり、街が混乱する中、生き残った人々は家族を探したり、救援・救護活動を行ったりと町全体で力を合わせて活動していました。

原爆が投下された近くでは人々の皮膚は焼けただれてはがれ落ち、皮膚の下の肉や骨までがむき出しになりました。さらには、身体が炭のように黒く焦げたり、左側の写真のように高熱と火災によって手の肉は焼け、残った骨と溶けたガラスがくっついたりするなど、私たちが知っているやけどとは考えられないような被害をもたらしました。右側の写真は、谷口稜曄（たにぐちすみてる）さんという方です。長崎県で平和学習を受けてきた私たちは、誰もが見たことがある写真です。一目みただけでも被害の残酷さが伝わってくると思います。谷口さんは当時 16 歳で、爆心地から約 1.8km の場所を電報配達のために自転車で走っているところ被爆しました。谷口さんの話によると、自転車に乗ったまま後ろから焼かれ、秒速 250m もの爆風によって道路にたたきつけられたそうです。さらに、道路に伏せていても体が飛ばされそうになるほどだったといいます。背中一面が真っ赤になり、何と 1 年 9 ヶ月もの間、うつぶせの状態のまま過ごしました。「殺してくれ」これが当時の谷口さんの口癖だったそうです。治療のために輸血をするも、身体のなかに血液が入らず、身体は衰弱し、焼けたところは腐っていったそうです。座ることも横になることも身動き一つとれなかったため、胸の方も床ずれで骨まで腐ってしまったそうです。退院後もやけどの治療は続けられましたが、骨はえぐり取られたままで、骨の間から心臓が動いている様子が見えたそうです。2017 年に 88 歳で亡くなるまで生涯語り部活動をされました。

爆風もまた、長崎の町に甚大な被害をもたらしました。爆風の強さは、爆心地直下で秒速 440m、爆心地から 1km 離れた場所でも秒速 170m だったと推測されています。台風の風速は、最大級であっても秒速 80m といわれており、この爆風は、最大級の台風の 2 倍以上の速度だったことになりますが、想像するのは難しいほど、すさまじいものだったことが分かると思います。爆心地から 1km 以内では一般の家屋は粉々に壊され、電線や線路も破壊されました。さらに、頑丈な鉄骨や鳥居、学校の建物までも一部倒壊し、その中にいた人々は建物の下敷きとなって押しつぶされ、割れたガラスのかけらが無数の人々の体にささったりと大きな影響を与えました。

原爆の一番大きな特性は、爆発のときに大量の放射線を放出するという点です。爆発した瞬間、強力な熱線と爆風だけでなく、大量の放射線を放出し、放射線降下物（原爆の爆発により大気中に拡散し、地上に降下する放射性物質）を降らせました。これらによって、人間や様々な動物は、病気になり、亡くなってしまった人もいます。また、木や花など植物の成長にも影響を及ぼしました。放射線は人の身体の奥深くまで入り、細胞を破壊し、嘔吐や発熱、髪が抜けるなどの急性期障害を引き起こしました。原爆投下から 77 年の年月が過ぎましたが、被爆した人々は、放射線による影響に今もなお苦しんでいます。

熱線や爆風による被害から免れた人であっても、放射線を受けたために多くの方が亡くなりました。そんな中、生き残った医師や看護師らによって、人だけでなく医療器材や薬品なども限られているなかで、救護活動が一所懸命行われました。

これまでは原爆の被害や恐ろしさについて述べてきましたが、これからはこのような悲劇を繰り返さないために私たちが継承していくべきことや、現在長崎が取り組んでいることについて紹介します。
まず、現在被爆者の高齢化が進んでおり、10 年後から 20 年後には語り継ぐ人がいなくなってしまいます。そのため、今後を担う私たち若者が被爆者の思いを受け継ぎ後世に伝えていかなければなりません。そこで私たちが継承していくべきことは、主に「被爆者の証言」「平和への願い」「戦争の恐ろしさ」です。私たちの中にも今回初めて平和活動に参加したという人がいるように、平和に関心を持ち若者同士が意見を交わし合うことがお互いの国を理解し寄り添う大きな一歩になると考えてます。そのため、私たちも今回きりだけでなく、今後とも継続してこのような活動に参加したり、平和を発信し続けたりしていきたいと思います。

次に長崎が取り組んでいることについて紹介します。祈念行事として行われているものの中には、「平和祈念式典」「平和の灯」「市民大行進」この三つがあります。
平和祈念式典は、毎年原爆が投下された８月９日に長崎市の平和公園で行われます。この式典には被爆者のご遺族をはじめ多くの市民の方も参加をし、インターネットを通して全世界に式典の様子が発信されます。
平和の灯とは、手作りのキャンドルにメッセージを書き入れて灯をともすことで原爆の犠牲になった方々を慰霊するという活動です。この活動は、若い世代に平和の尊さを継承していくために毎年開催されています。
最後に市民大行進という活動は、1972 年に始まった被爆者追悼、そして世界への平和発信を目的とした活動です。これは国連の軍縮週間に合わせて開催され、小学生からお年寄りの方まで幅広い世代の方々が参加しています。

この世界平和祈念ポスター・標語展という活動は若い世代の平和への意識を高めることを目的とし、主に小学生から高校生をターゲットに行われている活動です。実際に学生に対して平和への思いや願いを伝えるポスターや標語を募集し、入賞作品を原爆資料館等に展示します。

最後に、原爆の歴史を持つ長崎で育った私たちが感じている思いを皆さんと共有させてください。
私たちの１番の願いは、この悲惨な出来事を二度と繰り返さない、ということです。世界には、広島・長崎といった戦争被爆地だけでなく、ロシア・ウクライナの戦争のように、核兵器の恐怖に脅かされている国や、アメリカのニューメキシコ州など、核実験による被爆地も多くあります。核兵器による苦しみは、投下された日だけではありません。その核兵器開発のために核実験は繰り返され、被ばくした地域の人々は世代を超えて苦しんでいます。核兵器は、当時のことだけではなく、今の私たちのことでもあるのではないでしょうか。そして、戦争により被ばくした広島や長崎だけでなく、日本、そして世界の問題ではないでしょうか。原爆の実体験を語れる被爆者の方が年々少なくなっている中、核兵器による苦しみが二度と繰り返されないために、私たちが被爆者の願いを受け継ぎ、この長崎の歴史をこれからも発信していきます。各国の皆さんとの交流を通して、核兵器のない平和な世界を考え、小さな一歩ですがともに歩んでいきたいです。これで長崎の発表を終わります。ありがとうございました。

質疑応答　◆長崎県における原爆投下

Q **初めて長崎の原爆投下について知ったのは「こっち向いて！みい子」という漫画で、当時私は小学生だったが簡単な言葉でも悲惨さを感じ、今でも鳥肌がたつ。みなさんが原爆投下について初めて学んだ時、どのように感じたか。｜ベトナム**

A

- 小学１年生の頃から原爆について教わってきた。当時は幼いので戦争についてもよくわからず写真が残酷で怖いという印象しかなかった。

- 自分も小学生の時には怖いというイメージがあった。「はだしのゲン」という漫画が小学校の図書館にあって、そこには見ていられないような絵が書かれていて心が痛くなったのを覚えている。中学・高校と年齢を重ねるにつれて被爆者の方から当時の話を聞いたりすることで戦争の恐ろしさを感じるようになった。

Q **みなさんは直接生存者の人に会ったことはあるか。その時の感想や学んだことなどがあれば教えて欲しい。｜韓国**

A

- 毎年８月９日に学校で平和集会というのがあり、大体毎回戦争を体験された方が語り部として講話をしにきてくれる。その時に被害の恐ろしさや今後平和についてどのように考えていく必要があるかについて学ぶことができる。

- 生まれも育ちも長崎なのでずっと８月９日になると被爆者の方からのお話を聞いている。また、私の曽祖父が原爆で家族を亡くしており、生きている間にその話を聞くことはなかったが親族から話を聞き、毎年８月にお墓参りをして祈りを捧げている。

Q **(1) 被爆当時の死者と死傷者数について、広島の場合は実際の数が正確にはわかっていないが、長崎は１人単位で細かく数を調査することができているのはなぜか？**
(2) 広島では「平和記念資料館」の表記は「記」だが、長崎は「平和祈念式典」で「祈」の字が使われているのには何か理由があるか？｜広島

A

(1) 資料として発表した数字は原爆が投下されてから約４ヶ月間、1945 年 12 月末までの推定カウントであり、その期間に行われた救護活動の中で集計されたデータだと考えられている。細かい部分まで数えられているが実際のところ正確にはわかっていない。

(2) 死者を追悼する祈念館でも「祈念」の字が使われている。 原爆によって亡くなられた方や全ての方々に追悼と永遠の平和を祈念するために建てられたと言われている。そのため「祈念式典」でもこの祈る気持ちが強く込められたのではないかと考えている。

Q 原爆投下後、政府から被害者に対して何らかの補償や損害賠償のようなものはあったのか？｜カンボジア

A 1945 年当時は特に補償はなかったが、その後現在に至るまでに被爆者手帳とよばれるものが給付されており、これにより受診料は無料になっている。しかし実際に被爆した人であっても国から被爆者と認められないために被爆者手帳を与えられていない人もいるのが現状。

Q 広島と長崎は唯一原爆を投下されたという歴史があるなか、この二つの都市で学生間の交流や平和に関する事業などがあれば教えて欲しい。｜沖縄

A 高校生平和大使として各県から代表者が数名が選ばれ、長崎と広島からの代表である高校生たちが世界規模で行われる会議に参加することはある。

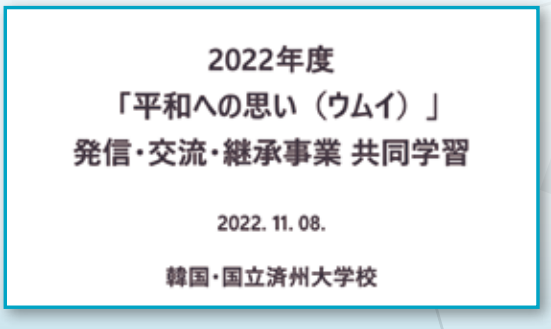
Q 被爆者である谷口稜曄さんが現代に対して残した平和に対する思いなどを知っていれば教えていただきたい。｜沖縄

A

- 谷口さんご本人の思いはわからないが、以前ある被爆者の方にお会いした際に戦争は終わったと思うかと聞いたら「ようやく平和になった」と答えていて、本当に戦争中は辛い思いをされていたんだなと感じた。

- 谷口さんは「長崎を最後の被爆地に」ということを発信されていて、今まで人間は世界の文化を作ってきたが一度経験したことによる後遺症や悲惨さはどうやっても消すことができないということを伝えていた。核と人類は共存できないこと、核兵器で人類や地球を守ることはできないこと、私達が生きているうちに地球上から核兵器を廃絶するために人道的立場に立って行動を起こしてほしいこと、最後に、「私も核のない世界を見届けるまでは安心して死んでいくことはできません」という言葉を残されて、2017 年に亡くなる最後の最後まで活動されていた。

韓国　テーマ：済州島4.3事件



みなさんこんにちは。韓国チームからは、済州島 4.3 事件と、それを解決する取り組みについて発表します。

これは済州 4.3 平和公園です。この公園は済州国際空港から 1 時間ほどの距離にあります。公園内には様々なモニュメントが建てられています。また、展示施設として平和記念館もあります。

記念館にある展示物を見てみましょう。 済州 4.3 平和祈念館には、ある万年筆が展示されています。これは韓国の民主化のシンボルとして知られるキム・デジュン大統領が、済州島 4.3 事件解決のための法律に署名する際、使用されたものです。済州 4.3 特別法は事件の真相を究明し、犠牲者の名誉回復のため作られた法律で、事件が起きて 50 年以上経った 2000 年になってようやく制定されました。その後、この特別法に基づき負の遺産の解決に向けた様々な事業が始まりました。このことは、事件から数十年間続いた島民の持続的な真相究明の要求の結果だったと言えます。

何より重要だったのは済州島 4.3 事件の真実を明らかにすることでした。事件発生から半世紀もの間、公式的かつ総合的な調査は行われていませんでした。このような理由から、政府公式の済州島 4.3 事件の真相調査報告書が刊行されました。報告書の公開と同時に、それまで隠されていた事件の真実が明らかになりました。その後、大統領が済州島民と遺族に対し公式にお詫びすることになりました。真実究明に向けた取り組みが、大統領からのお詫びを引き出しました。

済州島 4.3 事件で犠牲になった人々を慰霊する記念空間も作られました。写真の慰霊祭壇には、犠牲者を慰霊するため位牌が祭られており、毎年 4 月 3 日午前にはここで政府主導の追悼式がひらかれます。記念館には済州島 4.3 事件を語る資料などが展示されています。事件の真実究明に向けた研究や芸術、社会活動など多方面にわたる活動の記録が展示されており、済州島 4.3 事件の真実を探る長年の取り組みを示す記念空間といえます。慰霊と記念は真実究明から始まりました。

済州 4.3 平和公園の外には、様々な慰霊および記念施設があります。先ほど示した慰霊祭壇や位牌奉安所の横には、行方不明になった人々の標石と遺骸奉安館があります。それぞれの空間について説明します。

この事件により、生死さえ確認できなくなった人々が存在します。それは民間人の身分であったにも関わらず、不法に軍事裁判を受け、韓国本土に連行・収監されたのち死亡したり、行方不明になってしまった人々です。彼らを受刑者と呼びます。彼らの魂を慰霊する空間が、この行方不明者の標石です。ここには各地の刑務所へ連行される人の姿を描いたモニュメントもあります。

遺骸奉安館は、この事件で集団虐殺された後、秘密裏に埋蔵された犠牲者を祀った空間です。遺骸のほとんどは、現在の済州国際空港の滑走路の下で発掘されました。最近では、101 歳の事件遺族の採血調査で遺骨の身元が判明したことがニュースになり、話題になりました。現在も、遺族からの採血・データ蓄積により発掘された遺骨と照らし合わせる身元確認の作業が続いています。死者の骨と遺族の血液が真実を明らかにし、今日の哀悼と慰霊を可能にしました。

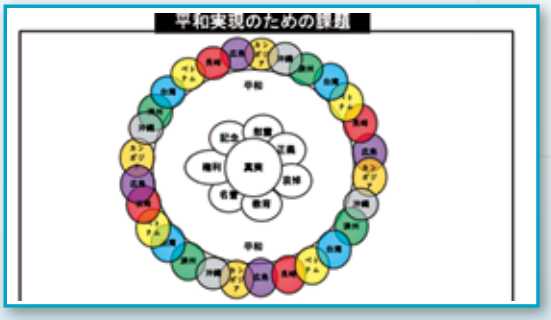
2000 年に制定された済州 4.3 特別法が、20 年ぶりに全面的に改定されることになりました。特筆すべきは、国が犠牲者として認定した人々に対し補償金を支給する点です。また、当時軍事裁判を受け有罪となった人々の無罪を証明するため、もう一度裁判の機会を与える規定も盛り込まれています。現在、犠牲者への補償を実現する手続きが進行中であり、再審裁判を予定しています。

済州 4.3 特別法が制定されて以来、教育現場においても済州島 4.3 事件を記憶するための様々な取り組みが行われています。 この事件に関する記述が小・中・高等学校の教科書に記載されたのも重要な成果です。この事件を記憶するための体験学習も行われています。遺跡地を直接訪問して現場で事件の意味を知り、犠牲者を慰霊する学習です。

いわゆる 4.3 教育を通じて、公教育の中でも生徒たちに 4.3 事件の意味を伝えようとする試みが現れました。この事件を背景にした映画や、事件をイメージ化した記念バッジが制作されたりしています。済州島 4.3 事件の記憶や教訓を次の世代に伝えるため、新しい方法による学生たちの取り組みが次々と行われています。

済州島 4.3 事件の教訓を継承する取り組みは、韓国国内にとどまりません。ベトナム戦争時の韓国軍による住民虐殺に関する真実究明のため長きにわたって尽力してきたウンウイエン・ティタン氏には、済州 4.3 平和賞が授与されました。また、台湾の 228 記念館にて、済州島 4.3 事件の実情と真実究明の取り組みに関する特別展が行われたこともあります。

日本の対馬は韓国の釜山や済州島からとても近い距離にあります。最近、済州島 4.3 事件で殺され、海に投棄された遺体が対馬沖で発見されていたことが明らかになりました。対馬のある人が海辺で収集した死体をきちんと葬儀し慰霊塔を立て、死者の魂を弔って供養してきたという事実がわかりました。こうした事例から私達は連帯の可能性を見つけました。



まず、お互いに進めてきた真実究明の重要性を認め、真実究明のために奔走する人々を支持し、力を与えることです。次に、自分の地域だけでなく、他の地域の犠牲者に対しても哀悼と慰霊の意を示すことです。真実究明を実現した力と、郷土の哀悼と慰霊への経験を通じ、私達の連帯が可能になるのではないでしょうか。

ここまで、済州島 4.3 事件を紹介する映像や、その後の真実を求める取り組み、連帯の可能性について紹介しました。済州島 4.3 事件という残酷な出来事について、私達は平和的な方法でその解決に向け取り組んできました。真実を追求する過程で、被害者の名誉と権利を回復する道が見つかりました。真相究明の取り組みは、犠牲者を慰霊する空間や、補償金の支給にまで進展しました。済州島 4.3 事件の事例から学べることは、真実追求を特徴とする平和的解決を絶えず持続することだと言えます。今年度のこの共同学習の場を借りて、真実の持つ力は、記念と慰霊、未来と教育、交流と連帯、正義、そして平和を作り出すことができる可能性を持つ、というメッセージを皆さんと共に共有したいです。

皆さんの国・地域ではどのように記憶されていますか。

ここまで、済州の事例を発表させていただきました。皆さんの国や地域の歴史、それからその負の遺産をいかに乗り越えようとしたのかを聞かせてください。一緒に悩みながら知恵を集めてみましょう。

質疑応答　◆済州島 4.3 事件

Q　済州島 4.3 事件について、まだ事実と異なる報道があると聞いたが本当か？｜ベトナム

A　ご指摘の通り、フェイクニュースが流れている。政権によって頻度は違うが、これまでに出版された報告書や記念碑、記録などの存在が、そのようなフェイクニュースと対抗する一つの証拠となっている。また、済州 4.3 基金会という公的な組織の中に歪曲防止チームが設置されており、フェイクニュースや事実でない情報に対応するシステムがある。

Q　法改正や DNA の鑑定など、現在にも続く様々な取り組みが行われており、国はこの事件に真摯に向き合っていると感じたが、犠牲者の方と国家の間にまだ残されている課題や求められているものなどがあれば教えていただきたい。｜広島

A　この事件について、国家はかつて加害者の立場だった。そのため国家と市民、かつての加害者と被害者の間には壁や距離がまだ残っている。例えば、1948 年 4 月 3 日に武装蜂起を起こした済州の人々は、韓国政府に反抗したとされるため、済州島 4.3 事件の被害者として公式に承認されていないし、補償の対象にも入っていない。また、犠牲者の中でも特に後遺障害を持つ方の場合はレベルに応じて補償金額も異なる。このように、過去がそのまま現在に反映されているところもあり、様々な選別や差別、また政治が作用している。現在「4.3」というのはただの数字にすぎないため、この出来事を今後どのように意味付けるかという課題が残っている。

Q　究明の特別法に関する質問だが、この事件で生き残った島民や今の国民はこの特別法に関してどう思っているのか？｜カンボジア

A　犠牲者や遺族の方々がお祈りをする場所としての記念空間の建設や、犠牲者遺族に対する補償など、この特別法が示すいくつかの項目については大部分が実現している。生存者にとって、この特別法の最も重要な点は、この事件について自由に語ることができるようになったということである。特別法が制定される前は表にでてこない、沈黙の歴史だったと思うが、特別法の制定以降はどこでも、誰でもこの事件について語り合うことができるようになった、という印象がある。

Q

（1）遺骨収集は既に完了しているのか、それともまだ終わってないのか？また、DNA 鑑定を巡る課題などがあれば知りたい。
（2）記念バッジは何をモチーフにしている？｜沖縄

A

（1）大規模な発掘作業はだいたい完了した。ただ、韓国本土に連れて行かれた人々や刑務所に連行された人々については証言がない部分もある。行方不明者たちがどこで殺されたかがわからず、遺体が戻ってこないという話もたくさんあるので、まだ秘密裏に埋葬されたであろう地域を探す作業が続いている。
DNA 鑑定については、済州島は島ということもありある程度孤立しているので、遺族の血液と骨との合致率は高い。ただ遺族の高齢化に伴い確保できる血液サンプルの数が減少しつつあるのが課題。

（2）椿や赤ちゃんをおんぶしているお母さんなど、この事件を反映したものがモチーフになっている。この事件を経験していない学生たちが学習し理解した上で、自らの表現でこのバッジを作ったのが重要な点だと思う。

Q

（1）済州島 4.3 事件に関する映画作品などはあるか。
（2）この事件で韓国人以外の外国人被害者などはいたのか。｜台湾

A

（1）特別法の制定以降、済州島 4.3 事件を自由に語ることができる時代になってから、徐々に映画が製作・公開されつつある。日本でも「チスル（じゃがいもの意）」というタイトルでこの事件に関する映画が上映された。最近では済州をルーツにもつ在日朝鮮人と済州島 4.3 事件をモチーフにして描かれた「スープとイデオロギー」という映画も上映されている。

（2）政府の公式調査によると外国人被害者はいない。ただ、1945 年以前に日本で生まれ、終戦後済州島に移動した人々、つまり、日本で出生届を出されてその後故郷に戻った方々の中に、赤ちゃんや小学生の犠牲者がいて、彼らの名前は日本名として残っている。

台湾　テーマ：2.28事件

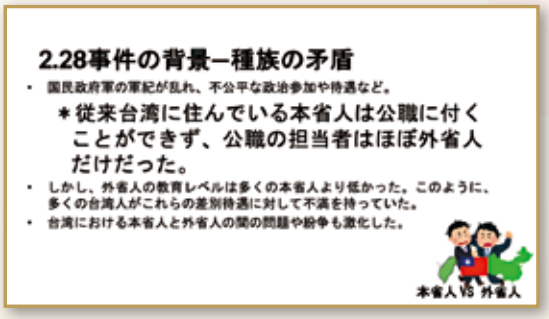
みなさんこんにちは。2.28 事件について発表します。本日話す内容は、2.28 事件の背景、2.28 事件の始まり、2.28 事件、そして 2.28 事件の影響についてです。

まず、2.28 事件の背景について説明します。

1945 年に第二次世界大戦が終結して日本は敗戦国となり、日本人の植民地だった台湾はカイロ宣言に基づき中華民国に返還されました。台湾の人々は、50 年の日本統治時代がついに終わることで祖国（中華民国）の接収を非常に楽しみしていました。しかし、想定と違い、中華民国の国民政府に接収された後には様々な問題が出てきました。

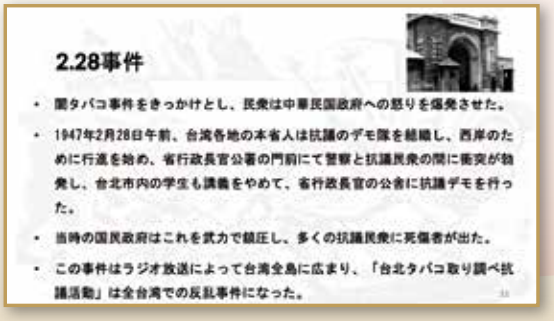
当時、国民政府の行政長官は行政・立法・軍隊などすべての権限を握っており、いわば台湾の王様のような立場でした。そのため、台湾に来た国民政府の官僚の汚職が酷く、台湾国民は不満を抱えていました。

当時の国民政府の権限は非常に大きく、政府が様々な事業を独占し、台湾人の経済活動が制限されていきました。戦後の台湾では、日本統治時代の専売制度を引き継ぎ、国民政府により設置された台湾省行政長官公署がたばこ、お酒、砂糖などの専売権を所有していました。政府は日本が残した公営、私営の企業を全て取り戻して管理下に置き、全てを管轄するようになりました。このように政府に独占された市場では、中小企業が生き残ることは困難になりました。



当時、国民政府軍の軍紀は乱れ、不公平な政治参加や待遇がありました。例えば、従来台湾に住んでいる本省人は公職に付くことができず、公職の担当者はほぼ外省人だけでした。もともと出身に関わらず公職に就くことはできていましたが、当時の台湾人にはそれができず、教育レベルが高いとは言えない、中国大陸から台湾に来た外省人たちがほぼ全ての公的な仕事を担っていました。そのため、台湾における本省・外省に関する問題や紛争がさらに激しくなっていきました。

続いて、2.28 事件の始まりについてご説明します。1947 年 2 月 27 日、台北の天馬茶房という喫茶店の近くで、闇タバコの販売をしていた女性と捜査をしていた憲兵との間に衝突が起こりました。女性は土下座して許しを乞いましたが、憲兵は女性を銃で殴りつけ、違法商品と所持金を没収しました。多くの本省人が闇タバコ売りの女性に同情し、天馬茶房の近くに集まりました。憲兵は民衆を牽制するため空中に発砲しましたが、誤って周囲の人を殺してしまいました。この事件が 2.28 事件の引き金となり、翌日には大きな抗議デモが始まりました。



闇タバコ事件をきっかけに、民衆は中華民国政府への怒りを爆発させました。1947 年 2 月 28 日午前、台湾各地の本省人は抗議デモ隊を組織し請願のために行進を開始し、省行政長官公署の門前で警察と衝突しました。台北市内の学生も講義を中断し、省行政長官の公舎での抗議デモに参加しました。当時の国民政府はこれを武力で鎮圧し、抗議に参加した民衆の多くに死傷者が出ました。この事件はラジオ放送によって台湾全島に広まり、「台北タバコ取り調べ抗議活動」は全台湾に広がる反乱事件になりました。

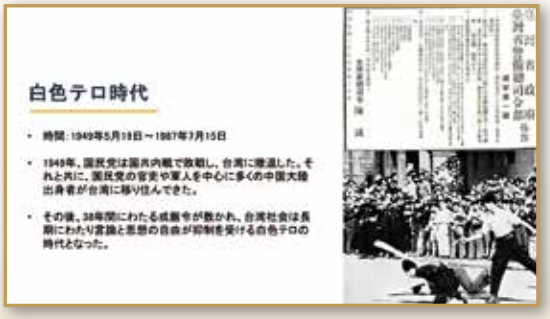
この抗議活動は台北だけでなく、台湾各地に広がりました。
1947 年 2 月 29 日、暴動は多くの地域に拡大し、台北、基隆、台中、嘉義、台南及び高雄等で、抗議デモは益々激しくなりました。しかし結果的に軍隊によって鎮圧され、5 月 15 日に暴動は収束しました。この抗議活動による推定犠牲者数は 1 万～ 2 万人ほどと言われています。右の地図は抗議デモが発生した場所を示しています。左の写真は、台北での抗議の様子です。

次に、1947 年に起きた、嘉義市三二事件について紹介します。
2.28 事件は台北からの抗議デモですが、台湾の他の都市でも激しい抗議デモがあり、なかでも嘉義で起きた三二事件は最も長い抗議デモとなりました。1947 年 3 月 2 日、本省人と外省人との衝突事件で、人々は市長官邸を取り囲みました。本省人は警察署を囲み、銃を奪い、外省人や公務員が襲われました。嘉義市議会議長は市民に降伏を求めましたが、結局は失敗となり、2.28 委員会が組織されました。

降伏の失敗により、民兵は地方の政府軍や空港を襲い始め、次第に他所からも嘉義に人々が集結しこの戦局を支援しました。その中には学生や原住民なども少なくありませんでした。この抗議デモは 10 日以上続きましたが、政府軍の支援が台湾に到着すると民兵は制圧されました。政府軍が奪われた武器を回収するとともに 3 月 15 日に嘉義市が戒厳状態に入ったことで社会秩序が元に戻り、三二事件は終結しました。

続いて、陳儀と 2.28 事件処理委員会について説明します。
当時の国民政府による 2.28 事件に対する処置について、行政長官の陳儀は、表面上は 2.28 処理委員会にて台湾人の要求を認めていましたが、その裏では蒋介石に、台湾には共産勢力があり、抗議デモが行われていると報告していました。そして中国大陸からの軍隊が台湾に派遣され、台湾人の抗議デモが鎮圧されたのです。

実は、2.28 事件には日本人の被害者がいます。それは基隆にいた沖縄出身の人たちでした。日本統治時代に台湾と沖縄の間には頻繁に交流があり、特に基隆との交流は最も盛んでした。そのため基隆の平和島というところには沖縄人の集落があるほどでした。しかし中華民国は台湾を統治した後、島内の日本人を敵視し、平和島に住んでいた沖縄人は中国語ができないという理由で殺されてしまいました。



続いて、白色テロ時代について説明します。
白色テロは、1949 年 5 月 19 日から 1987 年 7 月 15 日まで続きました。1949 年に国民党は国共内戦で敗戦し、台湾に撤退してきました。それと共に、国民党の官吏や軍人を中心に、多くの中国大陸出身者が台湾に移り住んできました。その後、38 年間にわたる戒厳令が敷かれ、台湾社会は長期にわたり言論と思想の自由が抑制を受ける白色テロの時代となりました。

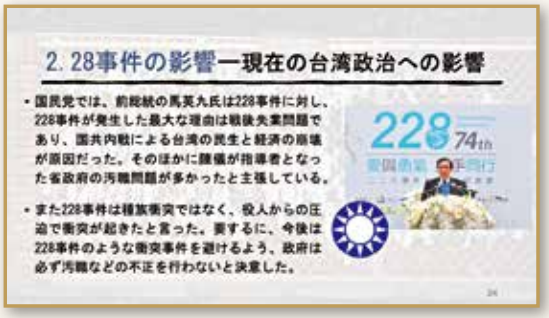
戒厳とはなんでしょうか。国民政府は全面的な反乱の制圧と防諜のために、夜間の外出を禁止し、街頭には軍隊が駐屯していました。集会・結社・出版は厳しく制限され、共産党、台湾独立に関する書籍、歌曲なども禁じられました。学校では、台湾語を話すことが禁じられていました。その結果、密告や左派分子、共産スパイ容疑などで捕らえられ、冤罪で処刑された者が多くいました。被害者数は約 14 万人とされていますが、民間の推計によると約 20 万人以上いたとも考えられています。

1987 年 7 月 15 日に、中華民国政府は戒厳令の解除を宣言しました。その後台湾は、政治・経済・文化の自由化、民主化の道を歩みはじめました。そして 1996 年、初の直接選挙による総統選挙が行われ、本省人出身の李登輝氏が当選しました。

1995 年の二二八紀念碑落成式典にて、李登輝総統は政府を代表し、2.28 事件に対して初めて公式に謝罪しました。1995 年 4 月 7 日には「二二八事件処理および補償条例」が公布され、その後「財団法人二二八事件紀念基金会」が設立、2.28 事件の賠償申請受理や賠償金の交付を行いました。1997 年以降には、2 月 28 日が和平紀念日として祝日となりました。記念施設として二二八和平公園、記念碑、台北二二八記念館なども設置されました。

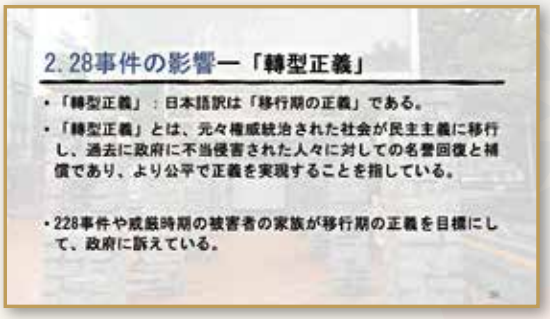
最後に、2.28 事件の影響についてお話しします。まずご紹介するのは「二二八国家記念館」です。政府は四年間の修復工事と計画を経て、2011 年 2 月 28 日に正式に開館し運営を開始しました。現在台湾全土に 2.28 事件に関する施設が 24 箇所存在し、先ほどご紹介した嘉義や台南にも設置されています。

最も重要なのは台北にある 2.28 モニュメント記念碑と、台北 228 和平公園です。敷地内には記念館と記念碑文も設置されています。



続いて、2.28 事件の台湾政治への影響についてお話しします。
戒厳を取り下げた後、台湾は中国植民地の時代から、台湾人の時代へ移行しました。1996 年の大統領選挙で台湾人主導の政府がうまれましたが、その後 2008 年に再び国民党、つまり中国からの政党が政権を握り、馬英九氏が大統領になりました。彼は 2.28 事件が発生した最大の原因は戦後失業問題であり、国共内戦、つまり国民党と中国共産党の内戦による、台湾の民生と経済の崩壊が原因だったと述べました。また、先に紹介した陳儀が指導者となった省政府の汚職問題も原因のひとつだったと述べています。加えて、彼は 2.28 事件は種族衝突ではなく、役人からの圧迫による衝突だったとしています。政府は今後 2.28 事件のような衝突事件が起きないよう、汚職などの不正を決して行わないと表明しました。これが国民党側の意見です。

2016 年以降、台湾人が設立した民進党が再び政権を握りました。
民進党は「228 事件責任帰属研究報告」を作成し、それによると 2.28 事件は当時の国民政府の無能さが原因だったとし、民衆の反抗に政府軍が暴力で応えたのだと述べています。また、外来政権、つまり中国から来た政権への反抗の象徴だとも主張しています。これが台湾側の意見です。



最後に、「移行期の正義」について説明します。「移行期の正義」とは、元々権威統治されていた社会が民主主義に移行する際、過去に政府に不当に侵害された人々への名誉の回復と補償を行うことであり、より公平な正義を実現することを目指したものです。白色テロの時代に、多くの台湾人が理由もなしに政府に捕らえられ、処刑されました。その際の被害者遺族に賠償することが移行期の正義だと考えられています。

質疑応答　◇2.28 事件

Q　長崎では原爆が投下された毎年 8 月 9 日に学校で平和集会が開催されているが、台湾の学校ではこの事件を追悼するために何か取り組みやイベントは行われているか知りたい。｜長崎

A　毎年 2 月 28 日に政府の記念イベントがあり祝日となっているが、ほとんどの国民は何もしないでただ休みを取る。理由としては、この事件が国民にはあまり知られておらず、政府からのデータや資料なども長い間人の目に触れることがなかったことが考えられると思う。私たちは戒厳令の後学校で学ぶ機会があったが、両親や祖父母世代は知らない人も多い。そのため長崎のような盛大な追悼イベントはないと思う。

Q　発表のなかで沖縄が取り上げられていたのが印象深かった。台湾で、2.28 事件に関わった沖縄県出身者の慰霊塔などはあるか？｜沖縄

A　2.28 事件の博物館があり、日本人被害者に関する特設コーナーがあるが、慰霊塔に関する情報は見つけられなかった。沖縄出身の青山さんという方と、そのご家族の写真を探すことはできた。

Q

（1）12 スライドに「暴動活動」という表現があったが、当時の台湾の本省人の動きを「暴動」として表現しても良いか？
（2）政権によってこの事件に対する見解・態度が違うと思うが、その違いを具体的に教えて欲しい。｜韓国

A

（1）見る角度の違いによって表現が違ってくると思う。本省人を支持する民進党の角度からみるとこれは抗議活動や革命のようなものになる。しかし中国寄りの国民党はこれを「暴動」として表現する。歴史上の観点・意思の違いでこのような違いが生まれている。

（2）国民党と民進党の意見は分かれている。現在は国民党は政権をとれず、2016 年から習近平の影響もあり台湾人は平和的統一を完全に諦めたと言える。現在の民進党の意見は台湾人の大多数の意見である。国民党は現在民進党に勝つことは難しいが、この 2 党は戦後台湾を代表する 2 大政党ではある。

Q

2.28 事件には記念日が設定されているとのことだが、この事件に関して国民は継承すべきと考えているか、それとも政府からの発表だけで良いと認識しているのか、世代間の違いなども分かれば合わせて教えて欲しい。｜広島

A

世代差が大きいと思う。若い世代はこのような歴史的な事件について関心が低く、この事件に関する知識不足の面もあるかと思うので、よく知らない人は歴史の一部と捉えているのではないかと思う。私たちの親の世代は 1960 年代ごろで、経験者ではない。祖父母の世代はみなこの事件について話したがらない。記念すべきという活動はあまり活発ではない。しかし最近書籍や政府の資料をもとに、この事件が映画になったことで、若者の注目を集めている。そのため、これからはこの事件を大切に扱っていくのではないかと感じている。

Q

2.28 事件の記念モニュメントについて、4 つのキューブがそれぞれ台湾の民族を表しているとのことだが、外省人もそのひとつに入ってると話していた。2.28 事件の被害者に外省人も含まれているからこのモニュメントにもそれが現れているということか？｜沖縄

A

その通りである。2.28 事件では本省人との対立のなかで外省人の被害者もたくさんいる。

Q

2.28 事件後につくられた戒厳令について、これは現在の若い世代にどのような影響を与えたか？｜カンボジア

A

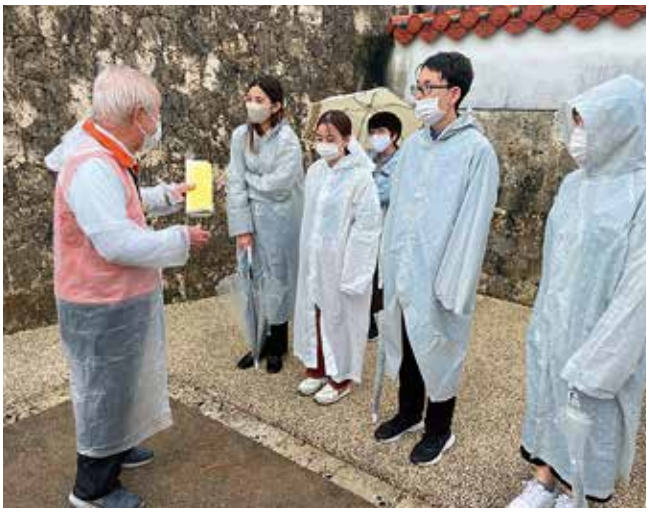
1987 年に戒厳令は取り下げられ、それから 40 年経ったので私たちの世代は影響をあまり感じていない。強いて言えば、今の親世代にはその親（祖父母）の世代で政治犯の罪により台湾から追放されている人が 5 万人ほどいるため、その家族の子孫は祖父母がいない、という状況があるのではと推測している。

（4）3 日目　沖縄県内視察、各地域発表（広島、ベトナム、カンボジア）

【視察　首里城跡】

参加者は、2 日目までに沖縄戦の実相や沖縄戦後史を学んできたが、3 日目は沖縄戦以前に栄えた琉球王朝の歴史や文化を学ぶため、首里城跡を訪問した。

NPO 法人那覇市街角ガイドから派遣されたガイドの皆様より、琉球王朝が万国津梁の精神のもと中国や東南アジアとの交易を通して人と文化の架け橋を目指してきた歴史や、城内の遺産などに関する説明を受けた。



【視察　第 32 軍司令部壕跡（首里城公園内）】

参加者は首里城跡の視察を終えた後、城内地下に残る沖縄戦当時日本軍の第 32 軍司令部壕跡の視察を行った。

首里城公園は琉球王朝時代の歴史を学ぶ上で重要であるとともに、沖縄戦の甚大な犠牲と平和について考える上でも貴重な遺産である事を学んだ。

広島　テーマ：広島県における原爆投下

今日は主に四つに分けて広島の原爆について紹介します。一つ目に原爆による被害について大まかに紹介します。二つ目に被爆者の方について、三つ目に広島が今抱えている課題について、最後に現在広島で行われている活動についてお話したいと思います。よろしくお願いします。

広島に原子爆弾が投下されたのは、1945 年 8 月 6 日午前 8 時 15 分でした。当時広島市内にいた人はおよそ 35 万人でした。原子爆弾による死者数は 1945 年末までで、推定 14 万人± 1 万人といわれています。写真にあるのは広島県産業奨励館で、今は原爆ドームと言われています。左の写真は被爆前で、1915 年に「広島県物産陳列館」として完成し、様々な物産展が催されていました。1919 年に開催された催しにおいて、ドイツ人捕虜の 1 人であるカール・ユーハイムが日本で初めてバームクーヘンを紹介しました。広島県産業奨励館は、爆心地から北西約 160m の距離で被爆しました。爆風と熱線により建物は大破し全焼しましたが、爆風が垂直に働き、天井のドームから爆風が抜けたことにより、右の写真のように建物の壁の一部が奇跡的に倒壊を免れました。しかし、当時この建物にいた人は全員即死しました。原爆ドームについて「被爆後の姿をそのまま残すべき」という意見と、「倒壊の恐れと原爆による悲惨な思い出が蘇るため取り壊すべき」という意見がありましたが、保存を求める声が高まり、計 4 回の保存工事が行われたのち、1996 年に世界遺産に登録されました。

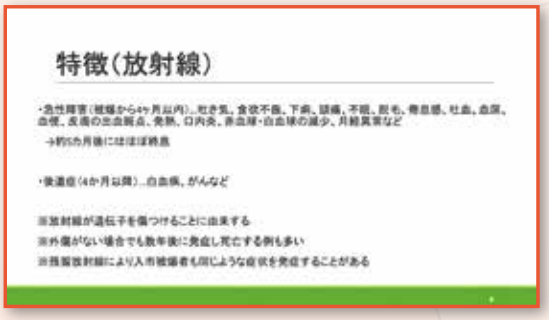
このグラフは、第二次世界大戦中の日本での空襲による被害死者数を表しています。
広島県は、約 14 万人、東京都は約 10 万人、長崎県は 7 万人、大阪府は 1 万人。全国合わせると、約 41 万人でした。広島と長崎の死者数は全体の半数を占める人数です。東京では、1945 年 3 月 10 日に東京大空襲という大規模な都市無差別爆撃が行われました。大阪でも、1945 年 3 月 13 日から大空襲と呼ばれる規模の爆撃が 8 回ありました。

次に、広島に投下された原子爆弾について説明します。
広島に投下された原子爆弾には「リトルボーイ」という名前がついています。小型の爆弾だったためそう呼ばれました。リトルボーイは、長さ約 3m、重さ約 4t、直径 70㎝で、ウラン 235 を使用して核が分裂する力で爆発させる爆弾です。そして、リトルボーイは地上 600m で炸裂しました。スカイツリーが 634m あるので、スカイツリーよりわずかに低い位置での爆発でした。この爆発により、約 7 万人が即死したと言われています。

次に被害の状況を説明します。
原爆は広島市にある島病院の上空で炸裂しました。爆心地から半径 2km以内の建物は爆風と熱線により、倒壊・全焼しました。
2-3km範囲では熱線により、やけどや家屋の自然発火が発生しました。
ここで、原爆の特徴を説明します。原爆には 3 つの特徴があります。それは爆風、熱線、放射線です。爆発時に発生するエネルギーの割合としては、50% が爆風、35% が熱線、15% が放射線です。また、放射線の 15% のうち、5% が初期放射線、10% が残留放射線です。この 3 つの特徴についてさらに詳しく説明していきます。

まず、爆風について説明します。
爆心地近くでは秒速 440m もの爆風が吹きました。アメリカで発生する竜巻は秒速およそ 156m で、原爆による爆風はその約 3 倍もの威力があります。爆心地から 100m 地点では秒速 280m でした。爆風は空気が爆心地から周辺部に向かって広がるため、爆風がおさまると中心部の空気が希薄になり、周辺部から爆発点にむかって強烈な吹き戻しが発生しました。爆風により、爆心地から半径 2kmの地域の木造家屋はほとんど倒壊し、鉄筋コンクリート造りの建物も窓が全て吹き飛ばされ、内部は焼失しました。

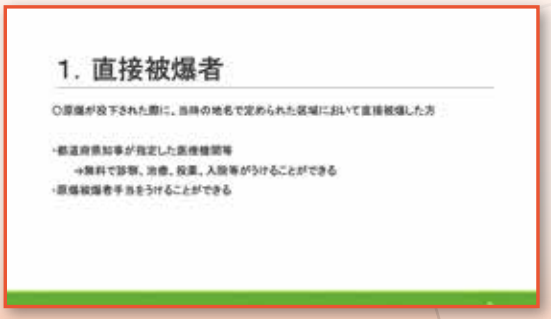
次に熱線です。
爆発による熱線は、爆発後 0.2 秒から 3 秒の間に地上に影響を与え、爆心地周辺の地表面の温度は 3,000 度から 4,000 度でした。また、爆発時の爆発点の温度は 100 万度を超えていたといわれています。爆心地から約 1.2kmの範囲で、屋外など遮るものがない場所にいた人は、皮膚が焼き尽くされ、内臓も障害をうけ、ほとんどの人が亡くなりました。爆心地から 600m 以内の屋根瓦は、表面が溶けてぶつぶつの泡状になりました。また、熱線と爆風の影響により、2km を超える地域でも木造家屋は被害を受け、電柱や樹木、木材なども黒焦げとなり、当時の広島市内の約 9 割の建物が壊滅的な被害を受けました。



次に放射線です。
放射線には初期放射線と残留放射線があります。
初期放射線とは爆発から 1 分以内に発生する放射線、残留放射線とは地上に残った放射線のことを指します。放射線による症状としては、急性障害と後遺症があります。
急性障害は被爆から 4 か月以内に発症し、約 5 か月後には症状はほぼ終息しました。具体的な症状としては資料の通りです。
後遺症は原爆の爆発から 4 か月以降に発症し、症状が多数の人に出だした当時、原爆の放射線による影響だとあまり知られておらず、伝染病と言われたりしていました。このような症状は、放射線が遺伝子を傷つけることにより発生します。そして、外傷がなくても、数か月後、または数年後に発症し、死亡する例も多く、今なお苦しんでる方も多くいらっしゃいます。また、残留放射線の影響から、入市被爆者も同じような急性障害や後遺症などを発症することもあります。

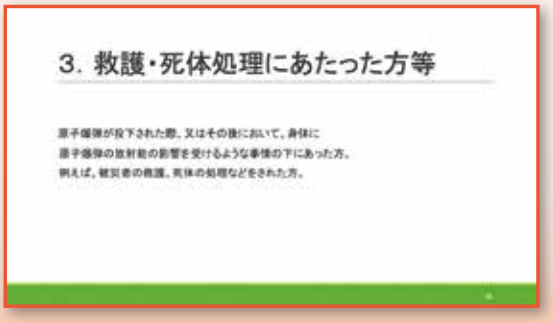
広島はつらい経験をした都市でもありますが、その一方で加害の側面も持っています。終戦まで、広島は軍都として発展していました。広島が軍都として発展する起点となったのは、明治維新の兵制改革に遡ります。1888 年に第 5 師団司令部が設置され、広島は中四国を管轄する軍事拠点として位置づけられました。日清戦争時には陸軍の派兵基地、兵站基地となっていました。これに伴い、軍事施設の拡充が図られ、広島市内各地に軍の関連施設が作られました。右の写真は大本営の跡地です。広島大本営は日清戦争の時に軍の最高統帥機関となり、この場所から明治天皇が戦争の指揮をとり、日本軍が朝鮮半島を攻略するための軍事作戦や司令を出していました。戦争が激化するにつれて、軍事都市としての広島の役割は増加していき、広島城を含め、その周辺は軍の司令施設として原爆投下時にも重要な役割を担っていました。

次に被爆者の定義について紹介します。被爆者は法律によって定義されています。
「被爆者」の定義は大きく分けて 4 つあり、次のいずれかに該当し被爆者手帳を持っている方のことを言います。1 つ目が直接被爆者、2 つ目が入市被爆者、3 つ目が救護・死体処理にあたった方、4 つ目は胎児です。しかし、この他にも被爆者手帳をもらえない方やもらわない方がいることも課題となっており、この方たちは被爆者として認められておらず、支援を受けることができません。

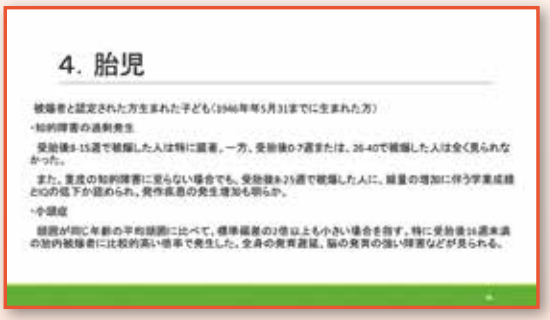


1 つ目の直接被爆者について説明します。直接被爆者とは、決められた区域において直接被爆した方のことを指します。被爆者手帳を交付された場合、都道府県知事が指定した医療機関等で、診察や治療、入院などを無料で受けることができます。これに加えて原爆による症状があれば、原爆被爆者手当を受けることができます。

2 つ目の入市被爆者について説明します。入市被爆者とは、原爆投下時、郊外などにいて、原爆投下時から約 2 週間以内に爆心地から 2km 圏内に入った人のことを指します。約 2 週間という期間は、残留放射線が 2 週間で限りなく 0 に近くなることを踏まえて設定されています。原爆投下時には、家族や友人を探して広島市に入ってきた人が多くいました。この入市被爆者も被爆者手帳を交付された場合に、医療が無料で受けられます。



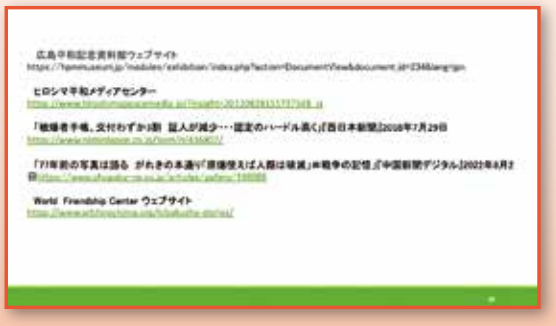
3 つ目に、被爆者の救護や死体処理にあたった方です。原爆投下時に、身体に放射線の影響を受けるような事情のもとにあった人のことを指します。実際に爆心地付近に来ていなくても、避難してきた被爆者を大勢治療したり、診察したりすることによっても被爆することもあります。この場合にも被爆者手帳が交付されます。



4 つ目は、胎児です。被爆者と認定された方から生まれた子どものことを指します。受胎後、8 週から 15 週で被爆した人は、特に顕著に知的障害が発生しています。また、重度の知的障害に至らない場合にでも、受胎後 8 週から 25 週で被爆した人に、学業成績と IQ の低下が認められ、発作疾患の発生増加も明らかになっています。この他にも、小頭症と呼ばれる疾患が現れる場合もあります。小頭症とは、頭囲が同じ年齢の平均頭囲に比べて、標準偏差の 2 倍以上も小さい場合を指します。特に受胎後 16 週未満の胎内被爆者に比較的高い倍率で発生しています。小頭症の主な症状としては、全身の発育遅延や脳の発育の強い障害などが挙げられます。

被爆者には在外被爆者という方もいます。
在外被爆者とは、広島や長崎で被爆し、その後日本国外に居住する被爆者のことを言います。
2007 年 3 月時点で、在外被爆者は全世界に 4,275 人おり、30 数か国の世界の各地に存在しています。以前は、日本にいる間は被爆者手帳が有効であっても、日本を出るとただの紙になるという時代もありました。現在では、在外被爆者も被爆者手帳を所持することができ、居住している国の大使館に申請すれば、被爆者手帳を交付してもらうこともでき、医療も被爆者手帳を利用して受けることができるようになりました。しかし、在外被爆者が被爆者手帳を利用して日本国外で医療を受ける際、一度全額支払ってから日本に請求し、保障をしてもらうため、全額支払うお金がないと医療を受けることが厳しかったり、日本国外で原爆による様々な病気やケガの治療の技術が間に合っていなかったりして、被爆者手帳の利用や医療面でまだまだ問題があります。
また、原爆の被害を受けたのは人間だけではありません。馬や犬などの動物、木や花など植物、昆虫、地面や水面にいる微生物なども犠牲となっています。広島には、爆心地からおおむね 2km で被爆した被爆樹木が約 160 本存在しています。広島平和記念資料館のすぐ横にある、被爆したアオギリの木は、被爆と敗戦の混乱の中で虚脱状態にあった人々に生きる勇気を与えました。

被爆者には課題や問題点が今でも多く残っています。被爆者の定義には該当しないため、被爆者手帳をもらうことができない人がいます。その大きな問題として黒い雨の問題や被爆者認定のハードルの高さがあります。黒い雨とは、原爆が爆発したあと、上昇気流によって巻き上げられた放射線を含む塵が混じった雨のことです。黒い雨は、強い放射線を持つため、この雨に直接打たれた人は、二次的な被爆が原因で、脱毛や急性白血病などの急性放射線障害が起こりました。広島では黒い雨の範囲は、当時の気象技師の調査などに基づき設定し、被爆者手帳を交付してきましたが、黒い雨の降雨域を確定することは困難であると厚生労働省は主張しています。そのため、黒い雨を受けたにも関わらず、被爆者手帳を交付されない人が存在しています。
　また、被爆者認定のハードルが高いことも問題としてあります。被爆者として認定されるためには、第三者 2 人の証言や行政が発効した罹災証明書などの公的書類の提出が必要です。しかし、これらはハードルが高く、被爆者手帳の交付率は申請者の 3 割程度しかありません。終戦から 77 年たった今でも、放射線による病気で苦しみ、健康不安や医療支援を必要としている人が多くいます。そのため、彼らは今も被爆者健康手帳の交付を強く求めています。
　このように、被爆者手帳の交付を求める人がいる一方で、被爆者手帳をもらう条件はそろっていても、もらわないという選択をする人もいます。その理由としては、被爆者に対する差別などがあります。当時は、被爆者であるというだけで、被爆者から生まれる子どもは障害がある子だと考えられて結婚できなかったり、就職の面でも不利になったりしました。また、住む場所についても制限される場合があり、部落なども存在していました。



広島には軍都であった過去や、原爆の経験がありますが、核なき世界の実現に向けて、活動している団体が多くあります。ここに挙げている団体は ICAN（核兵器廃絶国際キャンペーン）とパートナーシップ関係にあり、世界中の団体と連携して核なき世界の実現に向け行動しています。核兵器禁止条約が制定されるまでは、核廃絶を目指す組織は国内・国外でそれぞれバラバラで活動していましたが、核兵器禁止条約の制定過程で共通の目標に向かって協力する体制ができてきました。その中でも、ANT ヒロシマは、核兵器廃絶を目指す日本で唯一の連絡組織である核兵器廃絶日本 NGO 連絡会で、幹事団体として活動しています。平和首長会議についても、広島市がリーダー都市として活躍しています。カクワカやハンワ、ワールドフレンドシップセンターも ICAN とパートナーシップ関係にある団体として、広島で様々な活動を行っています。

質疑応答　◆広島県における原爆投下

Q　間接被爆者の認定はいつ頃から始まったか？｜韓国

A　1957 年に原爆医療法というものが定められた段階で定義された。

Q　原爆ドームの保存に関して 2 つの考えがあったということだが、日本政府はどのような考えを持っていたのか？｜カンボジア

A　広島市では原爆ドームを保存するにあたり、保存に費用がかかることから解体するという声もあったが、広島市民による募金活動をするという意見があがったため、東京などで募金活動が行われ、それがドームの保存に繋がった。国の当時の原爆ドームの保存に関する考えに関する回答は正確でないため回答を差し控えるが、少なくともドームの世界遺産登録時には国によるサポートがあったため、結果として国もドームの保存を後押ししたかたちになったのではないか。

Q　長崎は兵器工場等があったため原爆投下候補地になったと聞いたことがあるが、広島がその候補地になってしまった理由はどんなものがあるのか？｜長崎

A　まず、８月６日の時点で広島では空襲による被害がそこまでなかったため、原子爆弾の威力を確認する実験の場に使いやすかったのではないかということ。二点目は、当時の広島には軍に関する重要な施設が数多くあったためではないかと考えている。

Q

（1）「爆発時に爆心地の周辺部から爆発点に向かって強烈な吹き戻しがあった」とのことだが、この現象についてもう一度説明を聞きたい。

（2）当時救護や看護にあたった方が被爆者手帳交付の対象者になっているということだが、これは原爆投下直後から広島に滞在していたからなのか、それとも怪我人を救護する際に血液などを経由してで被爆してしまったということなのか？

（3）広島チームは皆さん広島市出身ではないと聞いているが、広島独自の学習などがあれば教えていただきたい。また、これまで受けてきた平和学習を踏まえて、広島に来て驚いたことや自分たちの県での平和学習との違いなどがあれば教えていただきたい。｜長崎

A

（1）爆弾が爆発すると、一気に中心から同心円状に外側に向けて風が発生する。すると中心部と外部で気圧の違いが生じて、波が引き戻されるように風が中心部に戻っていくことでまた爆風が発生する。爆弾が爆発したことだけでなく、このような吹き戻しによる爆風もあり、建物の倒壊といった被害が出た。

（2）救護者の被爆は被爆者の血液等によるものではなく、被爆者の体の表面や衣服などに付着した放射性物質に触れることで発生した。

（3）①地域や学校による差はあると思うが、私が受けた平和学習はほとんど教科書に載っている内容程度で、特別な授業はなかった。私は横浜の小学校に通っていたが、当時は横浜港に関する特別授業がありそれが平和学習のような位置付けだったと思う。
②私は高校卒業まで長崎にいて大学院進学を機に広島に来た。広島の小学校等で平和学習に関わる機会がまだないのでどのような教育が実施されているかは具体的にはわからないが、専門的な学びを通して、平和学習のあり方そのものに疑問を持つようになってきた。長崎では８月になると平和公園に行ったり被爆者の方の話を聞いて感想文を書いたりすることが多い。「平和学習」といえばこういうことをする、という予測がつく内容で、広島にきてから、このような学習のあり方が本当に平和教育なのかな、と考えるようになった。

Q　広島の大学の教育では、平和への認識はどのように教えられているか？｜ベトナム

A

●広島では、原爆投下における歴史的背景や悲惨な経験だけでなく、その後市民が復興に向けてどのような活動をしたか、広島が核のない世界に向けてどのような行動をしてきたかも学んでいる。平和への認識、という部分の答えになっているかはわからないが、他の地域に同じようなことが起こらないよう被爆者の思いをつなぎ継承していくことの重要性を学んでおり、それまであまりなかった平和について考える機会が提供されていると感じている。

●大学院では核のガバナンスや政治学的なこと、平和学習であまり扱わない部落と核の関係などについて学んでおり、過去の認識を教えてもらうというよりは話し合いを通して自分がどのようなアプローチをとるかということを学んでいる。

Q 岸田首相は広島出身とのことだが、彼が就任してから平和研究に関する資源・資金の充実に力を注いでいるのか、広島の学生の感覚を聞きたい。｜台湾

A 来年の 5 月に広島での G7 開催が予定されており、それにむけて広島県や広島市、スライドで紹介した市民団体等による様々なイベント活動が行われているところである。

Q 以前 TV 番組で、原爆が投下された日を正しく答えられる人の割合はわずか 3 割程度で、この割合が年々低くなりつつあるという報道をみた。国民の間で原爆に対する意識がどんどん失われつつあると感じてしまったが、今後認知を広めていくにはどうしたらいいと思うか。｜沖縄

A

●私は愛媛県出身で高校で同じ調査を行ったことがあるが、その時も原爆投下日を答えられたのは 36% しかなかった。広島・長崎のようなしっかりした平和学習がない地域では、このことについて全然知らない人がいてもおかしくないと思う。教育を得る機会がなければ興味をもつこともないので、広島・長崎以外の地域でも被爆された方の話を直接聞く機会を増やしたり、私たち若い世代が伝えたりするなどして、一人でも関心を持ってくれる人を増やせたらと考えている。（広島チーム）

●私は最近このような問題に関心を持たない人たちに、どうアプローチすればいいのかということをよく考えている。広島平和記念資料館を訪れたり話を聞いたりするのは、結局のところ、ある程度関心をもっている人たちであり、そうでない人たちに興味を持ってもらうために自分たちが何に取り組むべきなのか考える必要があると思っている。どうして関心がないのかを突き詰めないと、教育もやらされているものになってしまうので、そうならないためにどうすればいいか考えている。（広島チーム）

●発信するためには地道にやっていくしかないと思っている。メディアでも原爆投下日について取り上げられることが少なくなりつつあると感じているので、年齢に応じた SNS の活用などが必要だと思っている。また、長崎市内では毎月 9 日の 11 時 2 分に千羽鶴という曲が防災無線で流れている。このような取り組みで原爆のことを認識できるようになることもあるかと思うので、発信を少しずつ積み重ね、認知度を上げていくことが大切だと思う。（長崎チーム）

ベトナム　テーマ：ベトナム戦争

ベトナムチームです。本日、ベトナム戦争について発表します。

目次はこの通りです。まずベトナム戦争の背景、次にベトナム戦争の過程、最後に戦争の感想・平和への意識について発表します。

ベトナム戦争の背景についてご紹介します。ベトナムは東南アジアに位置する国です。正式な国名はベトナム社会主義共和国で、首都はハノイです。ベトナム戦争は、1955 年から 1975 年にかけて約 20 年間続きました。

当時、ベトナムは南北に分かれており、北ベトナムはホーチミンが主導したベトナム民主共和国、南ベトナムはアメリカ軍の支援を受けるベトナム共和国でした。

戦争の原因となったのは、アメリカが北ベトナムから東南アジアへの社会主義の波及を警戒し、抑圧しようとしたことでした。

第一次インドシナ戦争後、1954 年にジュネーブ休戦協定が成立し、フランスに代わり、当時のアメリカ大統領アイゼンハワーはアジアにおける戦略を掲げました。そして 1955 年には SEATO（東南アジア条約機構）が結成され、南ベトナム共和国に親米政権が成立しました。

アメリカはハイテク戦争を仕掛け、枯葉剤、ナパーム弾、ヘリコプターを活用しました。

一方ベトナム軍は、武器も食料も不足した状態で戦わなければいけませんでした。

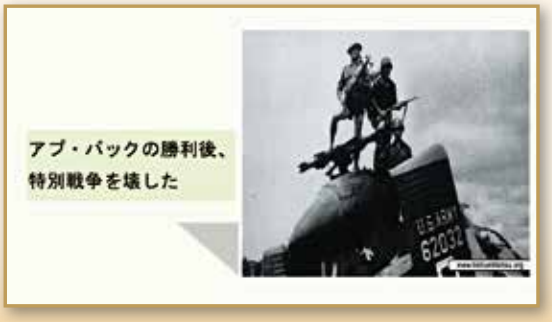
続いて、ベトナム戦争の過程についてです。
このテーマについて、4 つの項目にそって説明します。

まず、ドンコイ反戦運動です。
1957 年から 59 年にかけて、南部での革命は多くの困難と損失に遭遇しました。1957 年 5 月、南ベトナムを率いるゴ・ディン・ジェムは、革命運動に対し、何千人もの幹部と党員を公開処刑しました。したがって、革命を続けるには、困難と試練を乗り越えて過酷な手段が必要でした。

ベトナム各地で発生したドンコイ反戦運動は、アメリカによる一方的な戦争の失敗を意味し、それと同時に革命運動が攻撃的な手段を取るきっかけになりました。

続いて、特別戦争についてご説明します。この戦争は 1961 年から 65 年まで続きました。

一方的な戦局となる計画が失敗した後、アメリカは特別戦争の戦略を実施することにしました。特別戦争とは、アメリカの政府機関軍、またはサイゴン軍によって行われたものでした。この戦争の特徴は、アメリカ側がベトナム人を使ってベトナム人と戦うという点でした。



しかし、アプ・バック村にて南ベトナム解放民族戦線（革命軍）がアメリカに対し勝利を収めた後、革命軍はより大規模な戦いに向かうため前進しました。サイゴン軍は大きな損失を被り、特別戦争というアメリカの戦略を打ち崩しました。

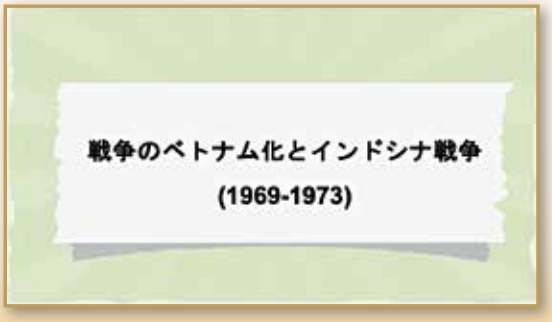
特別戦争が終わり、部分戦争となります。この戦争は 1965 年から 68 年まで続きました。

特別戦争後アメリカは侵略を強化し、南部での局地戦争戦略に切り替え、戦争を拡大し北部を破壊しようとしました。

アメリカが南ベトナムに到着するとすぐに、彼らはヴァン・トゥオン地方のあるクァンガイ省への攻撃を開始しました。

しかし、ヴァン・トゥオン地方の軍隊と人々はアメリカ軍の攻撃を撃退しました。

1960 年に入り、テト攻勢のあと革命軍は損失を受けましたが、革命には大きな意味がありました。アメリカの侵略的な意志を揺るがし、アメリカの侵略戦争を非アメリカ的な戦略と宣伝し、北部での戦争を終結させました。これにより、パリでの交渉が始まりました。



南部ではアメリカの戦略である戦争のベトナム化とインドシナ戦争に抵抗しました。これは 1969 年から 73 年まで続きました。

1960 年 9 月 2 日、ホーチミン大統領が亡くなりました。我が国の革命における大きな損失でした。

1970 年 9 月末、10 万人のアメリカ軍とサイゴン軍によるカンボジア侵攻を撃破し、広大な土地を解放しました。

フエ・ダナン・サイゴンでは、人々と学生による闘争運動が活発化しました。

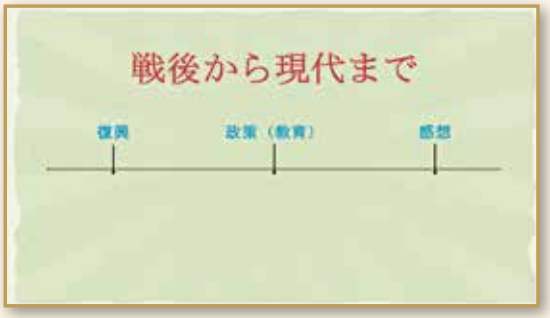
1972 年の「空中ディエンビエン」と呼ばれる戦いでは、革命軍は B-52 を 34 機撃破し、戦争の転換点になりました。

1975 年 4 月 30 日、10 時 45 分、革命軍の戦車が南ベトナムの大統領府に入り、サイゴン中央政府全体を占領しました。そしてベトナム共和国のズオン・バン・ミン大統領が無条件降伏を発表しました。同日午前 11 時半、屋根にベトナムの旗が掲げられました。

1975 年 5 月 2 日、最後の地域であるチャウドック地方が解放されました。

最後に、戦争への感想、平和への意識についてお話しします。

ベトナム戦争では約 200 万から 400 万人のベトナム人が亡くなりました。約 200 万人は人生にわたる障害を抱えています。約 200 万人は有毒化学物質にさらされています。死者の中には、遺体がまだ発見されていない兵士が約 30 万人います。化学物質による病気など、いまだに残る戦争の影響もあります。



ベトナムの教育では、平和の重要性と戦争の無意味さを強調しています。義務教育における 3 つのレベル全てで、教育省は戦争に関する内容を教育プログラムに組み込んでいます。大学では国の勝利に貢献したイデオロギーのシステムと方法について深く学びます。一般的に戦争の影響は大きく、戦争の傷は人々の心に刻まれます。戦後、人々が経済を回復するには何年もかかります。いつ戦争が起きてもおかしくない現代、ひとりひとりが国の独立と自由を守り、国を守るために立ち上がる覚悟が必要です。学生は勉強し、自分自身を高め、国を助ける重要な市民になることができるよう、努める必要があります。平和のために生きることを提唱し、戦争が再燃する恐れを防ぐ必要があります。

質疑応答　◆ベトナム戦争

Q **20 年という長期の戦争の中で、亡くなられた方の遺骨などはどの程度ご遺族の元へ戻ることができているのか。また、国からの補償や遺族への取り組みなどについて何かわかることがあれば教えていただきたい。｜沖縄**

A 私たちが知る限り、戦争で亡くなった人の遺族は大学の学費が無料になる。また、ベトナムは 7 月 27 日に亡くなった人たちを追悼する機会がある。いまだに新たな遺骨が見つかっており、家族に戻す作業が続いている。

Q **北ベトナム側はどのような武器と戦略でアメリカと戦ったのか。また、戦争が終わった後にアメリカから戦争の補償や損害賠償などはあったか。｜カンボジア**

A 北部の任務は南部に戦力と資金を送って戦略を練るという、基地の役割があった。ベトナムはアメリカより弱く一気には戦えなかったので粘り強く戦ったということである。
アメリカからの賠償はさまざまなものがある。例えばベトナム人学生がアメリカに留学できる機会を提供したり金銭的なものもある。このような補償に対して反対する人もいるが、特に現在の若者は補償についてあまり気にしていないところがある。

Q
（1）戦争の流れでさまざまな思想や理念の差があったと思うが、現在も南北でそのような差はあるか。
（2）ベトナム戦争に韓国からも軍が派遣されてさまざまな活動をしている。最近ニュースで当時の被害者が韓国政府を相手に被害訴訟を起こしていることを知った。この訴訟の経緯や詳細な情報はベトナム現地で報道されているか？｜韓国

A
（1）形式上は北部・南部との戦いだったが、実際は北部とアメリカとの戦争だったので、国内でのイデオロギーの違いなどは見られず、平和的に国が統一されればと願っている。

（2）ベトナム政府の対応としては、過去に起きたことであり、対話を持つためにもあまり気にしていないと思う。私たち若者もそのような点については気にしていない。当時起きたことは政府の間でおきたことなので、私たちは今からでもいい関係をつくれると思っている。

Q
（1）ベトナムで平和活動をしている市民団体があるのか、あればどのような活動を行っているか。
（2）広島では核廃絶が一つの目標になっているが、日本と違い戦争に勝利したベトナムの皆さんは、この戦争をどのように捉え、何を後世に伝えていきたいと考えているか教えて欲しい。｜広島

A
（1）ベトナム国内では平和にまつわる絵や作文、歌などのコンテストが行われている。

（2）戦争に勝ったとはいえ多くの人が亡くなり、損失は大きく、戦後の影響もある。戦争は良いものではないし、する価値も意味もない。一緒に平和な社会を作っていきたいと思っている。

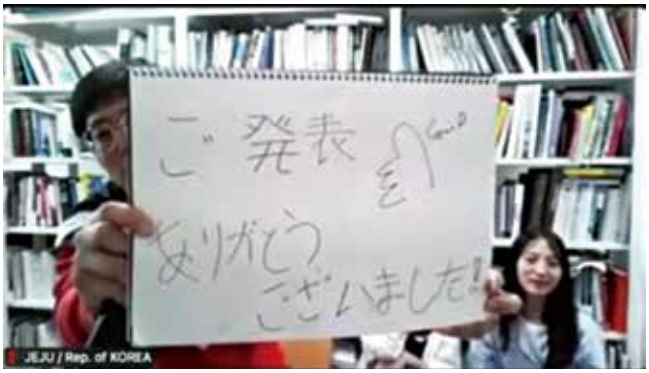
Q

（1）戦時中にアメリカ軍が投下した枯葉剤などの化学物質は、現在でも遺伝子的、社会的に影響を及ぼしているか。
（2）これは日本のチームへの質問だが、台湾では核廃絶といえば原子力発電の廃絶だと考えるが、日本ではどう考えられているのか。｜台湾

A

（1）枯葉剤は遺伝子的には 4 世代先まで影響がでるので、今でも生まれた子供に手足がなかったり肌の色がオレンジになったりして普通の生活ができない人がいる。

（2）個人的な意見にはなるが核廃絶と核エネルギーの廃絶とでは話が若干変わるかと思う。日本でも原子力発電所での事故があり、周辺住民は原爆とは違うかたちではあるが被曝しそれが人体に影響を及ぼしたこともある。一方で、発電所は人を殺すために作られたものではない。回答するのは難しいが、基本的に核兵器は絶対にない方がいいし、原子力発電所もできたらない方がいいと言われているので、廃絶する方向には進んでいると言えるのではないかと考えている。（沖縄）



カンボジア　テーマ：カンボジア大虐殺（ポル・ポト政権による大虐殺）

こんにちは、カンボジアチームです。
今日は、クメール民主カンボジア政権、いわゆるクメール・ルージュについて発表します。

まずカンボジアの地理的情報についてご説明します。カンボジアはタイ・ラオス・ベトナムと隣接した国です。

カンボジアは 1953 年 11 月 9 日に独立した後、さまざまな政権が生まれました。社会主義政権、クメール共和国政権、民主カンボジア政権（いわゆるクメール・ルージュの時代）、カンボジア人民共和国政権、カンボジア国政権、そして最後にカンボジア王国政権です。今日はこのうち、民主カンプチア政権時代に起きたクメール・ルージュの悲劇について共有させていただきます。

カンボジア共産党の活動はクメール・イサラといい、フランスに対する植民地の抵抗運動として 1940 年に始まりました。その後 2 つの組織に分かれ、共産主義に向かった組織がうまれました。1951 年に抵抗運動が拡大し、共産主義側の組織がクメール国民革命党をつくることになり、1953 年にノロドム・シハヌークという王族の力でカンボジアは独立しました。その後、カンボジアは社会主義政権の時代に入りました。1960 年初期、クメール国民革命党の名称が代わり「カンボジア労働者党」になり、サロート・サル（通称ポル・ポト）が政党党首、ヌオン・チアが副党首となりました。1963 年にはポル・ポトは政党名を「カンボジア共産党」に改め、森の中で政府に対する抵抗運動を開始しました。 1970 年 3 月 18 日に、ロン・ノルという参謀長がシハヌーク政権にクーデータを起こして自分の政権を打ち立て、クメール共和国政権とよばれる時代が始まりました。このクメール共和国政権は 1970 年から 1975 年までの 5 年の間、反共産主義の米国の経済政策を重視し、農業とアメリカからの援助に大きく依存していました。しかし、このクメール共和国政権のなかで内部の問題、汚職、社会混乱があったため、クメール・ルージュはカンボジアの様々な地域を奪取しました。クメール・ルージュは共和国政権に反対する国民の力も得たため、1975 年 4 月 17 日に首都プノンペン市内まで攻撃することができました。

続いて、強制疎開についてご説明します。クメール・ルージュの力により、プノンペンの全ての都市が支配されました。しかしその数時間後、クメール・ルージュは革命政策に基づき、カンボジア国民は家や財産の一切を手放し都市部から農村に移り共同生活をするようにと命令し、強制的に人々を移動させました。この強制移動により、食糧不足・医療不足などに陥り多くの人が亡くなったり、行方不明になったりしました。

続いて、強制労働についてご説明します。クメール・ルージュ下の国民全員が強制的に労働させられました。14 歳以上の子どもでも、十分な食事を与えられないまま労働させられていました。彼らは親から離れて生活しており、体が大きかった子どもは運河や貯水池を掘ったり、ダムを建設したり、樹木を伐採したりすることを命令されていました。大人は全員 1 日 12 時間以上、休憩も食料も不足するなかで働かされていました。朝から夜中まで働くこともありました。命令に違反する者がいれば、革命の敵とみなされ、処刑されることになっていました。

続いて、クメール・ルージュの収容所です。収容所とよばれる場所が全国に 200 箇所ほど設置されていました。ここには裏切り者とみなされた者を収容し、監禁・拷問し殺害することもありました。これらは収容者への綿密な調査を実施しないまま行われていることも多くありました。収容所の中でも最も重要で厳重な警備が敷かれていたのが S-21 と呼ばれる収容所で、少なくとも 1 万 8,063 人が監禁され殺害され、生存者はわずか 12 人しかいませんでした。S-21 収容所はもともと高校でした。クメール・ルージュはこの建物を亜鉛メッキのフェンスと電気が流れる有刺鉄線で囲み、収容所として使用しました。高校以外にも、その周辺にある民家を使って彼らが働く場所にしたり、拷問・監禁・殺害する場所としたり、殺害した遺体を埋めたりしていました。学校の建物は主に 4 つあり、一部屋に監視のもと 40 ～ 50 人ほどが監禁されており、厳しいルールが課されていました。

続いて、クメール・ルージュの崩壊について説明します。クメール・ルージュの崩壊には、大きく二つの理由があります。まず、国民が衰弱していったということが挙げられます。これは、当時の国民が日々拷問や殺害される恐怖にさらされながら暮らしていたためです。多くの国民は食料・住居・医療不足、移動の制限、発言の制限、信教の制限等や伝統や慣習などの制限のもとに生活しており、親が子どもを養育することすらできませんでした。二つ目は、クメール・ルージュ内部の崩壊です。クメール・ルージュは政党に忠実な人を求めていたため、内部で懐疑心がうまれ、組織内で拷問や殺害が行われた結果、組織が崩壊しました。

続いて、戦争の悲劇についてお話しします。クメール・ルージュが崩壊した 1979 年 1 月 7 日以降、様々な悲劇が残されました。未亡人、孤児、慢性疾患、インフラの損傷などです。それだけではなく、1970 年以降、カンボジアは内戦に入ってしまい、そこで不発弾が残されたままになってしまいました。そしてクメール・ルージュ崩壊後は党首たちが国境に多くの地雷などを埋めていきました。地雷と不発弾の問題は戦争時から今までカンボジアにとって重要な課題となっています。およそ 270 万トンの爆弾がカンボジアに落とされ、約 6 万人がその被害をうけました。地雷のほとんどは、戦地や軍事の安全を守る位置、古い砦などにあります。カンボジア地雷対策センターは、2025 年を目処にカンボジアの全ての地雷を撤去すると発表しました。

クメール・ルージュ崩壊後、カンボジア政府はこのような悲劇が二度と起こらないよう努力しています。5 月 20 日はクメール・ルージュの始まりを追悼する日です。毎年クメール・ルージュ政権時代のカンボジアの人々の苦しみを追悼し式典をおこないます。教育省は、学生がクメール・ルージュの歴史をより深く理解できるように、中学 3 年、高校 3 年のカリキュラムにクメール・ルージュに関する内容を取り入れました。さらに、トゥール・スレン虐殺博物館は、プノンペンと地方の公立および私立学校で S-21 収容所の歴史および社会における平和構築の重要性に関する情報発信や多くの教育プログラムを開発しています。

ご静聴ありがとうございました。

質疑応答　◆カンボジア大虐殺（ポル・ポト政権下の大虐殺）

Q **1990 年代に日本の自衛隊が地雷撤去のためカンボジアに派遣されたという話を聞いたことがあるが、その活動は実際どのくらい役にたったのか。また、当時日本ではカンボジアの戦況に全く関係がないにも関わらず国が支援をするということで、批判の声があがっていたと聞いている。直接戦争の背景に関わっていない国がこのような問題について介入することについて、どう感じているか？｜沖縄**

A 90 年代に日本からいろいろな援助を受けており、その中に地雷撤去に関するものも確かに含まれている。実は日本からの援助は 90 年代だけではなくて、今に至るまで援助を受けている。終戦直後のカンボジアでは、予算的にも技術的にも自国の力だけで問題に対応することは難しかったため、地雷や不発弾撤去が進められたのは日本のおかげと感じている。日本が援助に対して批判を受けていたというのは私たちはあまり知らなかったが、カンボジアだけでなくアジアの様々な地域が日本からの援助をうけて発展につながってきたので、良いことだと感じている。

Q 以前この収容所について調べた際、赤ちゃんを打ち付けた木や拘束具が残っているのをみて、画面越しでも気分がとても暗くなり過去にすごくひどいことがあったんだなと実感した。カンボジアチームの中で収容所に行ったことがある人がいたら、その時の感想や一番印象に残ってるものなどについて教えて欲しい。｜広島

A 私達は収容所だけでなくカンボジア国内で拷問を行っていた様々な場所について調べたがすごく悲しくて、ショックを受けた。子どもの足首を掴んで木に叩きつけて殺すという場面を考えるだけでもとてもショックで、このような政権や状況が二度と起こらないように祈っている。

Q カンボジア人は、自分の身を守るための何か対策などはあったか？｜ベトナム

A クメール・ルージュには知識人の粛清という目的があったので、自分が教師であったり何らかの知識を持っている場合は殺される可能性があった。そのため身分を隠して無教養であるように振る舞うことで身を守っていた。少しでも政権に対して抵抗のようなものを行えば直ちに敵・裏切り者としてみなされ殺される恐れがあったため、そういった活動はなかなかできなかった。

Q 今のカンボジア政府は、クメール・ルージュからの解放の日を記念日としているか。また、これに関して何らかの記念活動などはあるか？｜台湾

A 毎年１月７日が解放日になっていて、国家の祝日になっている。この日は多くの学校などで収容所や刑務所、S-21、その他ポル・ポト時代に関連する場所の見学プログラムが実施されている。また、テレビやメディアでも当時の歴史に関する様々な番組が放送されている。

Q クメール・ルージュ後の国の成り立ちとして、国王が復活することが不思議だなと感じた。一体どんな流れでまた王政になったのか、説明をお願いしたい。｜沖縄

A 70年代以前に１度カンボジア王国という国があったが、クーデターによって倒れたあと共和国となり、カンボジアにはずっと王様がいない状態だった。それが1991年まで続いたが、パリ和平協定により国を立て直すという動きに入った。この時に王政を復古する決まりができたため、２度目のカンボジア王国が生まれることになった。

（5）4 日目　沖縄県内視察

【視察　チビチリガマ】

沖縄戦時の本島上陸地である読谷村には、「集団自決（強制集団死）」が起きたチビチリガマと避難者全員が生還したシムクガマがある。

参加者はチビチリガマを訪れ、大城航氏の説明のもと「生」と「死」を分けた 2 つのガマについて学習した。当時の沖縄県民は米兵は鬼畜であると日本兵から伝えられており、捕虜になる事を恐れ自ら命を絶つものや身内での殺し合いが行われた。チビチリガマへの避難者約 140 人の内、83 人が犠牲となった。

チビチリガマとは対照的にシムクガマでは、ハワイからの帰国者 2 名が避難しており米兵は住民を殺さないと説得し、シムクガマへ避難した 1 千人前後の避難者を投降へと導いた。参加者は「生」と「死」を分けた 2 つのガマから当時の住民の置かれた立場について深く考えている様子だった。

【視察　嘉手納道の駅】

町の面積の約 83%が嘉手納飛行場と、嘉手納弾薬庫地区として使用されている嘉手納町内にある嘉手納道の駅を視察した。参加者は道の駅 4 階の展望所から、アメリカ空軍が使用する嘉手納飛行場内にある 4,000 メートル級の滑走路 2 本を確認し、戦闘機の離着陸に伴う騒音を実体験した。

3 階の学習展示室では、かつての集落が基地内に接収されていることなど、飛行場の歴史について、県外米軍基地との成り立ちの違いを比較しながら学ぶ事ができた。

【視察　アメリカンビレッジ】

北谷町のアメリカンビレッジはアメリカの西海岸をイメージして造られており、沖縄の若者や観光客で賑わいを見せている。しかし、アメリカンビレッジなどが立ち並ぶ地区は、かつて米軍のハンビー飛行場やメイモスカラー射撃場などの米軍施設が位置しており、施設の返還後に新しく整備されてきた経緯がある。

参加者は移動中に、過去に米軍施設であった事実や、基地返還後の経済効果や観光産業への影響について話を聞き、その後、実際にアメリカンビレッジを散策することで、基地返還の経済効果やその裏にある歴史について学んだ。

【視察　嘉数高台公園】

嘉数地区は、日米両軍の 16 日間にも及ぶ戦闘によって、軍人だけでなく住民を含む多くの犠牲者が出た激戦地である。参加者は同地区にある嘉数高台公園を訪れた。参加者はガイドより重要な軍事拠点と隣り合わせとなった嘉数の住民の半数以上が犠牲となったことや、当時の戦闘で使用されただろうトーチカに関する説明をうけた。さらに、「嘉数の塔」、「京都の塔」、「青丘之塔」なども視察し、それぞれの碑文がどのような視点から当時の戦闘を捉えているのかなどについて説明を受けた。

【上大謝名さくら公園】

上大謝名さくら公園は普天間飛行場に隣接し、公園の真上をヘリコプターや航空機が通過し、フェンスの中には亀甲墓が残るなど「基地と隣合わせ」という沖縄の実情を見ることができる。

参加者は、米軍から許可を得て亀甲墓に年に 1 回お墓参りをする人がいるという話を聞いたり、基地と隣合わせの生活がいかなるものかを身をもって感じていた。

（6）5 日目　自由討論、各地域発表（沖縄）、ディスカッション

【自由討論】

対面参加していた、長崎、広島、沖縄の参加者それぞれ 5 名と韓国の参加者 1 名の計 16 名で、ゴーヤー、ジンベイザメ、シーサーという 3 つの混成グループをつくった。各グループ内の話し合いを経て、対面参加者全員で話してみたいトピックをグループ毎に 1 つ持ち寄り、自由討論を行った。

Q1. 平和教育はこのままでいいのか（ゴーヤー）

質問の背景としては、私は長崎で平和教育を受けてきたのですが、毎年 8 月の平和教育になると自分がどこに行って何を見て何をするのかわかるんですよね。受ける前から大体自分がどういう感想を書けばいいのか分かっていて。予測のできる学習なんですよね。それって、平和教育というより歴史を学ぶだけの学習で、平和教育って言えないのではと思い提案させていただきます。

ゴーヤー
ジンベイザメ
シーサー
資料館職員

3 つの論点を出したいと思います。
（1）メモリアルデイ（6.23　8.6　8.9）を覚えればそれでいいのでしょうか。
（2）沖縄、広島、長崎で一般的に行われる平和教育は定型化されてしまっているが、それでいいのでしょうか。
（3）今後の平和教育をどうしていくべきだと思いますか。

メモリアルデーをただ暗記するのではなく、記憶するというのは、戦争までの過程や内容を十分に理解した上で答えることができる状態を指すと思うので、そうした記憶の仕方ができればいいと思います。また、学習内容の定型化に関しては、史実を伝えることが定型化していることに関しては問題ないと思います。ただ、その後どうするかっていうことが平和教育なので、そこが変化し続ければいいのではないでしょうか。

平和教育というのは教科書では扱えない内容を扱うことだと思うので、世界に目を向け、自国と他国の歴史を比較しながら、日本人としてではなく国際人としての考え方を養う事が重要だと思います。

過去の戦争について関心を持たない人が多い中で、定型化された平和学習を毎年繰り返していくのはマンネリ化を生んでしまうと思います。自分が意見を言う時間を設けていることや、戦争が起きた背景などを学べる学習が大事だと思います。

1 つ目は、行動型の平和教育が大事ではないかと考えます。話を聞く形での平和教育が主流ですが、沖縄でいえば、遺骨収集の現場に参加したり、発信する側に立ってみるのも大事ではないでしょうか。2 つ目は、議論する時間をちゃんと設けてあげることも重要ではないでしょうか。3 つ目は、受ける側と接点のある身近な方から話を聞いたり、身近な地域の話だと関心が持ちやすいと思うので、効果的だと思います。

我々の間でも議論になるのですが、私たちは言葉を使い分けています。平和教育とは過去から今にも繋がるような学習で、沖縄戦を関する学習は沖縄戦学習としています。使い分けることを大切にしています。

もう 1 つは、定型化されたやり方に不満があるとは思いますが、反復して習うことで得られるものや自身の発達段階によって受け取り方が変化していくことに気づくことで、さらなる学びがあるようにも思います。

Q2. 日本兵は英雄視されるべきなのか（シーサー）

- ゴーヤー
- ジンベイザメ
- シーサー
- 事業関係者

日本は被害者としての側面だけでなく加害者としての側面も持つ中で、日本のために亡くなった日本兵は英雄視されるべきなのか、議論してみたいです。

戦死された日本兵を悼む気持ちはありますが、讃えるとなるとまた意味が変わってくるような気がして認識の仕方として違うのかなと思います。それと同時に、戦後残された遺族からすると讃えてもらわなければ死を受け入れることができない部分もあるように思います。自分達の家族が讃えられないと無駄な死になってしまうとも思いました。

家庭での会話の中で自分達のおじいちゃんを英霊として会話することは悪いことだと思いません。国が英霊として祀ることには違和感があるが、家庭内では問題ないと思います。

長野出身で特攻で亡くなられた方の遺書を読んだ事があるのですが、その方は国のために戦うのではなく、家族のために戦い、死後は靖国神社ではなく天国に行くと遺していました。その方を遺族の方が英霊というのはごもっともであり、国家が彼のような方々を英霊だとするのは間違っているように感じます。

私は、英霊として讃えることを間違ってはいないと思っています。当時の日本の教育を受けていた彼らが本心で戦争をしていたかは分からないですが、彼らは分からないまま国に利用され、彼らの死があって今の日本社会があると考えると英霊と言えるのではないでしょうか。

当時の国家に逆らえず侵略を行い虐殺をしたが本意ではなかったということであれば許してもいいのでしょうか。その国家を止められなかった一国民としての加害性と実際に侵略し危害を加えた側であることには変わりはないように感じます。日本兵に虐殺された被害者や遺族の方々を目の前にしても、日本兵も国に利用された犠牲者であると言えるのでしょうか。また、侵略した日本兵とは異なり、日本国内で防衛し戦死した日本兵であれば英霊と呼べるのでしょうか。今後も向き合い続けるべき議題だと思います。

Q3. 軍隊は必要なのか（ジンベイザメ）

- ゴーヤー
- ジンベイザメ
- シーサー
- 事業関係者

軍隊は自国を守るためには重要な組織ですが、使い方によっては侵略戦争も可能です。私達に軍隊を監視することはできるのでしょうか。なぜ軍隊は必要なのか、改めて考えてみたいです。

ほとんどの国が軍隊を持つ中で、今更手放すことはできないと思います。攻められた時のために備えているだけであって、他国を侵略するために保持したいわけではないので、あくまで防衛、抑止のために重要だと思います。

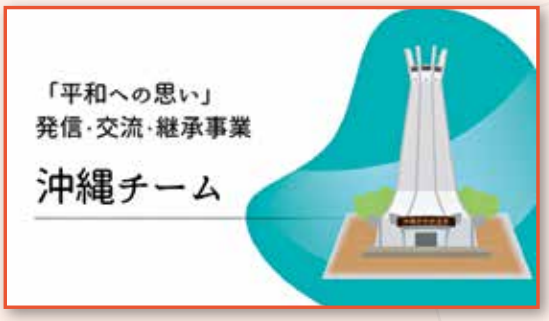
戦争のために軍隊を持ちたいというわけでなはく、外交をするためにも一定の軍事力、抑止力は必要という見方ができると思います。交渉を進めていくためにも、相手国と同等の力を持ち平和的解決を目指すために軍隊は必要だと考えています。

日本には侵略戦争を行なってきた歴史があり、当時国民が戦争に加担してしまった様に、予期せぬ方向に利用されるのではないでしょうか。軍隊ではなく、災害派遣等で活躍する組織であり続けるために国民の監視が重要だと思います。

僕は中国出身なので中国で歴史教育を受けてきました。中国で学ぶ歴史と日本で学ぶ歴史には異なる部分があり、互いに脅威に感じている様に見えます。その上で軍隊を持つことはさらに脅威に思わせてしまい、望まない方向に進んでしまうのではないでしょうか。日本側が自国の軍隊を信用していても歴史上、隣国から見ると脅威になる可能性もあるのではないでしょうか。

各グループの発表から、全体的に戦争するための軍隊ではなく、戦争しないために軍隊が必要という意見が多い様に感じました。不安定な国際情勢の中、世界各地で軍事費が上がり軍隊の重要性が高まっていますが、軍隊を持たず平和を維持する国もある中で、私たちはどちらを選ぶことが出来るでしょうか。私達国民が望む組織であっても、隣国からはどの様に見られているのか、歴史を通して考えることも重要だと思いました。

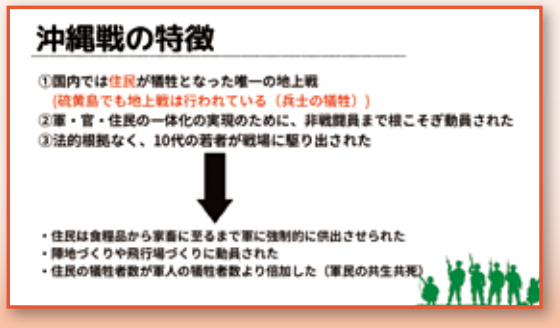
沖縄　テーマ：沖縄戦



まず沖縄県についてご紹介します。沖縄県は日本列島の南西端に位置し、東西に約 1,000km、南北に約 400km と広大な県域を持ちます。沖縄本島のような有人島が 47 あり、日本では唯一、県全域が高温多湿な亜熱帯気候に属しています。近隣の国は台湾、韓国、中国が挙げられ、新型コロナウイルス感染症拡大前は国内外から多くの観光客の方が訪れました。

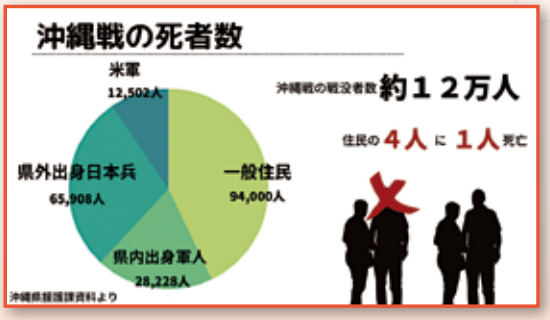
そんな亜熱帯地域に位置する沖縄に多くの方が抱くイメージといえば、青い海、白い砂浜ではないでしょうか？これらは観光地として人気な場所であり、多くの方が訪れます。沖縄のイメージは、そのような限定的なイメージが強く、本土復帰以降、リゾート感覚で沖縄に観光に来られる方が多いと思います。

しかし、観光の始まりは沖縄戦で戦没された方々の遺骨収集や戦跡巡りでした。沖縄に日本全国から遺族の方が集まり、家族の遺骨を探そうと、自然洞窟・ガマなどに入り、遺骨収集を行いました。沖縄の地には今もなお戦没者の遺骨が地中に埋まっています。その原因となった沖縄戦には、三つの特徴があります。

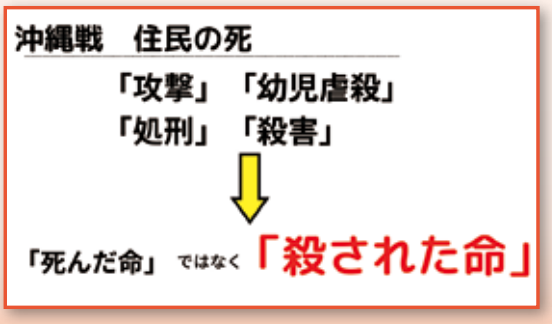


まず一つ目の特徴は、日本で行われた唯一の地上戦であるということ。地上戦では軍民混在という状況の中で多くの尊い命が失われました。二つ目に、軍人以外の非戦闘員まで根こそぎ動員されたこと。そして三つ目が、学生までもが動員対象にされたということです。

また、沖縄戦で多くの住民の方々が亡くなった背景には、沖縄戦の動きが大きく関連しています。大きな流れとして、４月１日に米軍は沖縄本島中部の読谷から北谷に上陸し、沖縄を北部と南部に分断して進軍を開始します。日本軍は南に集中していたため、北部では激しい戦闘が行われず、わずか２週間で制圧されました。沖縄本島南部に位置する首里には日本軍の第 32 軍司令部壕があるため、米軍は首里を目指した侵攻を行いましたが、その過程の中では様々な激戦が繰り広げられ、日米両軍ともに多くの死者を出しました。アメリカ軍が首里に迫ってくると日本軍は南部撤退を開始し、首里の司令部を破棄して、摩文仁に移動しました。その際、南部には多くの住民の方が避難していたのですが、南部に撤退する日本軍、それを追いかける米軍の間に挟まれ、軍民混在の事態の中、多くの犠牲が生まれました。



また、沖縄戦において沖縄県民の戦死者は約 12 万人にのぼり、これは沖縄県民の４人に１人という割合になります。これらの背景には南部撤退が深く関係しています。住民は米軍に捕まると、男は殺され女は乱暴されるという教えを受けており、戦闘が悪化すると、米軍に殺されるぐらいなら家族で一緒に死のうと集団自決を選んだ人も多くいます。また、沖縄戦は本土防衛のための持久戦とも言われており、沖縄戦における最高指揮官だった牛島満中将が６月 22 日に自決をする前に、最後の１人まで戦えと言ったことで、組織的な戦闘が終了した後も多くの犠牲者が生まれました。



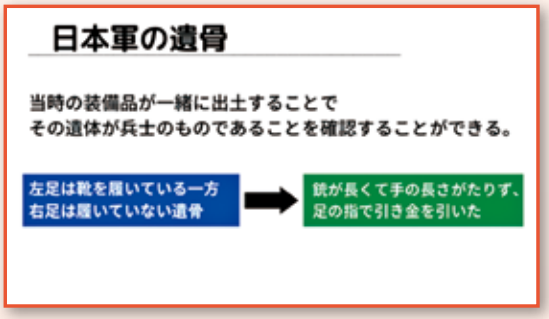
沖縄戦での住民の死因は、米軍による攻撃だけではありません。子どもの泣き声で米軍に居場所を知られてしまうことを恐れた幼児虐殺、スパイ容疑による処刑、降伏しようとする者への殺害などが挙げられます。どの死因も死んだ命ではなく、殺された命という視点を持つことが大切です。

沖縄戦終了後、遺族は証言や記憶を手がかりに遺骨収集を始めました。今でも遺骨は各地に残されており、収集作業が続けられています。沖縄戦激戦区である南部のガマや人工壕の中で見つかる遺骨は、日本軍の遺骨が大半です。強制的にガマを明け渡さなければならなかった住民は、逃げまとう戦火の中人知れず命を落とす方も多くいました。日本軍と住民の遺骨は発見場所や状況には大きな違いがあり、そこから様々な問題が浮かび上がってきます。

ガマや壕から住民の遺骨や遺品が見つかることはほとんどありません。なぜなら、ボタンやベルトがない簡易的で粗末な衣服を身につけていたため、遺骨になると衣服が腐食し住民と断定できない遺骨になるからです。右の写真は私達が実際に遺骨収集した際に見つけた兵士の水筒です。見つかった場所ではほかにも兵士の靴底やガスマスクの一部も発見されていることから、ここに兵士がいたことがわかります。

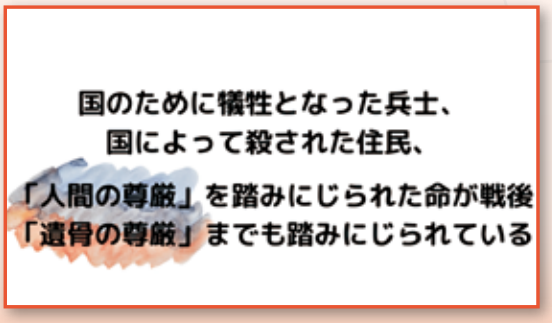
日本軍は、ガマや人工壕の他に、沖縄の伝統的なお墓を防御のための陣地にし、墓に眠っている遺骨の入った骨壺を取り出して避難壕にしました。お墓に納められていた遺骨ですから、沖縄戦の被害者だと捉えられます。実際戦後のお墓周辺では割れた骨壺が発見されることもあり、お墓の被葬者とわかることがあるそうです。

沖縄にはジーファーというかんざしがあり、女性の分身とも言われています。遺骨とともに発見されたかんざしは、持ち主自身がお守りとして戦場に持ち出していたのか。親族の分身とともに最期を迎えようと考えていたのかはわかりません。このように見つかる遺品からは当時の持ち主の心情や状況を、視野を広げ、想像することができます。



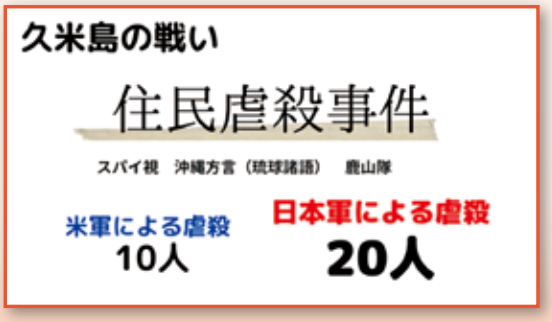
亡くなった当時身につけていた装備品が一緒に出土した場合、その方が兵士であったか、住民であったかを特定することができます。住民が身に着けていた衣服などは腐食してしまい、ほとんど残らないため、その遺骨が住民のものであると判断することは難しい一方で、軍服のボタンやベルトのバックルなどの金属製や陶製のものが遺骨と一緒に出てきた場合、その遺骨は日本兵のものであると判断することができます。遺骨は様々な状態で発見されますが、その中に左足は靴を履いている一方で、右足は履いていない遺骨がありました。これは何を意味しているのでしょうか？皆さんおわかりいただけますか。この状況から推測できることは、銃が長くて自分を撃つには手の長さが足りず、足の指を使って銃の引き金を引いたということです。このことから、僕はその日本兵はその先の恐怖から逃れるために何が何でもその場ですぐに死にたかったのだと思います。足を使ってまで自決をしようとするその心境が、77 年後を生きる僕には全く理解することができません。

沖縄戦で犠牲となられた方々は遺骨となり、沖縄戦の実相を物語っています。頭蓋骨に銃弾が貫通し、穴が開いた遺骨、岩に挟まれたままの遺骨など当時の姿のまま今も眠っています。しかし、家族の遺骨を探そうとガマに入る遺族の方は、ご高齢の方が多く、諦める方もいれば、記憶が薄れ、遺骨の場所を覚えていない方も多くいらっしゃいます。遺族の方だけが遺骨を収集する、そんな状況が続いていいのでしょうか？遺族が亡くなられた先、この遺骨は忘れ去られてしまうのでしょうか？遺骨が戦争の残骸ではなく、沖縄戦の証人として若い世代に継承していけるように私達の取り組みが鍵になるのではないかと思います。

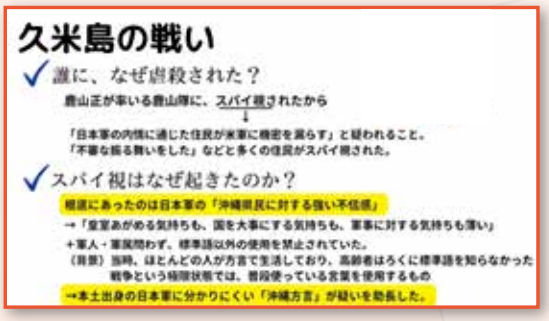


国のために犠牲となった兵士、そして国によって殺された住民、そういった人間の尊厳を踏みにじられた命が戦後、遺骨の尊厳までも踏みにじられている。この現状をなんとしてでも変えていかなければならないと感じています。

ここで、当時殺された命という点で、久米島での戦いを取り上げます。久米島は沖縄本島から 125km 離れた位置にある離島です。今皆さんにご覧いただいている写真があります。この写真を見て何が起こったか、少し考えてみてください。

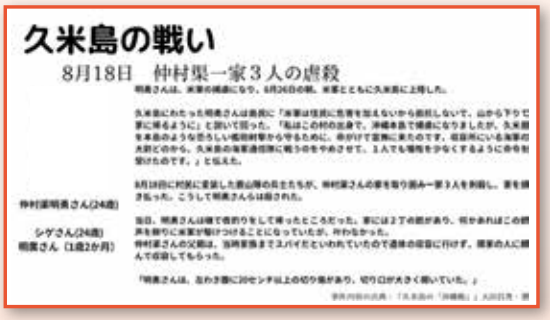


久米島で起こった戦いのキーワードとして挙げられるのが住民虐殺です。日本は米軍と戦闘していました。しかし、久米島では、米軍の攻撃による死者よりも、日本軍の虐殺によって亡くなられた方が多いのです。ではなぜ虐殺が起こったのかを考えていきたいと思います。

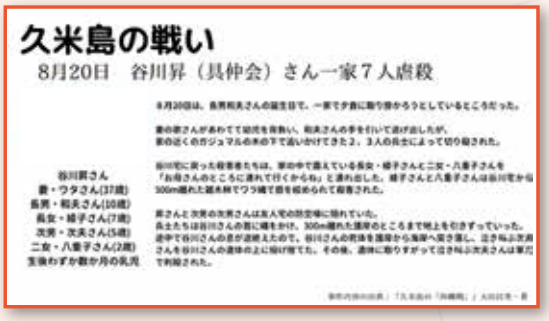


ここでのキーワードはスパイ視です。スパイ視とは日本軍の情報を米軍に漏らしたと住民が疑われることです。不審な振る舞いをしたなどとして多くの住民がスパイ視されました。スパイ視の根底にあるのは、日本軍の沖縄県民に対する強い不信感と言葉です。琉球王国が滅亡して日本に併合された沖縄は、徹底した皇民化教育がなされました。しかし、皇室を崇める気持ちも、国を大事にする気持ちも、軍事に対する気持ちも薄いと考えられていました。また、方言がわかりにくいという理由で標準語以外の使用が禁止されていました。しかし当時沖縄の人はほとんど方言で生活をしていました。特に高齢者の人たちは標準語を知らなかったと言われています。沖縄でいえば、ウチナーグチと呼ばれる言葉です。はいさい、くわっちいさびたん、「はいさい」はこんにちは、「くわっちいさびたん」はごちそうさまというごくごく日常的に使われる言葉です。しかし、本土出身の日本軍の兵士は、これらの方言を理解することができません。こうした沖縄県民に対する強い不信感、そして沖縄方言がスパイ視を助長しました。

久米島では冒頭に紹介した通り、四つの虐殺事件が起こっています。ここからは、そのうち二つに絞って虐殺事件についてご紹介します。

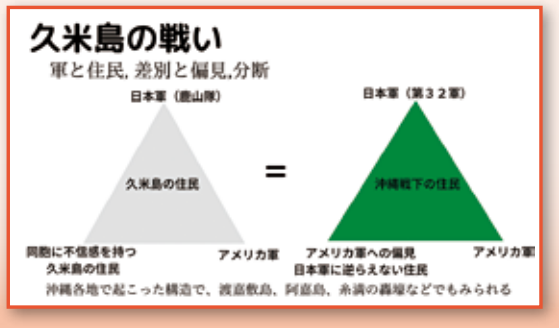


久米島で起こった戦いの中で仲村渠明勇さん一家の事件と谷川登さん一家の事件があります。まず、戦時中の沖縄では、米兵は残酷で恐ろしいと教えられていて住人は米軍に対して恐怖を抱いていたこと。また、日本軍も牛島満中将の命令として、最後まで敢闘し、悠久の大義に生くべしという命令があり、死ぬまで戦い抜くという考えがありました。その環境下で仲村渠さん一家殺害事件は、日本が降伏を発表した8月15日の終戦よりも後の8月18日に起きました。米軍の捕虜だった仲村渠さんは、久米島への艦砲射撃を阻止するため、久米島の住人に投降するよう呼びかけるため上陸しました。しかし、山の奥にこもっていた日本軍に米軍のスパイ容疑をかけられ、一家は殺害されました。



次に谷川さん一家虐殺事件を紹介します。谷川さん一家は家族での夕食の準備に取りかかろうとしていた際に一家７人が絞首惨殺されてしまいました。殺害された理由はスパイ視されていたことが理由の一つですが、なぜスパイ視され虐殺されたのでしょうか？谷川さんの妻、ウタさんは島で鋳掛屋やスクラップ商などを営み生計をたてており、仕事の都合上、ウタさんは統制品であった糸を村の人たちに分けたり、夫、昇さんは米軍上陸後、米軍駐屯地のゴミ捨て場から鉄くずなどの物資を回収することがあったりしたそうです。それらを妬んだ一部の住民が鹿山隊に谷川さん一家は「米軍に通じている」「統制品を持っているのは怪しい」などと密告し「スパイ」と見なされたといわれています。また三女が高熱を出し、昇さんが思い切って米軍に薬をもらいにいったところを見られ怪しまれたともいわれています。これがスパイ視の要因です。
加えて、朝鮮半島出身の昇さんと妻のウタさん、そしてその子たちに対する蔑視や偏見の意識は日本軍だけでなく、住民の根底にもあったと考えられています。沖縄に住んでいる人への日本軍からの差別に加え朝鮮人とあるという理由で同じ久米島の住民から蔑視や偏見があったのです。谷川さん一家は、このような経緯で沖縄戦の悲しい犠牲となってしまいました。

スパイ視の恐れがあるなか、久米島の住民が助かるよう動いていた仲村渠さんや、平穏に暮らしていた谷川さん一家は、鹿山隊に米軍の捕虜になることを阻止され惨殺されましたが、鹿山隊は最終的に米軍の捕虜になり生き延びています。そのことについて戦後、鹿山隊長は「時代の流れだから仕方なかった」と述べています。本当に仕方がないのでしょうか？



久米島の住民は当時の敵国アメリカだけでなく、友軍である日本軍、そして同じ久米島の住民から疑いの目を向けられていました。この関係性は沖縄戦で沖縄各地で見られた構図です。そして今、沖縄でも起こっている構造です。沖縄県民は日本の安全保障を巡って日本政府、アメリカ政府、そして同じ日本国民からの偏見や蔑視の目を向けられています。

沖縄戦終戦から今年で 77 年を迎えます。時代が発展するとともに沖縄戦体験者も年々減少していくなか、遺骨収集や久米島の戦いなど、まだまだ多くの人に知られていない沖縄戦もあります。このスライドの写真は、沖縄チームが実際に遺骨収集に参加したとき、遺骨問題を呼びかける「ガマフヤー」の具志堅隆松さんが収集した骨の一部を見せていただいたときの写真です。この遺骨の方は、もしかすると家族がいたのかもしれない。故郷に帰りたかったのかもしれない。それなのに、沖縄戦のときもその死後も命が軽く扱われています。それが遺骨が放置されている状況に繋がっているとも思います。そんなもどかしい葛藤がある中で、私達にできることは一体何でしょうか？多くの犠牲を出し、多くの涙が流れた沖縄戦。次世代に繋いでいくためには、記憶継承の一言では解決していけないと思います。沖縄チームの提案として、私たちは沖縄の地だからこそできることを大切にするべきだと思います。机で学ぶだけの受身型学習から遺骨収集などの行動型学習を通し、体感で平和について考えていく必要性があると思います。
今後の沖縄戦の継承をどうしていけばいいのか、会場の皆さんの意見もぜひお聞かせください。

質疑応答　◆沖縄戦

Q　沖縄戦の特徴として、「日本で行われた唯一の地上戦」という説明・表現があったが、私たちが事前学習で調査した限り、硫黄島も日米両軍による地上戦があったと思うが、この理解で正しいか。｜韓国

A　今おっしゃってくれた通り、全くその通りである。自分たちの把握・確認不足だった。ご指摘ありがとうございます。

Q　沖縄で遺骨収集をしたいと思ったときはどのようにすればよいのか。｜長崎

A　私達は「ガマフヤー」の具志堅さんという方を紹介していただき、実際に遺骨収集をすることができた。しかし一般的に遺骨収集をする場合、勝手に遺骨を掘り出して、いざ発見してしまったら、事件性がある可能性もあるので、もし遺骨収集をする場合には、一度このようなボランティア団体等にご連絡していただいて、直接その方々と同行し収集するという流れになるかと思う。

Q

（1）沖縄に住んでいる方々は学校教育の中で、沖縄本島で起きた戦闘、久米島やその他の離島で起きた戦争についても学ぶ機会があるのか。
（2）私は修学旅行でホームステイのような形で久米島に行ったことがあるが、その際に、特に戦争の話などを聞いたことがなかった。観光地になっている久米島にも、戦跡や資料館のようなものなど、一般の人が戦争について学べるような施設はあるか。｜広島

A

（1）学ぶ機会はあるが、沖縄本島中南部で起きた戦争の話がほとんどで、離島や北部であった事実や戦争の話は沖縄にいてもあまり聞かないし、学習することが少ない。沖縄戦の教育についても、私は沖縄で生まれ育ったが、6 月 23 日の慰霊の日の 1 週間ほど前に少し戦争に関する勉強をして、小学校であれば「月桃」という歌を歌うなどして、それだけで満足してしまうところがある。中学では証言を聞く機会があるが、梅雨の時期に蒸し暑い体育館の中で 1 時間話を聞くのは体力的にもきついものがあり、感想文を書くことだけに注力しがち。高校になると、沖縄戦どころか戦争の話を聞く意欲もないことも多く、ずっとこのエレベーター式の流れが続いてると感じている。私はこの流れの沖縄戦学習に違和感を覚えているので、平和教育のあり方として、今後は受身型の机で学ぶスタイルから行動型に移して、実際に自分で体験することが大事ではないかと考えている。

（2）久米島には博物館があり、そこで久米島の戦争の歴史を学ぶ事ができる。戦争の話をあまり聞かなかったという点に関して、これは僕の推測も含まれているが、広島・長崎でもきっと戦争体験、被爆の体験を語らない方はいらっしゃるんだと思う。それと同じことがおそらく沖縄戦にも言えるということと、先ほど紹介したスパイ視で、住民が同じ住民を疑うという構図があったことが影響しているのではないか。仲村渠さんの話に関して、仲村渠さんはスパイ視をされていつ日本軍に虐殺されるかわからないなか、住む場所を転々としていた。実際にある家で匿ってくれるようお願いをしていたらしいが、その人がもし仲村渠さんを匿っていたらスパイ視されている仲村渠さんを助けたことになり、匿った人も虐殺されることになる。そういった理由から、久米島の住民の方の中には、仲村渠さんが殺されたことに対して少し加担してしまったような感覚を持たれている方もいらっしゃる。広島チームが加害性について紹介していたように、そういった観点でなかなか戦争について語られない、語りづらいところがある。しかも沖縄はとても小さなコミュニティが多いため、そういった点でも語れない・語りたくないという背景があるのではないか。

Q

十代の子供たちも戦争に動員されたとのことだが、その中で生き残ることができた方々はいるのか。もしいるとすれば、当時十代で勉学の機会が奪われたものと推測するが、それで何らかの影響はあったか？｜カンボジア

A

沖縄戦当時、小中大の学生は、男女ともにひめゆり学徒隊や鉄血勤皇隊などで戦闘に動員されていた。激しい地上戦で生き残った方はとても少なく、若くして友人が目の前で死んでいくなか、彼らは自分だけが生き残ったことに対し罪悪感を抱き、亡くなるまで自分の辛い経験を誰にも言わなかったり、どうやって後世にこの思いを伝えていけばいいのかと葛藤された方も多い。証言者として活動されている方もいるが、私達はこの証言を鵜呑みにするのではなく、彼らが伝えたかったことを後世に託す必要があると思う。証言が聞ける機会も年々減少していく傾向が見られるので、どう繋いでいくかが今後の問題になると思う。

Q 沖縄南部地域では地上戦が激しかったとのことだが、南部地域の観光地開発の際に遺骨は発見されなかったか？もし見つかっているとしたら、どのような対応をしていたのか？｜韓国

A 遺骨が発見された場合には、国の担当省庁に対応を任せているのが現状である。

Q 遺骨について、まだ見つかっていない人の遺骨はどれくらいあるのか。｜台湾

A 遺骨収集センターによると、収集対象の遺骨は 18 万 8,000 柱を超えている。その中で一応今のところ発見され収集された遺骨は約 18 万 4,000 柱ほど。したがって総計として約 4,000 柱がまだ発見できていないことになる。しかし沖縄戦の正確な戦死者数がそもそも不明な状態で、一般住民がどこで亡くなったのか、それこそ砲弾に当たって粉々になって遺骨を収集することすらできない状態になることもあるし、さまざまな状況が想定されるため、数字として出ているのは大体 3,500 柱だが、戦死者数がまだ確定されていないことを踏まえると、それを上回る数の遺骨が未収集といえるのではないか。

Q 住民が虐殺される事件があったとのことだが、スパイ容疑以外で殺されてしまった事例はあるか？｜長崎

A 壕やガマでは、幼児・赤ちゃんが泣くと米軍に見つかり殺されてしまうので、日本の兵士が赤ちゃんを虐殺することがあった。また、食料を得るために日本兵が現地住民を殺して食料を奪うこともあった。加えて、間接的ではあるが、ガマを軍が使うとして現地住民を追い出し、その結果亡くなるケースがあった。

ディスカッション

テ　ー　マ	各地域で発生した悲惨な戦争・事件などの原因とその解決策とは
日　　時	2022 年 11 月 11 日（金）
場　　所	糸満市観光文化交流拠点施設 シャボン玉石けん くくる糸満　多目的室
モデレーター	沖縄キリスト教学院大学　教授　新垣誠

司会

本日はモデレーターとして、沖縄キリスト教学院大学教授の新垣誠先生をお招きしています。最初のディスカッションテーマは皆さんが発表された事件や戦争からどんな教訓が得られるのかについて意見交換をしたいと思っています。では、モデレーターの新垣先生にマイクをお渡ししたいと思います。

モデレーター

ハイサイ、グスーヨー、チューウガナビラ。新垣誠です。よろしくお願いいたします。皆さん、この 6 日間の間に色々な学びをしてきた中で、皆さんの中で平和の思いが育ってきたのではないかと思っています。今日のディスカッションは、明日 11 月 12 日のシンポジウムに向けての下準備です。どうすれば平和が実現できるのか、平和に向かって皆さんたちはどう動いていけばよいのか。また、せっかくこうして集った皆さんたちがどう協力して、平和を作る過程に参加できるのか、そういうことを考えてみたいと思います。

モデレーター

本日は、各地で起きた不幸な出来事から得られる教訓を考えるという話がありましたが、まずは出来事の原因を考えます。なぜそれらの不幸な事件が起きてしまったのか。虐殺や戦争などの悲劇の原因について各グループで考えていただき、その後、発表していただきたいと思います。それではよろしくお願いします。

== グループ内で意見交換 ==

モデレーター

時間となりました。まず沖縄チームお願いします。沖縄戦という大きな不幸が起きてしまったその原因をどう考えましたか。

沖縄チーム

沖縄戦の話の中でも、私たちが調べて発表した久米島での虐殺についてグループで話し合ってみました。虐殺が起きてしまった原因として、不信感という１つのキーワードが出ました。先ほどの私たちの発表でも説明したように、日本軍が住民を信じないという不信感によって虐殺が起きたり、島民同士の不信感によってスパイだと密告したりすることがあったからです。

モデレーター

かなり小さなコミュニティの中で今まで仲良くしていた島民の方々の人間関係において、それが崩れるようなことが起きたということですよね。不信感が生まれる背景として、どういう力が働いたと思いますか。

沖縄チーム

軍の介入による分断ではないかなと考えました。当時、久米島にいた日本軍は約 30 人で、久米島の住民数は約 1 万 5,000 人だったことを考えると、仮に久米島の住民が一致団結をして日本軍を追い出そうとした場合、ある意味簡単だったと思います。軍は彼らがいかに久米島の中で生き残るかを考え、住民を分断してバラバラにすることで、自分たちに不信感が向かないようにした。そういう意味で久米島にいた日本軍が住民を分断する働きかけをしていたのではと思っています。

モデレーター

おそらく島民が団結してしまうと軍の命令も聞かなくなるかもしれないということで、いわゆる分割統治という形で住民を分断して、統治をしやすくしたということですね。ありがとうございます。では、次に台湾の皆さんお願いいたします。

台湾チーム

3 つの原因があると考えました。1 つ目は言葉の違いです。1945 年に第二次世界大戦が終結し、台湾は中華民国の統治へと移行しました。しかし、戦争終結前においては、台湾人は日本語と台湾本土の台湾語、そして少数民族の客家語などでしか話すことができず、中華民国の中国語が喋れませんでした。そのため中国語を話す人が少数だったことで、国民と政府との間の壁が時間が経つにつれより大きくなりました。

もう 1 つの原因は、外省人の政府が有していた戦争で勝ったという優越感だと思います。自分たちのおかげで本省人は植民地から解放されたという優越感があり、それに起因して本省人と外省人の間で認識のズレがあったと考えられます。3 つ目は、当時の中華民国の台湾長官である陳儀という人物の性質だと思われます。事件の際に、陳儀長官は台湾人の陳情を受け入れる態度を示す一方で、中国大陸の蒋介石に鎮圧部隊の増援を要請しました。台湾人は中華民国との交渉の末に合意が形成されたと思い、2.28 事件も収束を見せていましたが、結果として鎮圧部隊によって鎮圧されてしまいました。もし長官が別の人物であったら、異なる結果になっていたと思います。

モデレーター

ありがとうございます。興味深かったのは、まず言葉の違いですね、おそらく言葉の違いもあると思いますが様々な文化習慣の違いもあったのかもしれないと感じました。それによって「違う人々」という線が引かれてしまったのかなと思います。そして、この 2 つのグループの間に暴力的な関係を生み出したのがおそらく自分たちが解放してやったというという意識、「優越感」と言われていましたが、そこから差別意識のようなものが生まれてきてしまったのかなと思いました。3 つ目に政治リーダーの話もありました。沖縄チームと同様ですが、出てきた答えとしては人々の間の分断です。本来なら仲良くできたかもしれないのに、そこで暮らす人と人が衝突することで事件が起きてしまった。同じ場所にいるお互いのことを理解できなかったという点、興味深い話でした。次に、長崎チームいかがでしょうか。

長崎チーム

私たちも 3 つの原因を考えました。いろいろな側面があるためはっきりと言えない部分もありますが、まず 1 つ目が、実際に日本が既に戦争をしていた事実があるということ、2 つ目は、長崎は兵器工場や軍艦を造っている軍事拠点であったということ、3 つ目に当時は核開発競争が始まっており、アメリカが先に核兵器を使用し周辺国への威嚇を意図していたということになります。

モデレーター

既に戦争が始まっていたという点ですが、そもそもなぜ戦争が始まったのかについて意見はありましたか。

長崎チーム

日本が資源を求めて他国に侵攻をしたという意見がありました。

モデレーター

なるほど、日本の軍国主義や帝国主義についても話をしたということですね。ありがとうございます。関連しているのかもしれませんが、軍事施設があった広島チームでは意見がありましたか？

広島チーム

２つあります。１つ目は、なぜ広島が投下地として選ばれたのか。もう１つはそもそもなぜ原爆が使用されたのかについて考えました。まず、広島が投下地として選ばれた理由については、広島が軍都であり、それまでに空襲被害が少なかった地域の中で都市といえる程度の規模感があったこと、さらに地形的に平野部が多いということで広島が選ばれたと考えました。

原爆がなぜ使用されたのかについては、日本が早く降伏しなかったことが一因かと思います。グアム・サイパンという絶対国防圏が崩れた時点で、本来は降伏すべきだったが、降伏ができなかった、それは政治家や日本の国を作っている人たちがそういった考えであったのではないか。また、狂気のようなものが日本中を覆っており、結果として軍国主義国家日本という国が作られてしまい、その延長線でポツダム宣言においても日本が天皇制をやめることを譲れなかった。しかし、アメリカは日本が天皇制をやめることはできないということを本当は理解したうえでそれを突きつけていた。加えて、ソ連などについての外交における日本の情報不足などの意見があがりました。

モデレーター

そうですね、政治家の判断ミスというのが一つ大きいと思いますね。また、狂気という話が非常に面白いなと思っていて、あの頃の日本国民はどういうところが狂気じみていたのでしょうか。

広島チーム

最後の１人になるまで戦うといった考えや、国家のために戦うといったことが美しいとされていたことです。

モデレーター

ということは軍国教育や皇民化教育を通じてマインドコントロールをされていたということなのでしょうか。興味深いですね。ありがとうございました。次にカンボジアの皆さんいかがですか。

カンボジアチーム

虐殺が起こった時代、つまり、民主カンプチア政権の誕生には主に２つの原因があるのではないかと思います。１つ目は、政治イデオロギーの違いです。当時、世界は共産主義と資本主義という２つのグループに分かれており、当時の人々は自分が政権を持てば国を良くすることができると考えていたことが、戦争につながっていったというのが１つ目です。

２つ目は過度な愛国心が原因ではないかと思われます。当時の民主カンプチア政権の人々は２つの考えを持っていました。まず、彼らは外国を憎んでいました。カンボジアは民主カンプチア政権時代まで、色々な外国から植民地化されていた事実があり、政権政党は外国人が嫌いでした。彼らはカンボジア人だけでも生きていけると考え、外国人の入国を禁止しようと考えていました。もう１つが、地方の人々は純粋で素直な人たちである一方で、都市の人々は頑固で外国に興味を持っている人であるとみなしており、都市、首都の人たちを地方に移動させようという考えをもっていました。こういった背景から、虐殺が起こったと考えています。

モデレーター

3 点挙げてもらいました。まず、社会主義と資本主義というイデオロギーの対立ということでした。ここでも分断・対立があって、和解がなかなかできない。どの国でもそうだと思いますが、政治における分断は難しい部分があります。また、やはりカンボジアが植民地化されてきたという歴史上の経験が大きいですよね。そうなると外国人に対する不信感、反発、そういう気持ちは植民地化された地域にはあると思います。それによって、外国人を受け入れないというもう 1 つの分断が見えました。そして 3 つ目もそうですよね、ポルポト政権の 1 つの政策ですが、知識人はけしからんと言い、農民を称賛する中で虐殺も起きていたと。やはりここに見られるのも人々の対立、分断ではないでしょうか。何よりもカンボジア国内でカンボジアの人々が様々なイデオロギー、植民地主義、そしてポルポト政権などによって分断されてしまい、非常につらい経験や虐殺を生み出してしまったのだろうと思いました。次に、ベトナムの皆さんいかがですか。

ベトナムチーム

まずベトナム戦争の原因です。戦争の原因は、アメリカが北ベトナムから東南アジアへの社会主義の広がりを抑制したいという欲求を持っていたからです。次に、帝国主義のアメリカは社会主義が広がる東南アジアの国々を西側諸国へ取り戻したいという欲求も持っていました。

モデレーター

アメリカの帝国主義、そしてアジアにおける覇権争いなど、冷戦下での米ソの対立が大きかったかなと思います。同じことがベトナムだけでなく朝鮮半島でも起きており、また、今日も様々な国で冷戦時代のような政治イデオロギーによる分断が人々を不幸な状況に巻き込んでしまっていることが見えてきたのではないでしょうか。この点については、他の地域とも共通点があるのだろうと思いました。韓国チームいかがでしょうか。

韓国チーム

思想の違いや理念の違いを暴力的な方法で解決しようとした権力をもった集団による人権の抹殺が起きました。住民虐殺に代表される人権抹殺は世代を超え、社会のあちこちに後遺症を残しています。このような事例は韓国だけではなく、カンボジアや台湾でも確認できます。学生である私たちはこれらの出来事を経験はしていませんが、今回の共同学習を通じて済州、台湾、カンボジアでの事例を確認することができました。

続いて済州島 4.3 事件についてですが、この事件は発生したその時代にだけ影響を及ぼすのではなく、私たちの人生に影響し平和な未来を妨げています。これが今回の共同学習を通じて私達が得た教訓です。そしてこれらの教訓は、過去の事件などを解決し、克服するための解決策を模索する際には国際的な連帯と交流が必要であることを証明しています。

モデレーター

韓国チームは、地域の事件や戦争をどうやって解決できるのかというところまで話しをしていただきました。大きなキーワードを発言されたと思っています。「暴力による解決」という発言がありました。人間はお互いの違い、理念の違い、イデオロギーなどの違いを持って生きてるわけですが、済州島 4.3 事件はその違いを暴力によって解決しようとしました。さらに、韓国チームは台湾や他の地域でも同じことが起きていることに気づいたと言われていました。これまでに、皆さんが発表した様々な原因を見るといくつかの共通点が見えてくる思います。

歴史の中で人間はイデオロギーなどの様々な対立を生み出し、今でも生み出していますが、これをどうやって解決していくのか。私たちは分断や対立を避けるためにはどうしたらいいのか。こういった疑問がキーとなるのかなと感じました。

モデレーター

次の質問に移ります。皆さんが挙げた様々な不幸な事件や戦争の原因を解決するためにはどうすればいいのでしょうか。先ほど挙げていただいた原因が今なお存在しているのか、もしくはもう存在しないのかも併せて考えてもらいたいと思います。

== 各チーム内での意見交換 ==

モデレーター

まずは広島の皆さん、いかがですか。

広島チーム

私たちは、原因として軍国主義を挙げました。今の日本は軍国主義ではないと考えていますが、日本国内では、見せたいものしか見せないという情報操作が行われていると考えています。そこで、解決策の 1 つ目は、見せたいものしか見せられていないという事実に気づくこと。そのためには海外に出て外から日本を見てみること、さらに市民交流で互いに自国の欠点を共有することが重要です。2 つ目は、軍国主義国家を作らないために既存の民主主義の制度を利用するということです。私たちにできることとしては、選挙に行く、有権者の意識を変える活動に関わっていく。以上 2 つの意見が出ました。

モデレーター

皆さんで取り組めそうなことがたくさんありますね。特に、受け取る情報を精査するというメディアリテラシーの話ですが、メディアも多様化する中で私たちは日本のメディアだけでなく、多様なソースから情報を収集することも可能となっていますね。次にベトナムの皆さんいかがですか。

ベトナムチーム

ベトナム戦争の要因を欲求と伝えましたが、解決策を考えてみました。解決策として、私たちは他国の若者と交流し互いの歴史や異文化を理解して尊重すること、他国の歴史を調べることは戦争のない世界づくりにつながると思っています。また、若者たちに自分の周りの人を尊重する態度を教えることもよいと思います。具体例として、大学生である私たちは本事業のような交流会に参加し、ベトナムの文化を共有していきます。

モデレーター

人間の本質に関わるような発言がありました。欲という言葉がありました。欲とは良いものなのでしょうか、それとも悪いものなのでしょうか。欲がなければ人間は進歩できないような気もしますが、欲にもおそらく違いがある。

モデレーター

仲本さん、このコップを使って何か好きなことをしてみてください（水を飲む）。仲本さんはコップで水を飲みましたが、では私も好きなことをしてみましょう（水をかける）仲本さんごめんなさい。

モデレーター

仲本さんはコップを使って彼の欲を満たしました。水を飲む行為は誰も傷つけないわけですね。私の欲は何かというと、コップを使って仲本さんをびしょ濡れにしようとしました。私の欲はおそらく仲本さんを怒らせてしまうでしょう。これが重要な点でしょう。人間は様々な欲を持っていますが、良い悪いの基準の１つが自分の欲は人を傷つけるのかどうか。個人間そして国家間でも同様のことがいえるのかもしれません。ベトナムチームの発言にあったように、悪い欲を抑えて解決するためには、他者を尊重する気持ちが重要です。これができれば、人間は本当に平和な社会を作れると思いました。そのために人々が互いの事を理解し、交流するという話でした。では、次に、長崎の皆さん行ってみましょう。

長崎チーム

長崎チームが考えた課題は、佐世保に軍事拠点が残っていることと、過去に日本は資源を求めて戦争をしていたという視点から、日本は自立して資源を確保できていないという点です。これらの解決策ですが、軍事拠点については私達個人で何か行動をすることが難しいところもあると思っています。また、軍事拠点についてはそこで働くことで生計を立てている人々もいるため、その全てを即座に無くすことは難しいと考えています。しかし今回、沖縄の基地を見たことで軍にも色々な種類があると理解したので、必要な基地を選別していくということは可能かもしれません。また、生計を立てている人については、国が保証などの対応をしてもらえるといいなと思っています。資源の自立ができていない点については、日本は技術大国であるので国際的に協調しつつ、資源不足を技術でカバーできるのではないかなと考えました。

モデレーター

世界中で資源の奪い合いになっているが、今の生活レベルを維持するために必要な資源は膨大で、地球が資源を再生可能なスピードをはるかに上回っているという現実を考えると、そもそも、我々はここまで資源が必要なのかと疑問に感じたりもします。

軍事拠点の話は、私たちにとってホットな話題ではないでしょうか。台湾の皆さんは、中国との関係で非常に懸念するところがあり、韓国では北朝鮮によるミサイルの発射や、韓米の軍事演習に関連した緊張感があると思います。

沖縄には巨大な米軍基地もあり、台湾海峡の緊張感とは無縁ではありませんね。軍事拠点や基地が安全を提供していると言う人もいれば、基地があるから攻撃されると言う人もいます。ぜひ、皆さんで議論を深めてほしい話題です。次に、カンボジアの皆さんいかがですか。

カンボジアチーム

カンボジアチームは先ほど、戦争や虐殺の原因 1 つとしてまず過度な愛国心とイデオロギーの違いを挙げましたが、分断から戦争が生じるとも考えることができると思います。そこで、現在でもそのような問題が残っていると意識したうえで、3 つの対策を考えました。1 つ目は、世界には多様な文化が存在するという教育を提供することで、多様な文化の存在を受け入れようという意識を高めることが必要だと考えます。2 つ目は人と人の間にも違いがあり、その違いをお互いに理解するための教育をすることが重要ではないかと考えています。3 つ目は、地域や世界の中にも統一性があることを理解していかないといけないと思っています。つまり、平和な社会にするために、我々は地域レベルや世界レベルでの統一性を理解し、お互いを受容しあうようになっていけばいいと思っています。

先ほど述べた 2 つ目の原因であるイデオロギーの違いや政治の問題に関しては、海外でも同じような課題が残っていると考えられます。その対策として、政権、政党、政治における違いがあるものの、表現の自由を認め、選挙などを使って民主主義的に国民が望ましい政権、生き方を選ぶ場を作ることが一番良い方法ではないかと思っています。

モデレーター

分断をなくすために文化の多様性に関する教育が大事であるということ、そして、人と人との違いを認めることが重要であるという話をいただきました。画家のピカソはキュビズムという自分のアートスタイルを作り出した際に批判されましたが、彼は、「私は中国語を理解しないが中国語の存在は否定しない」と言いました。要は、自分のアートを理解してくれないからといって、自分のアートに価値がないわけではないというメッセージです。彼の言葉のように、我々もお互いの違いを認め合うことが大事だと思います。さらに、表現の自由や主権者たる国民についても触れていました。広島チームも選挙に触れていましたが、カンボジアチームの意見は、主権者として国民が幸せになる政治を自ら選んでいくことが重要だというものでした。続いて、台湾の皆さんいかがでしょうか？

台湾チーム

私たちは、2.28 事件による悲劇や衝突は解決済みだと思っています。その理由は 3 点あり後で説明いたします。モデレーターも話されていた台湾問題の中について、私達は必死に平和を維持しようとしているところです。では、先ほど述べた 2.28 事件の原因の 1 つである、言葉が通じない、という問題を解決するために、台湾人と外省人は両者の言語を学ぶべきです。台湾人が中国語（北京語）を学び、そして外省人が台湾語を学ぶことでこの問題は解決するかと思います。2 つに挙げた、外省人による台湾人への差別についても解決済みだと思います。なぜなら、教育の普及によっ

て、差別に対する意識が高まったことで私たちは他者に対して平等な態度で接しており、現在、差別の問題はないと思います。3 つ目の問題は台湾におけるリーダーの性質についてでした。これを解決するには、やはり選挙をすることが必要です。蒋介石の次に台湾の総統となったのは、彼の息子である蔣経国でした。彼の性格は、2.28 事件の際の長官であった陳儀とは異なり、開放的で多くの台湾人を政府に受け入れました。その次の総統は李登輝ですが、彼は投票によって国民が総統を選ぶことができるようにしました。ここから台湾人は自分で総統の候補者を選べるようになりました。選挙によって、リーダーとしての性質に問題がある候補者を除き、一番いい候補者を選ぶことが可能です。

モデレーター

はい、ありがとうございます。そうですね、言語をお互いに学び合うというのが非常に面白かったですね。また、国民の意識が高まったという話でしたが、その高い意識をもって選挙に参加するという主権者としての心構えが大事なのだと思わされました。若い世代の皆さんは今後も重大な決断をする場面に立たせられますが、色々な情報を取り入れて自分で判断する力を養っていかないといけないという意気込みを感じることができました。続いて韓国チームお願いします。

韓国チーム

韓国チームは、済州島 4.3 事件を通じて平和な社会をつくるための 3 つの方法を考えました。1 つ目は、加害者と被害者、犠牲者をどう定義するかについての議論が必要だと思います。済州島 4.3 事件の犠牲者を認定する過程において、住民を虐殺した軍人、警察をはじめとする討伐隊は犠牲者と認められました。その一方で、討伐隊の反対勢力だった武装隊は幹部をはじめ一部が犠牲者として認められませんでした。事件を経験した人々すべてを犠牲者として認めるかについての議論、そして皆を犠牲者として認めない場合に生じる社会的問題に対する議論を十分に経てこそ社会の中で発生しえる葛藤を最小化でき、それが平和に近づく 1 つの方法になるのではないかと思いました。このような犠牲者の選別を巡る問題は済州島だけに限ったことではありません。正しい犠牲者を巡る葛藤も私達が注目すべき現象だと思いました。

2 つ目に、最近、済州島 4.3 事件真相究明および犠牲者名誉回復に関する特別法の改正案が採択されました。この特別法を制定および改正する過程でいくつかの政治的な問題が絡んでいました。それらにより法案はその通過が遅れたり、補償者の範囲や擁護に対する調整が発生するなど政治的な動きに左右されてきました。そこで、私たちは済州島 4.3 事件に対する問題を政治的理念に関係なく見つめることができる見方を育てることが何より重要だと思いました。政権によって歴史に対する解釈と認識が変わる現象は済州だけで起きているのではありません。台湾チームの発表でも、国民党と民進党の間で 2.28 事件の見方が大きく異なることがわかりました。政治が歴史認識に介入する現象を注意深く観察する必要があると思い、私たち戦争や事件を体験していない世代にできることは何だろうと考えてみました。まず沖縄チームの発表で、事前学習期間に参加者が直接遺骨収集に参加したと聞いてびっくりしました。沖縄チームは遺骨収集に参加し、長崎と広島チームは証言者に会いました。考えてみると、今回の済州チームは、記念館や慰霊碑で、いわば、簡単に歴史を拝見しようとしており、他地域の発表を聞いて反省しました。もちろん、記念館などは私たちのような非体験者世代が歴史を学習できる重要な媒介です。しかし、沖縄、広島、長崎チームが発表したように、生存者はまだ私たちのそばに住んでいます。

韓国チーム

済州にも済州島 4.3 事件の体験者がいます。その方々が生きていらっしゃるということはまだ歴史が過去になっていないという意味だと思います。私達の世代はサバイバーに会える最後の世代だということを自覚しています。教訓を学び、解決策を見つけるために私達は簡単に記念館に行くことができます。しかしまだサバイバーが生きている間にサバイバーの声を傾聴しなければなりません。最後の瞬間です。直接サバイバーと共存できる最後の世代ということは歴史が過去になる直前ということではないでしょうか？歴史を性急に過去にしないこと、そのために歴史のリアリティーを目撃して歴史を体験する活動を積極的に行い、記録と感情を豊かに残すことが、私達にできる小さな実践だと思います。以上です。ありがとうございました。

モデレーター

韓国チームの発表にとても重要なポイントがたくさんありました。1 つは、加害者性と被害者性という、非常に重要な考えが出てきました。参加者の皆さんはおそらく、様々な事件や不幸な出来事のいわゆる被害者の立場として参加されていると思いますが、被害者性って訴えてもなかなか共感を呼ぶのが難しいですよね。自分たちの痛みやつらさという被害者性は内に向かいます。難しいのは加害者性の部分です。広島・長崎にはおそらく朝鮮半島出身の被爆者もいたよね、沖縄にも慰安婦がいたよね、ベトナム戦争では沖縄から B29 出発して爆撃したよね、韓国は米軍と一緒にベトナム戦争参加したよね、というように、私達の歴史って複雑に被害者性・加害者性が入り組んでいます。重要なことは、自分たちが単なる被害者ではなくて加害者でもあるというところです。世代が違うので自分たちがやったことではないという意見もあるかと思いますが、これらに対してどう説明責任を果たしたうえで、未来に向かっていけるのか考えることが重要だと思います。

また、韓国チームの話を聞いて、政治的に様々なことが利用されたり変えられたりしてしまう中で、私たちは政治による色眼鏡を超え、人間としての普遍的な価値観や感情を通して色々なことを見ないといけないと思わされました。韓国チームは、過去に起きた不幸な出来事から生じる痛みをどう伝えていくのかについて問題提起もしていました。沖縄にも広島、長崎、済州島にも資料館などがありますが、それらの場所で私たちはただ漫然と掲示を見るのか、それとも生き残った方々の痛みを自らの魂に刻みこむくらいの作業ができるのでしょうか。さらに私たちは被害者・加害者という両方の視点を持たなければならない。韓国の皆さんの話をありがとうございました。沖縄チームの皆さん報告お願いします。

沖縄チーム

私たちは、先ほどの発表で久米島での虐殺の原因を不信感としたのですが、その不信感がどこから来てるのかなっていうのを考えました。不信感は相手のことを理解していなかったり知らなかったりすることに依るものが一番大きいと思いました。不信感を消し去っていくには、相手について情報を得ていかなければならないので、自ら相手を知ろうとしたり理解しようとする気持ちが大事だと思っています。また、相手を知っていく一方で自分自身や、自分が置かれている状況、恐怖などの目に見えない感情を俯瞰して、明確化することが大事なのかなと感じました。

モデレーター

国連のユネスコ憲章の中に、「戦争というのは人の心から生まれるものである。だから、人の心の中に平和の砦を築かないといけない」という文言がありますが、まさしくそれかなと思います。例えば、ミサイルが発射された、領海侵犯が起きたといったメディアから流れてくる情報によって、私たちは不安を感じます。そうすると、どうすれば自分を守れるのかといった内向きの思考に陥ってしまい、結果として、相手よりもより大きな暴力でどうにか抑え込んでしまおうと考えてしまいます。広島チームが狂気という言葉を使っていましたが、不安をかき立てたり扇動的情報が人々の不安をあおり、そこから内向きになり、沖縄チームの取り上げた不信感を生むという悪循環を生んでいくのかなと思いました。全てのチームから深い答えが出てきて非常に良かったと思います。

モデレーター

本日アシスタントととして参加されている、昨年の参加者の仲本さん、本日の皆さんの話を聞いてどうでしたか？

アシスタントモデレーター

韓国チームが述べていた歴史を体験するという表現が良いと思いました。体験者から話を聞くこと、遺骨収集に行くことを言語化して表現したことはなかったが、それらを歴史を体験すると表現されていて非常に合っているなと感じました。

アシスタントモデレーター

1 つ質問があります。昨年、私もこの事業に参加して、台湾やベトナムの学生と軍隊の必要性について熱い議論をしました。しかし、その半年後にウクライナ侵攻が起きてしまいました。私たち、若い世代が市民レベルで理解し合って戦争を止めようという議論をした半年後に戦争が始まってしまい、私は無力感を感じつつもやはり交流は続けなければいけないと感じています。

他国を理解する、多様性、共感し合う、お互いを理解し合う、不信感が戦争を生むかもしれない、という意見は去年の議論でも出てきました。現在、平和を大事にして互いを理解しあおうという話はしつつも、自分たちの国ではどんどんと軍拡が進んでいっています。市民レベルで理解し合おうとしている私たちが住んでいる国で軍拡が進む兆候があるという矛盾した状況があり、その矛盾は不信感を生んでしまうのではないかと思っています。相手と同じ土俵で対等に意見交換をするためには、同程度の軍隊を持つべきという考え方もできると思います。また、相手から信頼を得るために軍を減らす、軍拡の動きにストップをかけていくという考え方もあると思います。議論を進めるために軍は拡大すべきなのか、もしくは信頼を得るために減らしていくべきなのか、最後議論をしてほしいなと思いました。

モデレーター

非常にヘビーな課題ですね。台湾の皆さんは、今、不安を抱えている。韓国の皆さんは休戦中とはいえ徴兵もあり、戦争の真っ只中である。ベトナムの皆さんカンボジアの皆さんは様々な隣国との対立や不安を抱えている部分もあると思います。日本が軍事化していくことに対する不安もアジアの皆さんは抱えていると思います。残りも時間は約 20 分ですが、チームの中で話をしてみてください。話し合って理解しあいたいと言っている傍らで、世界では軍事化が進んでいる。ウクライナ戦争が起きてからというもの多くの国で軍事費が軒並上がっている。軍事産業が発達し 1 発で何億円もするミサイルが飛び、その背後ではワクチンさえ打てず子どもたちが死んでいるという現状があります。その中で皆さんは自分たちの国の軍隊をどう考えていますか。

== 各チーム内での意見交換 ==

モデレーター

では、意見を聞いていきたいと思います。台湾チームの皆さんの話を聞いてみたいと思います。

台湾チーム

軍事力を維持すべきかどうかについては、はい、と答えます。なぜかというと、先ほどの人間の欲望の話がありましたが軍事力の特性はそれに近いと思います。軍事力を持つことで必ずしも侵略するわけではなく、自衛も軍事力の１つの機能です。自分を守るため一定の程度の軍事力は必要だと思います。自分たちの軍事拠点を全部放棄して融和姿勢を示すことで、野望のある他国に攻撃される可能性もあるかと思いました。

モデレーター

現実的な問題に直面している台湾チームからのお話でした。それでは、沖縄チームいかがですか。

沖縄チーム

結論から言うと意見がまとまりませんでした。私が個人的に思ったことは、軍事力とはなんだろうということでした。国連の安全保障理事会を例として挙げると、５つの常任理事国は拒否権を持っている。この５か国はどれも軍事超大国であり、国が発言力を強く持ち、言いたいことを伝えていくには、ある程度軍事力が必要になるのかなと思いました。日本は自衛隊という組織があり、自衛隊を他国へ派遣するには制限があり、自衛隊の活動範囲を広げてもいいのでないかとは思う反面、それは戦前の日本と似ているのかなと考えたりしています。

モデレーター

苦悩の跡が見られる発言でした。簡単に答えが出る話ではないですよね。もちろん私たちは理想を語るわけですが、そこにはやはり現実があり私たちは理想と現実の狭間で何をしていくのかがこの場では問われてるのでしょう。台湾と同じように非常にシビアな状態に置かれている朝鮮半島を考えると、韓国チームの皆さんに話を聞いてみたいと思います。

韓国チーム

チームとしてまとまった意見は出ませんでしたが、個人的な意見としては、韓国は休戦中なので軍隊をなくすことはできませんが、戦争をなくすために私たちはこの平和への思い事業に参加していると思っています。

私は軍隊に行った経験があります。軍隊に行ったことがあるという経験が社会を暴力的な雰囲気にすることに寄与しないでほしいと願っています。

モデレーター

苦悩の後が見られましたね。次に長崎チーム聞いてみてもいいですか？

長崎チーム

まとまってはいませんが、大きく 2 つ意見が出ました。1 つ目はそもそも今の軍隊や自衛隊が何をしてるかを知らないということと、2 つ目は軍隊や自衛隊を誰に対してどう使っていくのかによって考えは変わるのではないかと思いました。

モデレーター

はいありがとうございます。つづいてカンボジアチームいかがですか。

カンボジアチーム

カンボジアチームは全員、軍隊を維持すべきという答えになりました。軍隊を保持する目的は侵略ではなく、自国を保護し独立性を守るためにあると理解されています。同時に軍隊を持っているとしても、国際法や国際機関の決定を順守すべきであると思っています。

モデレーター

つづいて、ベトナムの皆さんいかがでしょうか。

ベトナムチーム

どの国においても軍隊を維持するのは必要だと思っています。軍隊を維持することが戦争を起こすという意味ではなく、平和のために軍を維持するという考えもあるかと思います。私達の考えでは、平和は戦争がないということだけではなく、世界中で手を取り合って助け合うことも含まれていると思います。コロナウイルスなどの疫病が発生した際に各国が互いにワクチンを共有したり、ともに対策を考えたりするのは、その一例ではないでしょうか。

モデレーター

ありがとうございます。続いて広島チームお願いします。

広島チーム

軍事力を持つのか持たないのかという問いへの答えは出ていないのですが、もし、他国が軍備を持たないと決めた際に、日本も同じことができるかというと、相手を完全に信じられない部分があるなという話になりました。やはり、相手に対する情報が不足していたり、交流がないことで相手をよく知らないことが根本にはあるという話をしました。

モデレーター

ありがとうございます。非常に重要なポイントを挙げていただいたと思います。仲本さん最後にコメントお願いします。

アシスタントモデレーター

回答ありがとうございました。難しい話題ではあると思います。単純に考えると、仮想敵を想定して軍事演習を繰り返している中で、相手には「信用してます」と言うのは、相手に不信感を持たせてしまうのかなと思ってしまいます。しかし、簡単には手放すことはできない。さきほど、軍隊を減らすと回答したところは１つもなかったと思います。維持する、これ以上増やさないという回答が多かったと感じていますが、「維持する」という方向で一致できるのであれば、「減らす」という方向で一致できるかもしれないと思いました。

私たちは信頼しあう、理解しあうと言う傍らで、暴力的な軍隊を持っている一面もあります。皆さんは先ほど口揃えて軍隊は侵略するためにあるわけではなく自国を守るためであり、災害に対処するためであるということを言われていました。このような機会に、丁寧にそういったことを一つ一つ主張することも大事なのではないかと思いました。

モデレーター

皆さんには、国際情勢も絡む話題について考えていただきました。自分を守るために軍隊が必要だということですが、何故守る必要があるんでしょうか？「相手が攻めてきたらどうするんだ」ということだと思いますが、ナチスドイツ軍司令官だったゲーリングは、「国民を戦争に賛同させるには、一般民衆を戦争に巻き込むのは反対だが敵が攻めてきたらどうするんだと言えばいい」と言っています。

沖縄チームからは不信感、広島チームからは狂気という言葉が出ました。やはり人間は心のどこかに不安を抱えている。「現実見てみろよ」、「今の国際情勢ではしょうがないだろ」と、不安を抱えるのが当たり前だと思うかもしれません。軍隊は守るためにあるという意見でしたが、ウクライナ戦争においては、ロシアは正義があると思っているし、ウクライナも自分たちに正義があると思っています。やはり誰もが自己防衛をしているという言い方しかしていません。

非常に難しい国際情勢の中で、皆さんも現実的な対応を考えると思います。しかし人類はそれをずっと繰り返してきています。第 1 次世界大戦、第 2 次世界大戦、ベトナム戦争、朝鮮戦争、現在のウクライナ戦争でも自分たちのことを守っていると、繰り返してきたわけです。例えば、第 2 次世界大戦ではユダヤ人の虐殺が起き、原爆が落ち、南京虐殺があり、様々な人権侵害の後に生まれたのが世界人権宣言であり、国連憲章でした。皆さん読んでみてほしいのですが、夢物語のように見えます。

日本も沖縄も多くの犠牲を出して、そこから日本国憲法、そして第 9 条、そして前文ですよね。今、それらも非現実的だから変えようという動きがある。どれだけの絶望から生まれてきた反省だったのでしょうか。ベトナム戦争その後に作られたジョン・レノンのイマジン。「自分のことを夢見る人だと言うだろうけど、でもこの夢を見ているのは自分 1 人ではないんだぞ」と歌うわけです。アメリカのキング牧師も自分には夢があると言っています。「いつの日か、黒人も白人も一緒になってテーブルで食事をする日が来るのを夢見ている」と。

一人一人が夢見ているけれど、現実を見ると失望するのが今の地球社会だと思います。それでも、皆さんが集まっているこういう場を持つ 1 つの意味は、みんなで何かの夢を共有するということでもあります。明日、11 月 12 日のシンポジウムでは、その現実的な対応が求められるシビアな世の中に生きながら、我々はどんな夢を共有できるのかを考えてほしいと思っています。

3 成果報告会、閉会式

（1）成果報告会（シンポジウム）

シンポジウム：アジアの若者とつくるこれからの平和

日時：2022 年 11 月 12 日（日）　14：00 ～ 16：30　（13：30　開場）
場所：沖縄県教職員共済会館 八汐荘（屋良ホール）

次　　第

14：00　　開会
14：00 ～ 14：05　　主催者挨拶　沖縄県平和祈念資料館　館長　前川早由利

14：10 ～ 15：20　（70 分）　第 1 部　プレゼンテーション

長　　崎	（長崎の原爆投下と平和に向けて）
台　　湾	（2.28 事件と平和に向けて）
韓　　国	（済州島 4.3 事件と平和に向けて）
広　　島	（広島の原爆投下と平和に向けて）
ベ ト ナ ム	（ベトナム戦争と平和に向けて）
カ ン ボ ジ ア	（ポル・ポト政権の大虐殺と平和に向けて）
沖　　縄	（沖縄戦と平和に向けて）

（逐次通訳含めて各 10 分）

15：20 ～ 15：30　　休憩

15：30 ～ 16：20　（50 分）　第 2 部　パネルディスカッション

テ　ー　マ：「若者とアジアの平和を考える」
モデレーター：沖縄キリスト教学院大学　教授　新垣誠
パ ネ リ ス ト：各地域からの参加者

16：20 ～ 16：30　　閉会

第 1 部　プレゼンテーション

参加者はそれぞれの国、地域で起った紛争や事件の紹介と平和への思いを発表した。なお、シンポジウムでは時間の都合上、共同学習中に発表した内容を 10 分程度に短縮しての発表となった。
以下は発表内容を抜粋・省略して掲載。
※共同学習期間中の発表資料は 43 ページ以降を参照。

長崎チームによる発表（長崎の原爆投下と平和に向けて）

1945 年 8 月 9 日 11 時 2 分、1 発の原子爆弾がアメリカによって長崎に落とされました。激しい閃光とともに巨大な雲が発生し、街は一瞬で破壊されました。被爆当時の長崎市の人口は約 24 万人と推定されていますが、そのうちの約 3 分の 1 の方がお亡くなりになり、約 3 分の 1 の方が怪我をされました。私達は今回の研修を通して、長崎に原子爆弾が投下された 3 つの原因を考えました。1 つ目は日本が戦争に参加していたこと。2 つ目は長崎が兵器や軍艦を作っている軍事拠点であったこと。3 つ目は、世界で核競争が始まっていたことです。これらの原因から現在も残っている課題を考えたところ今も軍事拠点があること、現在の日本はまだ資源が少ないため自立できていないこと、海外にはいまだに核を保有している国があることが課題ではないかと考えました。

台湾チームによる発表（2.28 事件と平和に向けて）

1945 年、第二次世界大戦が終わり、日本は敗戦国となり、台湾は日本の植民地から中華民国の領土となりました。50 年の日本統治時代がついに終わり、台湾人たちは祖国（中華民国）からの接収を非常に楽しみにしていましたが、元々の想定と違い、中華民国の国民政府に接収された後、様々な問題が出てきました。（中略）私達は 2.28 事件から生まれた影響と問題は一通り解決したと思っており、理由としてはお互いに相手のこと、言語を学んだことがあげられます。台湾人はそのときから中国語を積極的に学んで、中国から来た人も台湾語を必死に勉強しました。お互いの理解を深めることによって、平和を作ることができたと思います。また認識の差をなくすこと、民主主義制度でリーダーを決めることが重要だと思っています。

韓国チームによる発表（済州島 4.3 事件と平和に向けて）

済州島 4.3 事件という残酷な出来事について、私達は平和的な方法でその解決に向け取り組んできました。真実を追求する過程で、被害者の名誉と権利を回復する道が見つかりました。真相究明の取り組みは、犠牲者を慰霊する空間や、補償金の支給にまで進展しました。済州島 4.3 事件の事例から学べることは、真実追求を特徴とする平和的解決を絶えず持続することだと言えます。今年度のこの共同学習の場を借りて、真実の持つ力は、記念と慰霊、未来と教育、交流と連帯、正義、そして平和を作り出すことができる可能性を持つというメッセージを皆さんと共に共有したいです。

広島チームによる発表（広島の原爆投下と平和に向けて）

広島に原子爆弾が投下されたのは、1945 年 8 月 6 日午前 8 時 15 分でした。当時広島市内にいた人はおよそ 35 万人でした。原子爆弾による死者数は 1945 年末までで、推定 14 万人± 1 万人といわれています。

原爆投下時に広島が選ばれた理由について、軍都であったこと、空襲を受けていない地域の中で比較的大きい街であったこと、平野部が多いという地形であったことが考えられます。また原爆が投下された原因に軍国主義があると思います。今の日本は軍国主義ではありませんが、見せたいものしか見せないという情報操作や、私達が無意識に選別している情報があるのではないでしょうか。このことに気づくことが重要だと思います。また、海外に行って日本を外から見る、国境を越えた市民レベルでの交流で自国の欠点を共有することが大切であると考えます。

ベトナムチームによる発表（ベトナム戦争と平和に向けて）

ベトナム戦争は 1955 年から 1975 年にかけて、約 20 年続きました。北ベトナムはホーチミンがリーダーであったベトナム民主共和国、南ベトナムはアメリカ軍の支援を受けたベトナム共和国でした。この戦争で約 400 万人が亡くなり、現在でも約 430 万人が戦争の後遺症で苦しんでいます。戦後、人々が悲劇から回復するには何年もかかります。いつ戦争が起きてもおかしくない今、1 人 1 人が国の独立と自由を守るために立ち上がる事が必要です。私たちは勉強をし、自分自身が国を守れるような市民になるよう努める必要があります。

カンボジアチームによる発表（ポル・ポト政権の大虐殺と平和に向けて）

クメール・ルージュはカンボジアの共産主義の政党で、1950 年から 1975 年に政権を得るまで活動を続けてきました。彼らは 1975 年 4 月 17 日にプノンペンを支配し、国民全員を強制的に地方に移動させました。その移動中、食糧不足や医療不足などによって国民の命が奪われ、行方不明となった人たちもいました。また、クメール・ルージュは多くの国民を拷問し虐殺しました。この研修をとおして、平和な社会を創るためには、イデオロギーにとらわれず、革命や軍事などの力を使わずに、国民たちが自分の表現を自由に認め、望ましい政治、望ましいリーダーを選び国を発展させることを目指すべきであると考えました。

沖縄チームによる発表（沖縄戦と平和に向けて）

私達は沖縄戦について、久米島での戦いを学習しました。久米島での戦いのキーワードとして挙げられるのが住民虐殺です。久米島では米軍の攻撃による死者よりも、日本軍による虐殺による死者の方が多かったのです。

虐殺された原因として挙げられるのがスパイ視です。スパイ視とは、日本軍の情報を米軍に漏らしたと住民が疑われることです。不審な振る舞いをしたなどとして多くの住民がスパイ視されました。スパイ視の根底にあるのは、日本軍の沖縄県民に対する強い不信感です。このような不信感が生まれるのは、お互いが歩み寄らず警戒している状態が続くからだと考えました。不信感を減らすためにも、互いの不安要素を減らすことが平和な社会の形成に繋がると考えました。

第 2 部　パネルディスカッション

> モデレーター（新垣誠）

皆さんこんにちは。1 週間にわたり本当にお疲れ様でした。様々な学びがあると同時に、皆さんの顔に疲れが見られているところから、かなり考え、そして悩み、そして心からいろんな痛みを感じた 1 週間だったのではないか思います。

国連のユネスコ憲章の前文に「戦争は人の心で起きるものである。であるがゆえに人は心に平和の砦を築かねばならない」という部分があります。今回ここに集っている学生の皆さんは、各地域を代表してという形にはなっていますが、外交官でもなければ政治家でもないわけですので、今回は「人」として、若い皆さんのその感覚でいかに心の中に平和を築いていくのか、皆さんからいろいろお伺いしたいと思います。最後に沖縄チームから出た「不信感」という言葉ですね、これ非常に大きなキーワードになるのかなと思います。

沖縄チームの皆さん、その不信感を取り除くためには、具体的にはどういう活動が必要だと思いますか？

> 沖縄チーム

不信感を払拭するために「核」を不安要素に例えて考えてみると、相手に負けないように核をどんどん増やしていくのは、どちらも拡大するだけ拡大していってゴールが見えないものだと思います。互いに核を縮小していくことが不安要素を取り除くゴールとなるので、「核軍縮」が具体的な方法になると思います。

> モデレーター

「核軍縮」については長崎、広島のチームからも出ましたね。実際にはもちろん核を減らしていくことは大事ですが、不信感が根底にあったらどうやって自分から進んで核を減らしていけるのでしょうか。広島チームの皆さんどう考えますか？

> 広島チーム

不信感の原因には情報不足が考えられると思うので、国交を通して国同士の関わり合いや市民レベルでの国境を越えた交流を通じ、まずは相手を知っていく、自分のことも知ってもらうという取り組みが大切ではないかと考えます。

> モデレーター

人と人との交流ということですね。おそらく安全というのは、金を出せば買えるんですよね。軍事費をつぎ込んでミサイルを買ったり、様々な戦争の準備をするための武器を買えばある意味、「安全」は買えると思います。

でも、先ほど沖縄チームからあったように、核の競争というのはどれだけ持てば「安心」できるのかということですね。

> モデレーター

世界の核兵器は地球を 50 回ほど滅ぼせるだけの破壊力あると言われています。どうしてここまで核が必要なのでしょうか。やはり安心でいたいと考えていると思います。心から安心するためには、やはりいくら武器を増強しても得られない、本当に安心するには、人と人との間の信頼関係ができてないといけないということかもしれませんね。

お金持ちの人が、壁を高くして有刺鉄線を張り、門前にはガードをつけたりしますが、やはり不安なんですよね。どこか、自分が攻められるのではという不安があり、それは他の人々との信頼関係がないからではないかなと思ったりもします。

> モデレーター

「平和への思い」事業は、私も何年か関わらせていただいていますが、今回は非常にユニークといいますか、長崎チームの中に中国からの留学生の張（チョウ）さんが参加されています。とても流暢な日本語で発表されていたので、会場の皆さん気付かなかったかもしれませんが、張さんは日本で学ばれ滞在は 5 年目になります。張さんにお伺いします。

日本に住んでいて、中国の人々の気持ちが日本人に伝わるような報道が日本でされていると思いますか？何か意識のギャップを感じますか？

> 長崎チーム（張さん）

はい、ちゃんとした情報が入ってきていないと感

じます。

> モデレーター

なるほど。やはりそこには皆さんが言っている「情報不足」があるんですね。張さんは日本にいて「なんかこれ違うぞ。」と感じるようなこともありますか？

> 長崎チーム（張さん）

はい。特に戦争に対して日本側は主に被害者と主張していて、そのような教育がされてきているのではないかと思っています。中国側では全く違う感じです。特に核兵器についての話は違います。中国では核兵器を造った研究者に感謝するという教育がされていると思います。

国によって戦争や核兵器に対してすごく違う考えを持っていると思います。それは、教育によって考えが違ってきているのだと思います。

ですから、お互い理解し、歴史や文化についてきちんと情報を手に入れ、平和について考えることが必要だと思います。

> モデレーター

そうですよね。何年か前に BTS（韓国の人気グループ）のジミンさんが原爆のきのこ雲がデザインされた T シャツを着て、日本からすごい反発を食らい、日本のテレビ出演やライブ活動が軒並みキャンセルになったという事件がありましたけども、やはりその辺の歴史認識の違いがありますね。

今回、張さんは、さまざまな考えがある中で長崎チームの一員として参加されてどのように理解していいのかとても悩み苦しまれたと思います。

ある意味、長崎チームでラッキーだと思います。こういう多様な意見を聞くことができて、またそれを本当に現実として将来に繋げていくような議論ができるようなチャンスがあったかと思います。張さんありがとうございます。

もう 1 人、実は 2 年前のこの事業で韓国チームの一員として参加されたユンアさんが沖縄にいまして、韓国チームとして参加されています。ユンアさんは 2 年前の事業をきっかけにその後琉球大学に留学されているのですね。

ユンアさん、先ほど張さんにもお聞きしましたが、日本で行われている韓国に関する報道に違和感を覚えますか？

> 韓国チーム（ユンアさん）

ありますが、具体的には思い出せません。

> モデレーター

では、韓国チーム全員に聞いてみましょう。

先ほど韓国のチームの皆さんから様々な良い提案がされました。お互いの課題を共同で解決できるような取り組みをするべきじゃないか、また、平和へのプロセスとしてお互いに理解し合うことが必要じゃないのかという話がありました。済州の皆さんは済州島 4.3 事件があり、韓国内でもちょっと特別なポジションにいるのかなと思います。

ウクライナでの戦争があり、世界中で軍事費が軒並み上がっていく中で、やはり日本の国会の中でも日本も軍事増強するべきだとか、憲法を変えて自衛隊を軍隊として明記するべきだとか、さらには核を共有すべきなど、そういう意見までも出てきています。

先ほど、張さんからもありましたように、国内で教育を受けてくる中で、韓国チームの皆さんは日本のこういう動きをどう感じますか？

> 韓国チーム

いろいろ理由があると思いますが、やはり軍事・安保をめぐる競争が激しくなるというのは、とりあえず不安、危険であるという基本的な認識は共有しています。

> モデレーター

ありがとうございます。長崎チームから軍事をなくすということは困難であるという話がありました。しかしながら軍事を増やしていくという行為が逆に不安を生み、そして不信感を生んでいくという現象を皆さんが感じていることと思います。

そのような中で、皆さんには何ができるのか、まずは日本側から聞いてみたいと思いますがいかがでしょう。

おそらく張さんが思っていることや、また済州島の韓国のチームが思っていることなどは、日本の過去の歴史から考えてやはりかなり緊張感があるという感じがします。

＞沖縄チーム

不安感とか不信感を払拭していくために、僕らができることは何かというご質問ですが、私達が先ほどの久米島の戦争の原因、教訓のところで述べた通り、不安とか不信感っていうのは際限なくどんどん大きくなっていくものだと思います。それを減らすためには今回の事業に参加して思ったことですが、この事業を通じて、僕の心の中には平和の種がまかれたと思いました。

僕はリアルで会ったことがない台湾、韓国、ベトナム、カンボジアの人たちの話を聞いて、心の中に彼らの生活とか考えとか意見が根付いたと思います。例えば日本の報道では、中国の脅威とか、韓国が脅威とか、そういう大きな言葉が使われて、僕らは不安を煽られています。

今、僕の心の中には韓国の人の顔がすぐに浮かんだり、中国の人の顔が浮かんだりベトナム、台湾の人の顔が浮かぶので、何かそういう大きな言葉を使い不安を煽るような報道があったときに、「いやちょっと待てよ」と思います。

あの人が生活している国では本当にそんなことするのかなと疑うことができると思います。それがなぜできるようになったかと言われれば、やはり僕が全く知らなかった各国の歴史を、そこで生活している人から聞くことができたからです。やはりこういう形できちんと同じ立場で交流をすることを通じて、各国の歴史や考えを知ることが必要なのではないかと僕自身は思いました。

先ほど阿嘉君が言っていた、核兵器の話も同じだと思っていて、左手に核兵器とか銃を持って、右手で仲良くしましょうと言って手を差し伸べても、「いやいやちょっと待てよ」となると思います。

そういうことがあるときに、どんどん核兵器や軍事を増やしていくのではなくて、やっぱり減らす方向性で一致をしていくことが重要です。核兵器や軍事を保持していることで不安感をみんながもっと増やしていくのであれば、それを減らしていく方向でみんなの安心を増やしていく、それと同時に国際交流を通じて、それぞれの一人一人の心の中に、それぞれの国の歴史であったり考えであったり人の顔が根付くようにしていくことが必要なんじゃないかなと僕自身は考えました。

＞モデレーター

ありがとうございます。ほぼ全てこの最後のセッションをまとめてしまった形になってしまいましたね。素晴らしい意見だと思います。

広島の皆さんからお伺いしてもいいですか？　広島の皆さんは戦時下の日本においては狂気が満ちていて、その原因が情報不足ということでした。それと同時に他国の立場というものがわからなかったことも情報不足にもよると思います。

一方的な報道ばかりを信じてしまう危険性と、この狂気に二度と陥らないためにはどういうことができる思いますか？

特にここに集っているアジアの仲間たちとどういう行動が出来るでしょうか。

＞広島チーム

本当にそれが正しいのか、それはどこからの情報でどこがそういうふうに考えているのか、など、自分から情報を掴みに行くことがとても大切だと思います。

例えば今回こうやって海外の方と交流することで、その他の国から日本がどう見えてるのかや、相互に情報交換したり、交流してみたり、今はインターネットで海外の新聞なども読める環境なので、そういうものを使って海外にアクセスしてみることができると思います。

＞モデレーター

ありがとうございます。メディアは様々な力が働いて報道がされているところがあると思いますので、いわゆる仲間や、ここで繋がった友達の話を聞いてみるとか、そういうところから情報を得るのも一つ手かなと思いますね。

＞長崎チーム

長崎チームも沖縄チームの安井さんと同じ意見で

す。例えば左手で核を持って右手を差し伸べるのではなくて、まずは左手の核を自分たちが捨てて態度で示して右手を差し伸べると、より不信感をなくし友好的に交流ができるのかなと考えました。

あとは様々な国と同じ立場で交流しその他の地域のことをより理解していくことで、不信感は払拭できるのかなと思います。

＞モデレーター

ありがとうございます。カンボジアの皆さんはいかがでしょうか。

先ほどの皆さんの報告の中で、やはり政治家を選ぶ上でちゃんと考えて選挙に参加し、自分たちが責任を持って国の政治を民主的にコントロールしていくべきだという話がありました。

カンボジアを含めて東南アジアには第二次世界大戦中に日本に占領された経験もあるところがたくさんあります。

カンボジアの皆さんは日本の若者に期待することがありますか？　日本の政治を変えていく上で、こういうふうに行動してほしいなというリクエストはありますか？

＞カンボジアチーム

確かにそうですね。カンボジアも日本の植民地だったこともありますが、その後は現在に至るまでカンボジアが復興するために日本がいろいろ援助しており、カンボジアでもそのことはよく理解されています。

日本で報道して欲しいのは、カンボジアの歴史と真実です。それからカンボジアと日本との友好関係も報道してほしいです。これからも日本と友好な関係を築いて、お互いに頑張って平和な社会に向けていろいろなことができたらいいなと思っています。

＞モデレーター

ありがとうございます。それではこの機会を生かして今回ここで知り合った沖縄、長崎、広島のお友達とこれからも仲良くしていただければと思います。

＞モデレーター

それではベトナムチームの皆さんに話を移したいと思います。ベトナムチームの皆さんには過酷なベトナム戦争の歴史を報告してもらいました。そこで自分が非常に印象に残ったのが皆さんがおっしゃった心の傷という表現です。

本当にそうだなと思っています。沖縄戦が終わってから 77 年経ちますが、今でも沖縄では慰霊の日に沖縄県民が慰霊碑のところで涙を流しています。それを考えるとベトナムの皆さんの心の傷、そして今まさに世界では戦争が行われているわけですが、この先何年間この人たちの心の傷が残っていくのかと考えると非常に苦しい思いがします。

ベトナムは日本に占領された歴史があり、またベトナム戦争のときはアメリカ軍の一部として韓国の兵士がベトナム戦争に送られました。

最近の韓国ドラマの中に描かれているベトナム戦争の描写が真実とは違うということで、ベトナムで放送停止になるということがありました。

この戦争において、ベトナムの人々だけでなく、アメリカ軍、そしてアメリカ軍と同時に来た韓国軍もベトナム戦争に参加しました。韓国の人からすると戦いたくもないのに、意味も分からずベトナムに送られベトナムの人たちを犠牲にしてしまったという心の傷を負っている韓国の人たちもいたと思います。

それで韓国の皆さんがその連帯の中でお互いに慰霊をするという話をしていました。ともに弔い悔やみ、戦争の犠牲に心を痛めつつそれに対してお互いに慰霊をするということです。

済州の皆さんとベトナムの皆さん、お互いにその戦争で負った心の傷をお互いで供養してみるという可能性はありますか？

＞韓国チーム

まだ、韓国軍がベトナムでどのような行動を起こしたのかがはっきりとは究明されていない状況です。そのような状況で慰霊という言葉を口に出すことは、ベトナムの人々を冒涜すること、またそこから新たな心の傷を生み出すことに繋がると思います。

> モデレーター

ありがとうございます。よく考えられた思慮深い意見でした。ベトナムチームの皆さんはどのように受け止められましたか？

> ベトナムチーム

当時は韓国人だけでなく、フィリピン人やタイ人の兵隊もいましたが、彼らは全てアメリカ軍であり特にその他の外国人という認識はありません。ですから何も恨みはなく深く考えていません。

> モデレーター

ありがとうございます。またベトナムチームからは優しい言葉が返ってきました。済州（韓国）チームの皆さんが、真実を追求していくことが平和を実現するプロセスであり、そのために連帯というものが重要であるということお話をされていました。ベトナム戦争で何が行われたのかについて今後皆さんが追求していくことになるのかと思います。

その中で新たな連帯の可能性を見出していただいて、お互いに不幸な戦争の犠牲になった人々の慰霊をしていただければなと思います。

> モデレーター

それでは台湾チームの皆さん聞いてみたいと思います。台湾チームの皆さんは、2.28 事件は、対立する当時の人々の意識のギャップ、言語の違いがあったとおっしゃっていました。しかし現在はそのような問題は解決されつつあるとのことでした。

非常に難しい問題を提起させてもらいますが、今、様々な対立がある中国とその意識の差を埋める方法はあると思いますか？

> 台湾チーム

私達は、台湾は移民社会としての文化交流と友好がとても大事だと思っています。中国大陸とは、文化上の交流活動、相互の学び合い、そして互いに尊重することでもっといい関係を築きたいと思っています。

> モデレーター

とても答えづらい難しい質問に答えていただき本当にありがとうございます。2.28 事件のこともそうですし、張さんはいろいろ思うこともあると思いますが、ぜひ張さんとも仲良くなっていただいて、ぜひお互いにここで中国と台湾の架け橋を作っていただきたいと思います。

同時に韓国と日本も今様々な摩擦が生じているわけですが、今回できた友達と様々な交流を築いていってほしいと思います。

> モデレーター

一番初めに戻ると、沖縄チームから出た「不信感」というものがあり、私達はこの不信感と不安というものを抱えて、どこまでも軍備を増強し、どこまでもお互いに偏見を持ったり差別したり、お互いのことを嫌ったりだとか、人間の歴史が始まって以来それが全然改善されないままのような気がします。

これが続く限りおそらく私達の世界には平和は訪れないのかなと思われます。皆さんは一週間この「平和」という大きな言葉に一生懸命取り組んでこられ頭が下がります。

この大きな問題を私達一人一人の心の問題として捉え、不信感に自分たちがとらわれてしまう前に、今回できたアジアの仲間たちと安心できる信頼関係をここから築き、交流を通して情報交換をし、多様な考えに触れ、お互いの考えを受け入れ、暴力による解決ではなく話し合っていきたいですね。この先皆さんがアジアの平和を築いていく。その一員になってほしいなと心から願って、このセッションを終わりたいと思います。皆さん 7 日間お疲れ様でした。

（2）閉会式

閉会挨拶　沖縄県平和祈念資料館
館長　前川早由利

皆さん、大変お疲れ様でした。６日間の共同学習はいかがだったでしょうか。

当資料館や各戦跡を巡り、沖縄戦に関する知識だけでなく世界で起こった悲しい歴史についても同時に学ぶことができ、中身の濃い充実した６日間だったかと思います。

戦争や紛争の被害だけでなくその後の復興の歴史など継承すべきことは多く、それぞれの国や地域においてその継承方法は様々です。今回皆さんがアジア地域の学生と海外にも目を向けともに学ぶことで、視野が大きく広がったことと思います。

「平和」は願うだけでは実現できません。「平和への思い」を寄せる全ての人々のたゆまない努力が必要です。

皆さんが将来、それぞれの国や地域において、社会を牽引していくリーダーとして多くの身近な人々とつながり、国や地域を越えて「平和の架け橋」としてご活躍することを心から願っております。

最後に、事前学習から共同学習等の実施に多大な御協力を頂いた各地域の指導者の方々に心からお礼申し上げます。また、今年度本事業を受託頂いたOPACの皆様、オンライン共同学習のサポートを頂いた技術者の皆様、参加者向けに多様なプログラムを提供して頂いた各施設・団体の皆様方へ深く感謝申し上げます。

みなさま本当にお疲れ様でした。そしてありがとうございました。コロナが落ち着いたら、また沖縄にいらして下さい。

各地域からの感想発表

○長崎チーム

事業を通して、先入観を捨てて友好的な国際交流をしていきたいなと思いました。各地域で、教育方法、文化、考え方は異なると思いますが、共通点を探して互いに理解しあい、歩み寄ることが大事だと思いました。特に印象に残っていることは、世界共通の議題である、軍隊や核の問題についてディスカッションを行ったことです。１人で考えても得られない視点を多く得られたと思います。身近な議題については、今後の平和学習について話し合うことができてよかったです。海外の皆さんとは対面でお会いできませんでしたが、今後も交流を続けたいです。

○台湾チーム

事業を通して、各地域の事件や歴史を学ぶことができました。台湾は今も平和について考えなければならない状況にあります。また、各地域のプレゼンにも感動しました。来年は皆さんと沖縄で再会したいです。

○韓国チーム

お互いを知り、過去と向き合い未来を模索する時間となりました。済州島 4.3 事件の教訓と負の遺産について深く考察し、どのように平和につながっていくのか考えられるようになりました。これまでは各地域の戦争、事件を勉強するにはメディアを通して間接的に学ぶことしかできませんでしたが、各地域の戦争、事件を直接肌で感じている学生たちから歴史を学び、私 1 人だけでは考えられなかった意見や見解を聞き、予想できなかった質問に対して受け答えをすることで、考えや見方を広げることができました。

○広島チーム

事業を通して、他地域の悲惨な経験を知らない状態は良くないと思いました。それぞれの経験から、共通する考えを模索したり、また他地域の歴史を知ることで自分の地域に還元できることや自分の地域について新たな視点を持てるようになりました。なので、自分の地域の歴史だけを学ぶのではなくて、繋がりを持って他地域の歴史や考えを学ぶことが重要だと思いました。今後は今回の参加者が中心となり、繋がりを持った学びを発信していきたいです。

○ベトナムチーム

事業を通して自国の歴史だけでなく、他国の歴史に関して学ぶことができました。国や地域によって歴史に対する考え方が異なることを理解し、沢山の学びがありました。本当に参加してよかったです。

○カンボジアチーム

今回のようなプログラムに参加させて頂きありがとうございます。沢山の学びがあり、他地域に比べるとカンボジアの継承はまだまだこれからなので知識や経験を次世代に伝えていくように頑張っていきたいです。このような事業がずっと続くように祈っています。

○沖縄チーム

パネルディスカッションなどを通して、様々な体験をさせていただきました。若い世代のみならず、多くの人へ届くように発信していき、平和の尊さを継承していきたいなと思います。

最後に、主催の沖縄県、主管の沖縄県平和祈念資料館の皆様、貴重な経験をさせて頂きありがとうございました。

成果報告会 / 来場者アンケート結果

開催日時	2022 年 11 月 12 日（土） 14：00 ～ 16：30
開催場所	沖縄県教職員共済会館 八汐荘（屋良ホール）
来場者	15 名 （アンケート回答者 14 名）
オンライン配信視聴者	20 名

集計結果

◆年齢別構成

10 代	20 代	30 代	40 代	50 代	60 代	80 代
1 名	6 名	2 名	1 名	2 名	1 名	1 名

◆来場者感想

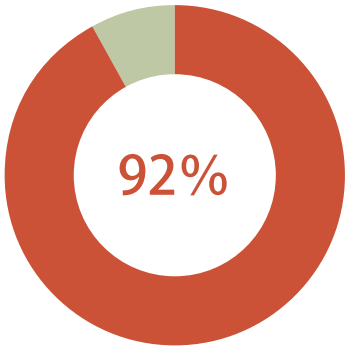
- LIVE で色々な国からの視点や意見を聞けたのが面白かったです。
- 非常にまとまった内容でそれぞれのチームは素晴らしかったと思います。しかし、第 2 部ではそれぞれのチーム（国）の事情、背景に特化した内容になっていて、“若者とアジアの平和を考える”から離れしまったように感じることがありました。
- 自分の置かれている所だけの情報で判断するのでなく、外からの情報をしっかり知ることが大事だと思いました。（異文化交流、海外メディアらの情報収集）
- 平和とは本当の意味での相互理解だと思いました。まずは個々のレベルから理解を広げ、やがて国単位でやって行けば世界平和も夢でないと思いました。
- これからを担う各国、地域の大学生が、それぞれの他の悲惨な出来事を共有している姿を見て、世界での恒久平和のため、次世代のネットワークが構築されてきているなと感じました。
- 自分の足を使ってまで自決をしなければいけない時代があったことや久米島のスパイ視は知らなかったので非常に有益でした。
- 「不信感」についてや、異なる記憶を知るこの重要性を知りました。
- それぞれの国や地域の平和への思いを聞けて良かったです。また、軍事はお互いが話し合って減らしていくべきだと思いました。平和への思いを世の中の人たちへ発信していこうと思います。
- 7 か国、地域の人々、参加者による発表、モデレーターによる相互交流があり見ごたえがありました。ベトナム戦争に参加していた韓国軍に関するやり取り、原爆を巡る認識の差異を知ることができたのは印象に残りました。
- 例えばベトナム戦争に沖縄・日本がどのようにかかわっていたかなど、それぞれの報告者の発表と自国、地域の関係について学ぶということがあってもいいと思いました。
- 若い人たちが対話する機会を設け、つながり始めようとしていく姿が見られたことはとても良かったです。あえて言えば、各報告や第 2 部のディスカッションでテーマやキーワードなどがもっとはっきりすると、より深い対話になりそうな気がしました。「平和への思い」事業も回を重ねているので、そうした深め方のアイディアを沖縄県がもっと取り入れていくチャレンジを期待しています。
- この事業に対しては、関わった若い人が事業後も継続して平和に関わる活動をしていけるような仕組みづくりや、これまで長年にわたり戦争や平和に関わる発信活動をしてきた上の世代との協働の取り組みをすることを期待しています。
- 「不信感」が平和を崩す根幹という発想が若い世代から出たことがまさに平和構築の始まりだと感じ、未来への”光“をみたシンポジウムでした。
- 数ある沖縄県の事業のなかでも、今後も継続してほしいと強く願っています。
- 各国のチーム共に、今後どうしていきたいか、何がなされるべきかなど、未来のことに結びつけて過去の事件・戦争・紛争について紹介していたのがとても良かったです。
- パネルディスカッションのセッションで、日本チームがメインとなっていたので他の国のチームの意見や考えをもっと聞きたかったです。
- 台湾チームの「相手の言葉を学び、お互い理解することで 2.28 事件が解決している」という言葉が印象に残りました。
- 沖縄チームの「沖縄は差別されている」という言葉は、広島、長崎チームへの配慮が足りないと感じました。立場が変われば誰でも被害者にも加害者にもなり得ることを学んでいただきたいと思います。
- 現在ウクライナとロシアの戦争が続いている中、このような若者たちの戦争に対する交流が開催されることは大変良いことです。日本の若者たちが戦争について語る機会が少なくなって、右傾化していることが心配です。世界のあちらこちらで戦争が起る、戦争を起こすのは誰かなどのディスカッションの場が多くなることを祈念しています。

第３部
事業評価

1 アンケート結果

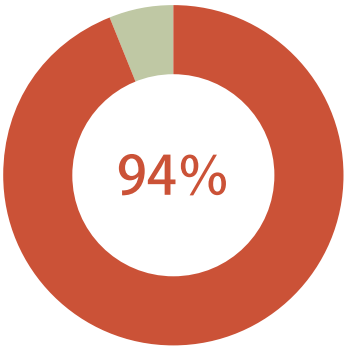
本事業の全体的な満足度

「満足」「とても満足」と回答した参加者



平和構築に関する意識

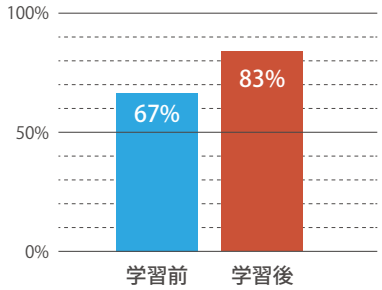
「高まった」「非常に高まった」と回答した参加者



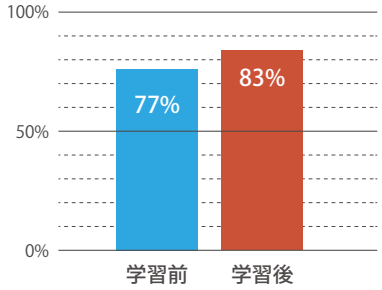
興味・関心度の変化

「（関心が）ある」「とてもある」と回答した参加者

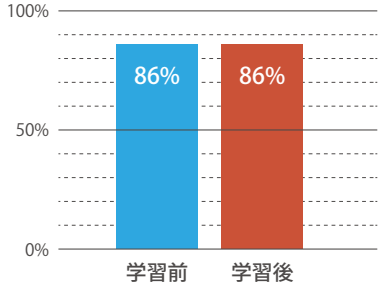
歴史から得られる教訓



地域を超えた相互理解

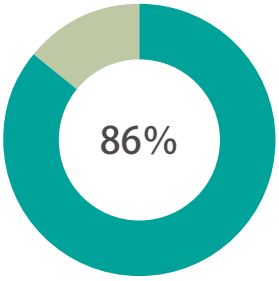


戦争体験等の発信・継承

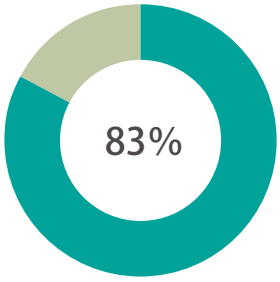


事業内容に関する評価

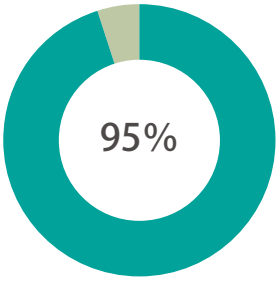
沖縄戦および他国の歴史に関する総合的な理解度



海外・県外の学生との交流に関する満足度



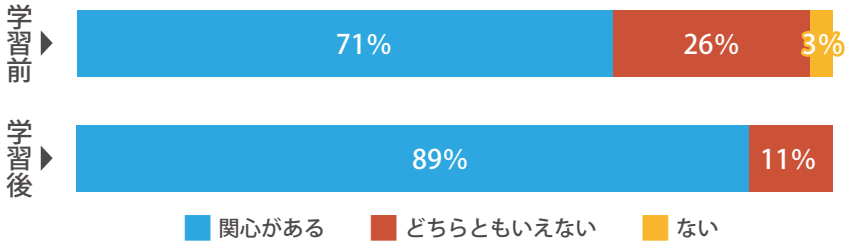
本事業と自身の専門分野との関連度



参加者の興味・関心の変化と理解度

[広島県における原爆投下]

興味・関心度

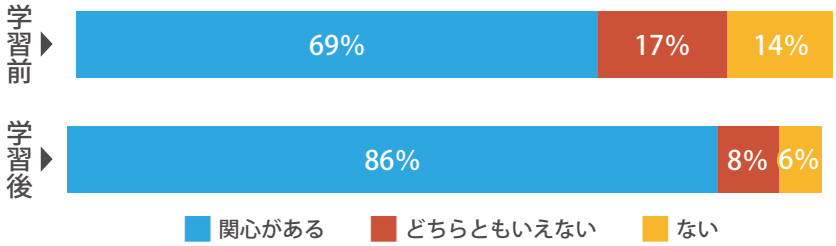


理解度

「理解できた」
「とてもよく理解できた」
の回答

[台湾 2.28 事件]

興味・関心度

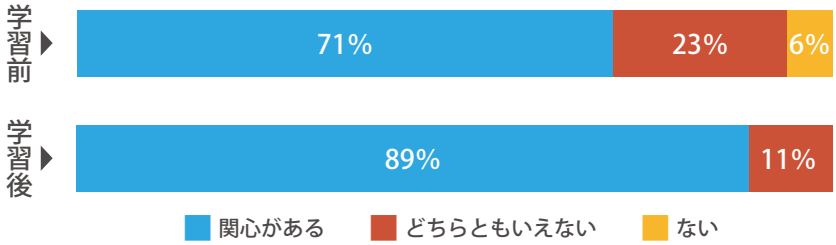


理解度

「理解できた」
「とてもよく理解できた」
の回答

[ベトナム戦争]

興味・関心度

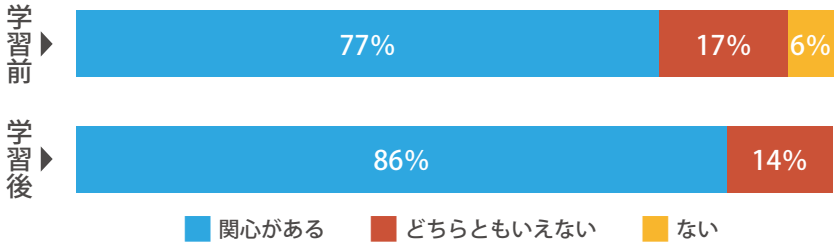


理解度

「理解できた」
「とてもよく理解できた」
の回答

[長崎県における原爆投下]

興味・関心度



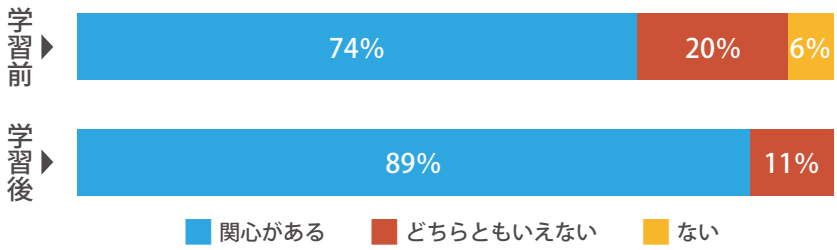
理解度

「理解できた」
「とてもよく理解できた」
の回答

参加者の興味・関心の変化と理解度

［ 済州島 4.3 事件 ］

興味・関心度

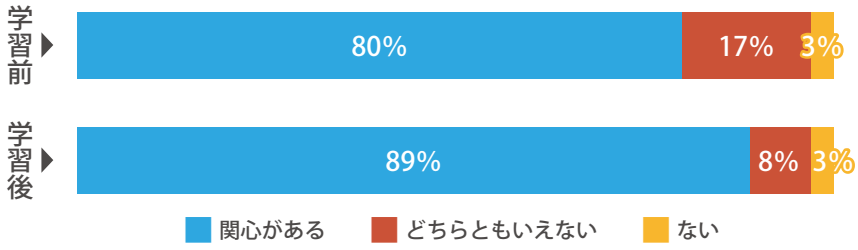


理解度

「理解できた」
「とてもよく理解できた」
の回答

［ カンボジア大虐殺（ポル・ポト政権下の大虐殺）］

興味・関心度

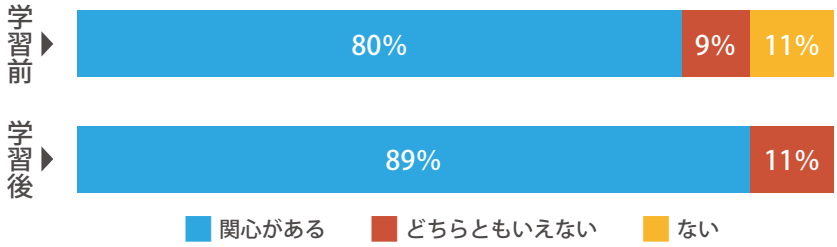


理解度

「理解できた」
「とてもよく理解できた」
の回答

［ 沖縄戦 ］

興味・関心度



理解度

「理解できた」
「とてもよく理解できた」
の回答

本事業でどのようなことについて学べましたか。（自由記述）

各地域での歴史に関して、新しく得られた知識がたくさんあった。(カンボジア）

どの国も戦争の傷はまだのこっている（ベトナム）

平和と相互認識がとても大事（台湾）

台湾の 2.28 事件や韓国済州島の 4.3 事件は全く知りませんでした。ポルポト政権の大虐殺やベトナム戦争については、名前は知っていたものの、具体的な詳細については知りませんでした。そしてそれらがまだまだ直近の出来事であり、現代的な課題としていまなお残っていることを知りました。一方で、日本では「何十年前の出来事」にしてしまいつつある、広島、長崎、沖縄での出来事があり、それらを継承することが非常に大切だと感じています。（沖縄）

私は長崎出身なので長崎や広島の原爆のことしか知らなかったですが、沖縄戦について学びながらフィールドワークに参加したことでとても関心を持ちました。実際にガマや米軍基地のすぐ近くに行くことで、過去のことも現在のこともどのような課題があるのかを目で見て学ぶことが出来ました。（長崎）

いちばんはまだ日本は戦後ではないということです。沖縄に行くと広島を含め本土にいるよりもまだ戦争の爪痕が市民に大きな影響を及ぼしていて、解決すべき課題がたくさんあるように感じました。（広島）

自分が知らなかった各地域の事件や、それについてどんな社会的問題があるかが、新しくわかった。他国の人が思っている各地域の事件や平和の意味について意見を聞ける機会ができた。（韓国）

本事業を通して、あなたは平和のためにどんなことができると思いますか。（自由記述）

今後、ニュースや新聞で今回のシンポジウムに参加した国と都市のことを見かけたら、少し注意深く見ることになるだろう。 政治的変化と危機の中でも東アジアの平和が維持される方法は何か、考えてみたい。（韓国）

広島だけでなく、日本や世界の負の遺産を学び、平和とはなにか、誰を平和にしたいのかと考え、そこに対して自分に何ができるのかを検討すること、話すことを続けることが大切だと思いました。（広島）

この事業での出会い、繋がりをこれからの私の平和活動にも活かせたら良いなと思っています。長崎だけでなく、広島、沖縄、海外の人と協同で活動することでより大きな波を作ることができると考えています。（長崎）

私が平和のためにできることとして、戦争や平和について、自ら体感で学び取ったことを、どんなツールでもいい。（SNS でも対話形式でも）発信し、呼びかける事がとても大切ではないかと思う。その発信をし続ける事で、誰かの目に留まり、その人が戦争や平和について学び直してみようとするきっかけ作りができれば、発信は大きな意味を持つと思う。（沖縄）

このプロジェクトに参加して得られた経験を私のコミュニティや、国の若い世代に伝えていければと考えている。（カンボジア）

このようなプロジェクトにもっと参加し、戦争の害や平和の意味について広めていかなければならないと思います。（ベトナム）

私が学んだ歴史的な出来事を伝えることで、他の人にも平和の大切さを伝え、このプロジェクトに参加するよう働きかけていきたいと思います。（台湾）

本事業への全体的な感想、フィードバック（自由記述）

学びあり遊びありのとても充実した１週間でした。私の場合は事前の自習不足もあるのですが、他国の出来事を当日理解するのに精一杯で意見がなかなか言えませんでした。なので、事前学習では他国の出来事についても端的に理解する時間を作ってもいいなと思いました。（沖縄）

今回の参加を通して、日本、特に沖縄にはまだまだ課題がたくさん残っていることを身に染みて感じることができました。資料館などは個人的な旅行でも行けますが、ガマはなかなか行く機会がないし、そのガマについての話はめったに聞くことが出来ないと思うので、もっといろいろなところを見てみたかったです！（広島）

全体として優れたプロジェクトであり、参加する価値があったと思います。（台湾）

今回この事業に参加して、本当に多くのことを体験し、考え、学ぶことができました。多くの県外の方と交流して平和活動というものを超えて深く交流できたことが最も印象に残っています。参加者同士でもう少し自由に活動する時間があればさらに沖縄を感じることができたかなと思います。しかし、今回観光はあまりできなかったからこそまた沖縄を訪ねたいという気持ちにもなりました。本当に多くの貴重な経験をさせていただき感謝しています。１週間お世話になりました。（長崎）

今回のプロジェクトを通じて今回の参加地域についてもっと関心を持つようになりました。（韓国）

私の考えとしては、このプロジェクトは対面でミーティングをするべきだと思います。ありがとうございました！（カンボジア）

各地域別に発表があるが、途中途中に東アジア的脈絡と共通点が分かる発表が提供されると良い。（韓国）

コロナウイルスのせいで直接で会うことができない国・人々と会えるようになって嬉しかった。インターネットのネットワークはすごいと思った。（韓国）

自由討論は、とても面白かったです。問いと参加者自身のアウトプットの共有は、これまでの５日間がそれなりにつまったもので、良かったと思います。問いについては、参加者から募ったのは大正解だとは思いますが、せっかくなので「沖縄を通して考えたこと」や「ここまでの参加で疑問に思ったこと」も別途解消できる時間が設けられるといいと感じました。きっとこれはわたるさんのアイデアだと思います。ありがとうございました！新垣先生のディスカッションは非常に考えさせられるものがありました。哲学的に考えられるところもあり、個人的にはたくさん頭を動かせて、面白かったです。この日がそのままシンポジウム当日でもよかっただろうに、と個人的には感じました。（沖縄）

来年は沖縄に行けるように、みんなと一緒に勉強したいです。（台湾）

このプロジェクトは私たちのチームにとって大変良いものになりました。（カンボジア）

昨年の参加者は教科書のようなものを作ったと聞きました。今年はディスカッションで、情報の偏りや乏しさについて意見が出たと思うので、それを共有できたメンバーで、教科書や指導案などを作ってみたかったなと思います。広島ではよく、平和のシンポジウムや学習会が開催されており、世代問わず多くの人が関心を持って参加しています。そのため、そのような場で今回学んだことや、他地域の戦争について話す機会があればいいなと思います。１週間、貴重な学びと経験、出会いをありがとうございました。自分がまだまだ無知であることを知り、もっと学ばなければならないと思える１週間でした。（広島）

学生たちと意見を交換する時間やディスカッションする時間がもっとあればいいと思います。（韓国）

このプロジェクトはとてもプロフェッショナルで、私に感動を与えてくれました。（ベトナム）

2 総括評価

参加者による評価は、いずれの設問も高い値を示しており、事業全体としては、当初の目的を達成したと考えている。以下では、1 日目の開会式と特別講義及び過去参加者との交流会、2 日目から 5 日目までに行われた各地域の発表、日本人参加者を対象に行われた沖縄県内の視察と 5 日目前半の日本人参加者によるディスカッション及び後半で実施された全体ディスカッション、6 日目の成果報告会についてそれぞれ評価を述べたい。

開会式では昨年度同様、参加者間で質問を投げ合うアイスブレイクが実施されており、場を和らげるとともに交流を促進する工夫がされていた。特別講義「沖縄戦と戦後沖縄について」では、沖縄戦以前の琉球王朝時代から、本県が東アジア・東南アジアとの交易を通して参加地域との関わりがあったことにも触れるだけでなく、沖縄戦の経緯と併せて、伊江島における戦闘と戦後の歩みについて紹介し、沖縄戦と戦後の土地闘争、島ぐるみ闘争から日本復帰までのつながりが理解できるよう配慮されており、復帰 50 年の節目を意識した講義で、導入としてはとても良い内容であった。

また、今年度新たな試みとして、2019 年から 2021 年までに本事業に参加した 14 名の学生と、今年の参加者によるオンライン交流会を実施した。過去に本事業に参加したことで、日本または海外へ留学をするきっかけに繋がった者や、事業への参加を通して得た経験を生かした就職に繋がった者、改めて平和に関する学びを始めた者など、参加した学生の人生に多少なりともその経験が影響していることを伺い知れた。交流会に参加してくれた学生に感謝すると共に、今後は参加学生同士が主体となったネットワークを広げて行くことに期待したい。

一方で、今年度の参加者にとっては事業初日のプログラムで、議論や交流をする前の交流会であったこと、時間制約のためオンライン参加者からの声を一方的に聞く形態になってしまったことなどが見受けられた。共同学習全体におけるタイミングや実施方法に改善の余地があると感じた。

2 日目から 5 日目（3 日目を除く）にかけて行われた各地域の発表は、学習テーマの歴史的背景を深く掘り下げたもの、その後の取り組みや影響について考察したもの、継承に関わる課題や提言を行うものなど、各地域の創意工夫が見られた。事前研修中に文献や資料館で学習したり、実際にフィールドワークを行い現地で学んだ事を発表し、参加学生の学ぶ意欲が感じられた。各地域の理解度に関してはいずれも 9 割近くに達しており、特に問題とすべき点はないだろう。運営面に関しては、通訳が必要な参加チームには発表原稿を事前に配布するなどの工夫がなされ、スムーズな実施・運営がされたことについて評価したい。

5 日目後半で実施されたディスカッションは、沖縄キリスト教学院大学の新垣誠教授がファシリテートする形で行われた。ディスカッションは 2 つのセッションに分かれており、それぞれの国や地域が考える「戦争・紛争から得た教訓」と「平和構築と軍隊の在り方」についてテーマが設定されていた。第 1 セッションでは、それぞれの国・地域で起きた戦争・紛争の原因と、それを解決する方策について、今回の学びを通して得た内容を基に共有されており、非常に良かった。第 2 セッションでは平和を求める動き（理想）がある一方、各国・地域で軍拡や自衛力の増強（現実）という流れがある中、それをどう捉えるかという内容で議論が行われた。理想と現実のジレンマについて考える意図が感じられた。日本と海外チームのみならず、個人間においても意見の相違があり、それぞれの考えを共有するには時間不足だった事は否めない。しかし、結果的には、その議論が翌日のパネルディスカッションに繋がっていった事を考えると、評価を下げるほどでは無いと考える。

昨年度に引き続き、広島、長崎、沖縄の参加者は対面参加となったことから、彼らを対象に沖縄県平和祈念資料館、読谷村チビチリガマ、嘉手納飛行場、普天間飛行場、首里城跡及び第 32 軍司令部壕跡などをめぐる県内視察が行われた。海外と接続する共同学習以外の時間を有効に活用したこの取り組みは学習効果及び沖縄に対する理解を深めるために効果的であったと言える。

また、沖縄戦の体験継承に取り組む沖縄県平和祈念資料館友の会の久保田会長による講話を取り入れ、戦争体験者から実際に話を聞く機会が設定されたことも非常に良かった。

6日目の成果報告会は、一般の方々を来場者に迎え、参加者による各地域の学習テーマ発表のあと、パネルディスカッションが行われた。各地域の学習テーマの発表は、短い発表時間の制約がある中でコンパクトにまとめられていたが、今後は、「初めて知る歴史的事象を来場者に伝える」という視点を持ち、よりわかりやすく伝えるひと工夫を、学生並びに運営側にも期待したい。

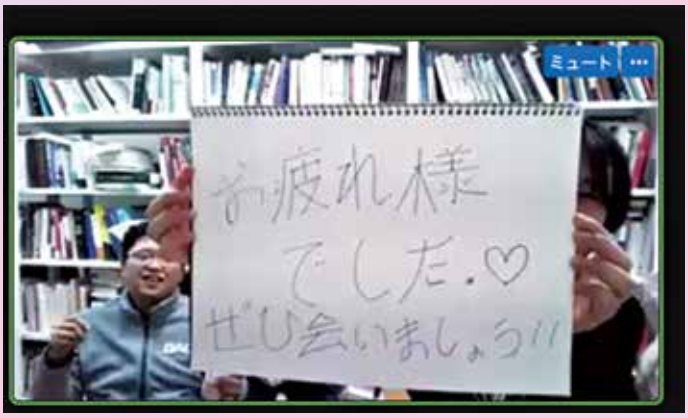
パネルディスカッションでは、沖縄キリスト教学院大学の新垣誠教授にモデレーターを依頼した。ハイブリッド開催や通訳時間によるタイムラグにも柔軟に対応しており、参加者の意見をまんべんなく引き出す進行技術は高く評価し、感謝したい。5日目のディスカッションから連続して行われたことで、より深みのある議論が展開されていた。昨年度に引き続き成果報告会の様子をYouTubeを通したライブ配信を行ったが、20名の方に視聴いただいた。今後は県の公式チャンネルでも配信するため、動画を多くの人に視聴してもらいたい。

以上のことから、事業の一部には発展の余地を残しつつも、総じてすばらしい事業であったとの評価に至った。事業が滞りなく終了できたのも、9月の事前学習から数ヶ月にわたり各地域の参加者を導いてくれた指導者の方々の尽力によるものであり、この場を借りてお礼を申し上げたい。

最後に、事業全体を通じて参加者の皆さんの積極的な姿勢に頼もしさを感じた。今日もウクライナや東アジアの情勢など依然として予断を許さない状況は続いており、平和な状態であるとは言い難い。また、感染症という人類の新たな脅威が日々の生活に変化を与え、今後も継続すると予想される。そのような状況の中、彼らは数年ののちに大人として自立し、社会の形成者となる。その心の片隅に本事業でアジアの友と語り合った「平和への思い」が根付き、日々の生活の中でも戦争を許さない努力を継続してくれることを願って、総括評価としたい。

第４部
資料編

1 研修の様子


ミュート
お疲れ様
でした。♡
ぜひ会いましょう!!

菊池涼介

❷ 報道記事

2022年11月9日　24面

琉球新報社　提供

戦争学び 教訓未来へ

広島・長崎・沖縄 若者、糸満で平和学習

沖縄戦77年

沖縄を含む5カ国7地域の大学生が参加する「『平和への思い』発信・交流・継承事業」（県平和祈念資料館主催）が、6日から県内で始まった。12日までの日程で、日本やアジアの若者たちが対面とオンラインでそれぞれの地域の戦争や内戦の歴史を学び、教訓を共有する。3日目の8日は、沖縄と広島、長崎の大学生16人が、糸満市の県平和祈念資料館や平和の礎で沖縄戦について学んだ。

県平和祈念資料館職員から「平和の礎」について話を聞く沖縄、広島、長崎の大学生ら＝8日、糸満市の県平和祈念公園

同事業は互いの国の歴史を認識し、アジア全体の平和を目指すことを目的に2019年に開始した。初年度はアジア各国の若者が来県して催されたが、新型コロナウイルスの影響を受け20年から海外の学生はオンラインで参加している。

8日午前は、日本の学生ら16人が対面で県平和祈念資料館職員や同館友の会の久保田曉会長（77）の話を聞いた。沖縄戦体験を語り継ぐ久保田会長に対し、広島の大学に通う藤田那乃羽さん（19）＝広島県＝は「戦争を全く知らない世代に伝える時に気をつけていることは？」と質問した。久保田会長は「身近な生活の話から始めて、戦争で生活の何が失われるのかを一つ一つ伝えている」と答えた。

藤田さんの祖母は長崎県出身で被爆者だ。父や親戚から祖母の戦争体験を伝え聞き、戦争に関心を持ったという。「私は愛媛出身で周りは戦争を知らない人が多い。沖縄や広島・長崎以外の地域の人たちに戦争体験をどうしたら伝えていけるのか考えたい」と述べた。

同日午後は韓国と台湾の学生が、オンラインで済州島の「4・3事件」や台湾の「2・28事件」について発表した。参加した渡邊心那さん（18）＝広島県＝は「海外の学生が平和に向けてどう行動しているのか学びたい」と話した。

9日は県内の戦跡や米軍基地を見学する。12日午後2時から、那覇市の八汐荘屋良ホールで「アジアの若者とつくるこれからの平和」と題し、公開シンポジウムを開催する。研修で学んだことを踏まえ、学生たちが「どうやって平和な社会をつくるか」を議論する。シンポジウムはYouTubeでも配信する。入場無料。問い合わせは沖縄平和協力センター、電話0098（866）4635。メールはhiguchi@opac.or.jp

（赤嶺玲子）

2022年11月16日　21面

平和実現 多様な学びで

那覇 3カ国学生が研修報告

県平和祈念資料館などが主催する「『平和への思い』発信・交流・継承事業」の成果報告会が12日、那覇市松尾の八汐荘で開かれた。沖縄、長崎、広島のほかオンラインで3カ国1地域から35人の大学生が参加した。

平和について考えを発信する大学生ら＝12日、那覇市松尾の八汐荘

6日間の研修で学んだ各国・地域で起きた戦争や事件の内容を紹介したほか、平和を維持するために必要なことなどについて考えを共有した。

県内4大学から参加した沖縄の大学生は沖縄戦の遺骨収集を体験したことを踏まえ、「記憶継承だけで次世代に（平和を）残すことはできない。受け身学習から遺骨収集など体感する学習が必要だ」と話した。

カンボジアの参加者は旧ポル・ポト政権で起きた虐殺について紹介し「子どもたちに多様な文化を教育して、人種や宗教差別をなくすこと。政治のイデオロギーに関しては核や軍事力を使わず、平和的な方法で解決すべきだ」と話した。

パネルディスカッションでは沖縄キリスト教学院大学の新垣誠教授がモデレーターを務めた。対立や分断を生む「不信感」を払拭する方法などについて意見を交わした。

広島の学生は、不信感の要因はお互いの情報不足だとして、市民レベルの交流が必要とした。また「インターネットで海外の新聞を読むなどして、日本国内の報道が正しいのか、他国から日本がどう見えているのか自分で情報をつかみに行く必要がある」との意見も出た。

（中村優希）

2022年11月11日　28面

沖縄タイムス社　提供

第32軍司令部壕について大城航さん（左）から説明を受ける学生たち＝10日、那覇市・首里城公園内

沖縄巡り平和構築模索

沖縄・広島・長崎の学生が研修

若い世代への戦争体験の継承などを目指す県主催の「『平和への思い』発信・交流・継承事業」の研修が6日から始まり、日本やアジアの大学生が平和構築に思いを巡らせている。沖縄、広島、長崎の学生は10日午前、首里城や第32軍司令部壕周辺を訪れ、沖縄の歴史を学んだ。

9日までに県平和祈念資料館や嘉数高台公園も訪ねた。大阪府出身で、広島の大学に通う松井結さん(19)はチビチリガマの見学が特に印象に残っているといい「遺骨を見て戦争について考えることはあったが、人が実際にいた場所だと思うと、どう言葉で言い表していいか分からない気持ちになった」と振り返る。「今ある問題から目をそらさず、各国の人と一緒に考えていきたい」と話した。

韓国から琉球大に留学中のウ・ユナさん(22)は「実際に沖縄で見聞きしながら、いろいろな経験ができるのがうれしい。済州島4・3事件や沖縄戦について勉強していきたい」と意欲を語った。

10日午後はオンラインでアジアの各地とつなぎ、広島の学生が「原爆投下」、ベトナムの学生が「ベトナム戦争」、カンボジアの学生が「カンボジア大虐殺」について発表した。

12日午後2時からは那覇市の八汐荘で、学生たちが学んだ内容を発表するシンポジウム「アジアの若者とつくるこれからの平和」が開かれる。

（社会部・儀間裕）

2022年11月13日　29面

平和の築き方 学生が議論

那覇でシンポ アジア各地の教訓学ぶ

原爆投下について報告する広島や長崎から参加した若者たち＝12日、那覇市・八汐荘

アジア7地域の大学生らによる共同学習研究を発表するシンポジウム「アジアの若者とつくるこれからの平和」が12日、那覇市の八汐荘で開かれた。県が主催する「平和への思い」発信・交流・継承事業の一環。若者35人が、それぞれの地域で起きた戦争の紹介や学びから得られた教訓などを報告した。海外の参加者はオンラインで発言した。

韓国のチームは、住民3万人余が犠牲となった済州島4・3事件を紹介。真実を追求することが犠牲者の名誉と権利を回復し、交流と連帯が平和をつくり出すと訴えた。沖縄のチームは遺骨収集に参加した経験から「記憶継承だけでなく、行動型学習を通して体感で平和について考えることが重要だ」と伝えた。広島や長崎、カンボジア、ベトナム、台湾のチームもそれぞれの学びを報告した。

パネルディスカッションは沖縄キリスト教学院大の新垣誠教授がモデレーターになり、平和のためにできることが話し合われた。戦争などのきっかけを生む「不信感」をどう取り除くかという新垣教授の問いかけに「左手に武器を持ち、右手で握手するのは難しい。核保有や軍事強化がお互いの不安をあおるなら、縮小するべきだ」などの意見が出された。

参加した沖縄大3年の本村杏珠さんは「さまざまな地域、国の若者間で対話を交えて学んだことで世界に目が向き、視野を広げることができた。今後は情報発信などを通し、平和や戦争の悲惨さを次世代に継承していきたい」と意気込んだ。

（社会部・普久原茜）

令和４年度「平和への思い（ウムイ）」発信・交流・継承事業
報告書

沖縄県

＜主　管＞沖縄県平和祈念資料館

＜受託者＞特定非営利活動法人　沖縄平和協力センター（OPAC）

※本報告書の内容を許可なく複写・複製・転載・翻訳することを禁じます。

Hope for peace
Okinawa 2022